

《翻 訳》

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャの
ドン・マヌエル王宛て書翰(1500年)
——ジャイメ・コルテザンの解説にもとづく全和訳, ならびにカミーニャの
言葉遣いに関する若干の文献学的考察——

Em torno da Carta de Pêro Vaz de Caminha dirigida ao Rei D. Manuel I
(1500): Uma tradução integral japonesa dela baseada tanto na leitura diplomática
como na sua adaptação para a linguagem moderna levada a cabo por Jaime
Cortesão e umas observações filológicas da linguagem de cariz arcaico pelo
escrivão empregada.

日埜 博司(HINO Hiroshi)

パスワード ペロ・ヴァス・デ・カミーニャの「書翰」(A Carta de Pêro Vaz de Caminha) 15世
紀末のポルトガル語(lingua portuguesa nos fins do século XV) 1500年のブラジル“発見”(O
“Descobrimento” do Brasil em 1500) ブラジル先住民(aborígenes do Brasil)

訳注者解題

インド産香辛料の獲得を主たる目的として、ポルトガル国王ドン・マヌエル1世は1498年、ヴァスコ・ダ・ガマをインド派遣船隊の総司令官(カピタン=モール)に任命する。ガマは、喜望峯廻りでインド洋に入り、メルンデ(現、ケニア共和国マリンディ)からはムスリムの水先案内人の助力を得、インド亜大陸西海岸のカレクテー(ポルトガル語表記。現地の公用語マラーラム語ではコーリコード。英語呼称はカリカット)へ到達、ヨーロッパとインドを海路で直結する航路の開拓に成功する。ガマが所期の目的を果たし、リスボアへ帰航したのは1499年。ガマの成功に励まされたポルトガル王室は、第2次船隊のインド派遣を決める。その総司令官に任命されたのが、ペドロ・アルヴァレス・カブラルというベルモンテ生まれの貴族であった。

1500年3月9日、13隻からなるカブラル船隊は、リスボア近郊のベレンを出航。3月14日午前、カナリア諸島中最大のグラン=カナリア島を通過後、3月22日にカボ・ヴェル

デ沖に到達、赤道を通過する頃から、「ヴォルタ・ド・マール」という航海術を用い、アフリカ大陸からは意識的に遠ざかる針路をとる。これは時計の針の反対廻りに大きく弧を描くような航路をとることで、無風帯にとどまる危険を避けるとともに、徐々に知られつつあった海流と季節風の向きを活用し、そうしてより速やかに喜望峰を廻りインド洋へ入るための新航法であった。ところがカブラル船隊は、ブラジルの地に接近(これが偶然によるものであったか意図的なものであったか、については積年の議論があるのだが、現在は後者が遙かに優勢である)。4月21日、水夫が海に浮かぶ海草を見て陸地の近いことを確信し、4月22日、船隊は、モンテ・パスコアール(復活祭の山)と命名される山を望見する沖合でいったん投錨。4月23日、総司令官カブラルはみずからの旗艦にそれぞれの船の司令官を召集、会議を催し、司令官のひとりニコラウ・コエーリョを陸へ送り探索を行なわせることに決する。コエーリョは上陸し、先住民とのあいだで“贈り物”の交換を行なう。コエーリョが戻った後、カブラルはさらに北行することを決め、4月24日、大船隊を收容しうる安全な泊地を見出し、そこにおよそ一週間投錨、この泊地をカブラルはポルト・セグーロ(「安全堅固なる港」と命名する。現在のブラジル東北部バイーア州バイーア・カブラリア周辺がその地点にはかならない。4月26日、復活祭の日曜日、先住民の好奇の視線を受けつつ、カブラルは祭壇を造らせ、フランシスコ会士フレイ・エンリケ・デ・コインブラ師の司式によりブラジル最初のミサ聖祭が行なわれる。カブラルは、この新天地がトルデシーリャス条約によって引かれたイスパニア=ポルトガルの勢力分界線の東側にあることを確信、ポルトガルの領有に帰すべき土地であることを宣言するため、5月1日、現地に生えている木から十字架を作らせ、再びミサ聖祭を挙げる。この十字架にちなみカブラルは、この地をテラ・ダ・ヴェラ・クルス(「真実の十字架の土地」と命名。5月2日、カブラルは、ここまで補給船として用いてきた船をひとあし先にポルトガルへ帰航させることを決め、ブラジル“発見”の第一報をポルトガル王室へ伝えることに成功する。

カブラル一行が遭遇し交流したのは、現在のベーリング海峡が太古陸橋であった頃、それを伝い、ユーラシア大陸からアメリカ大陸へ移り、拡散していったモンゴロイドの遺伝子を継承する人々。カブラル一行が出逢ったのは、トゥピニキン(tupiniquim)と呼ばれる種族であり、彼らはトゥピー語(tupi)と呼ばれる文字のない言語を有していた。石器時代のような狩猟・漁労・採集生活を送る人々であり、火を使用するが、金属のたぐいはまったく知らなかった。カミーニャ自身の見聞ではないが、「書翰」には、浜をやや離れた一帯の探索を命ぜられた流刑囚アフォンソ・リベイロらからの情報を用い(情報源をきちんと明

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

示しているのも好ましい執筆態度だ）、トゥピニキンの集落、特に彼らの住居に関する知見が見えるのは貴重だ。仕切りのない大きな家に多人数が雑居し、柱と柱の間に吊るした“眠り網”（すなわちハンモック）で眠り、冷える夜は、その下で火を熾し暖をとるようすも伝えられる。ブラジル先住民のうち少なくとも幾つかの種族は食人習慣（canibalismo）を有しており、カブラル一行より僅かに後、1501年から02年にかけて、ブラジル東海岸を探索したフィレンツェの人アメリゴ・ヴェスプッチの著書『ムンドウス・ノヴス（新世界）』（アウグスブルク、1505年刊）のためヨハン・フロシャウアー（Johann Froschauer）の作成した木版画にはさっそく、ブラジル先住民の食人習慣のようすが彫り込まれている。ところがカミーニャには、食人習慣にふれる記述がまったく見えない。

ポルトガル人とブラジル先住民の初コンタクトが平和的に推移したことを知りうるのは、カミーニャがその現場に臨み日録風の筆を丹念に走らせてくれたおかげであり、さらに嬉しいのは、時間の経過とともに親密さの増してゆく微笑ましい交流のありさまが、生き生きとした筆致で我らへ伝えられたことだ。

たとえば、ポルトガル人が搭載していた食糧を先住民に食べさせたり、葡萄酒を飲ませたり、生きた鶏などを見せたりすることによって、彼らがどんな反応を示すか、好奇心の赴くまま“調査”したこと。カブラルの旗艦へ“招待”したふたりが眠り込んでしまったのを幸い、彼らの身につけていた鳥の羽製の華麗な被り物をじっくり観察し、彼らが隠そうともせぬ陰茎を見、割礼の施されていないのを確認したこと（これにより、彼らがユダヤやイスラームの教えを奉じていないことが明瞭となり、ポルトガル人からすれば、カトリック布教に対する障害なり懸念がひとつ払拭されたことになる）。打ち解けた先住民を相手にディオゴ・ディアスという船員がカポエイラまがいの踊りに興じたこと。水を補給するのに用いた樽を浜から船へ運び込む作業を、先住民の男たちが手伝ってくれたこと（手伝ったうえで見返りの品を何か寄越すよう求めた、というのがおもしろい）、等々。

カミーニャの伝えるエピソードのうちとりわけ意味深長に思われるのは、あらん限りの身振り手振りを用いて、この地に金（ouro）があるのかないのか、を繰り返して先住民に訊ねようとするポルトガル人の異様な執念であろう。先住民の見せるしぐさのひとつひとつから、これはひょっとして金の存在を示すサインではないか、とあらぬ“希望的観測”をたくましくするポルトガル人の姿が、何とも可笑しい。インカ帝国のペルー、アステカ王国のメヒコ（メキシコ）で極めて高度な文明を営んでいた先住の民がイスパニア人の毒牙にかけられ徹底的な破壊と殺戮を蒙ったその主因が、そこに産出した豊富な金のせいであつ

てみれば、ブラジル植民最初期に金の発見されなかったことは、ブラジルにとっては無論ポルトガルのためにも幸運であった、と評するのはナイーブに過ぎるであろうか。

このたび紹介する「書翰」(ポルト・セグーロ発, 1500年5月1日付, ドン・マヌエル1世宛て)の執筆者ペロ・ヴァス・デ・カミーニャの生涯を略述しておく。

ポルトの新興市民階層に属する家の出身であったろうと推測されるカミーニャは、アフォンソ5世(在位1438~81), ジョアン2世(在位1481~95), マヌエル1世(在位1495~1521)の王室で騎士として奉仕しつつ1476年, 要職と見なされていた造幣検査官(mestre da balança da Casa da Moeda)の地位を父から継承する。さらに1497年, ポルト市の行政・法制参事官(vereador)の一員として, 翌年, リスボアで開催されることになる, コルテス(Cortes. 身分制議会。国王の召集のもと貴族・聖職者・市民の各代表が参加)への異議上申書(capítulos)の起草を委嘱されるなど, ポルト市政に相当の影響力を行使する名士であったようだ¹。インド亜大陸西岸のカレクテーに設立しようとする商館のエスクリヴァン(書記)という役職に就くことを, カミーニャはリスボア出航前から求められていたためであろう, 彼はカブラルの旗艦への搭乗を命ぜられる(旗艦に搭乗したからとて絶対の安全が保証されるはずはなく, 最終目的地のインド西海岸で所期の目的を果たし, 無事リスボアへ帰還したのは, カブラル船隊を構成した13隻中, わずかに7隻)。

カミーニャは元来, 新たに到達したテラ・ダ・ヴェラ・クルス(後のブラジル)で生じみずから体験したことを, 公式に記録する義務を帯びてはいなかった。ポルト・セグーロに滞在中, カブラルからブラジル“発見”に関する報告書を急遽作成するよう, 命ぜられたとも思われない。「書翰」は一読して明らかな如く, カミーニャ自身の内面から湧き出る好奇心の赴くまま, 味わい深くも平明なスタイルで書き進められる。おざなりな官僚的義務感からは生まれ得ぬ率直ながら雅趣に富む文章。「書翰」が貴重な民俗誌であることに加え, 一種の旅行文学(Literatura de Viagens)としても優作と評されるゆえんはそこにある。禁断の林檎を食べる前にアダムが享受していた inocência primitiva(原初の無邪気さ)をもって暮らす——カミーニャにはそう思われた——先住民トピニキン。その風貌やしぐさや身なり(裸体だが種々のお洒落を施している)を, ときにユーモラスに, ときに巧まぬ言葉の遊びを交えつつカミーニャは描き出す。驚きに値するのは, 末尾にさしかかる頃, 唐突

¹ Cf. Joel Serrão (ed.), *Dicionário de História de Portugal*, I, Lisboa, Iniciativas Editoriais, 1971, Caminha の項。ヨーロッパ中世史における幾つかの専門用語について, 関哲行氏(イスパニア中世史)の教示を賜った。

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）に提示されるひとつの“直訴”であろう。アフリカ大陸西岸のサン・トメ島へ流刑に処された婿（^{むこ}ジョルジェ・デ・オゾーリオ。本国で傷害事件を犯したらしい）が赦免され本国へ召還されるよう、カミーニャは人もあろうに、マヌエル王その人へ懇願しているのである（安直なレッテル貼りかもしれぬが、“ラテン気質”のしからしめる^{おぼ}業か）。



ペドロ・アルヴァレス・カブラル像

ペドロ・ジョゼ・デ・フィゲイレード著『ポルトガル古今偉人肖像・伝記集』（1817年、リスボア刊）と題しうる古書に現われる肖像画。Pedro José de Figueiredo, *Retratos, e elogios dos varões, e damas, que illustram a Nação Portuguesa em virtudes, letras, armas, e artes, assim nacionaes, como estranhos, tanto antigos, como modernos*, Lisboa, 1817より



ペロ・ヴァス・デ・カミーニャの紋章

História da Colonização Portuguesa do Brasil, Porto, Litografia Nacional, 1923 より

カミーニャのしたためた「書翰」は、ポルトガルへひとあし先に帰航する補給船(先述)へ託された。この船はリスボアへ安着、「書翰」もドン・マヌエルの上覧に供されたはずだが、ポルトガル王室が植民政策に関して布いていた厳重な秘密政策のせいであろう、ただちに翻刻され印刷される機会はなかった。マヌエル・アイレス・デ・カザール神父によって初めて翻刻され *Corografia Brasileira* 『ブラジル地誌』という書物に印刷されたのは遙か後世、1817年のことである。「書翰」は現在、リスボアのトーレ・ド・トンボ国立文書館 (Arquivo Nacional da Torre do Tombo) の至宝として大切に保管されている。

テーラ・ダ・ヴェラ・クルス(ブラジル)を離れたカミーニャは、再びカブラル船隊の一員となり、インド西海岸への航海を継続、カレクーテへ赴き、ここに商館を設け、香辛料獲得の交渉に従うのだが、当地ムスリムやヒンドゥー商人のポルトガル人への反感は思いのほか強く、彼らにそそのかされた武装集団が大挙、カレクーテのポルトガル商館を襲撃、50～60人のポルトガル人がその犠牲となる。この事件に巻き込まれたカミーニャも不幸にして横死。享年は50くらいだったと思われる。この事件に怒ったカブラルは、商館襲撃

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）への復讐を果たすため、カレクテーの港に停泊していたムスリムの商船群を攻撃、これを略奪するとともに、サモリン（当時カレクテーを支配していた王の称号）の統治するカレクテー市街へ砲撃を加えた。その後カブラルはコーチンへ南下、その支配者と友好関係を築き、香辛料の獲得にも成功して、1501年リスボアへ帰着、マヌエル王の歓迎を受ける。

ところで、訳者は1981年、ブラジル・リオデジャネイロ州ニテロイ市にあるフルミネンセ連邦大学文藝研究院(Universidade Federal Fluminense, Instituto de Letras, Niterói, RJ)に籍を置き、著名なブラジル人ポルトガル語学者グラッドストーン・シャーヴェス・デ・メロ教授(Professor Gladstone Chaves de Melo)の指導を仰ぎつつ、「カミーニャの書翰」をめぐる文献学的研究にいそしんだ。与えられた研修期間は1ヵ年弱。その短さに鑑み聴講するゼミナールはグラッドストーン先生のそれに限定することを早々と決断^{はやばや}、教授の著述を熟読することに専念するとともに、アルカイック晩期の古いポルトガル語で書かれたカミーニャの文章を一言一句熟慮し吟味した。溜め込んだ質問に一週一度、快く真摯に答えてくれたグラッドストーン先生の高潔にして孤高の人柄を、その学恩を私は生涯忘れぬであろう。

カミーニャが用いる15世紀末のポルトガル語を学ぶにあたり、私が留意したのは現代語とは様相を異にするアルカイズムの要素であり、しかもそれらの要素は現代ブラジルのポルトガル語——特に日常語——に豊富に認められる、という言語的事実である。

ポルトガルからの独立を果たし、言語ナショナリズムの高揚を経験したブラジルでは、イベリア半島のポルトガル語とブラジルのそれとの間に存する、本質的、とは評し得ぬ差異をことさらあげづらい（ふたつのポルトガル語を決定的に分かつような文法上の差異は、両者間に断じて存在しない）、“ブラジル語”の独立をファナティックに高唱する論者が一時期、跋扈を見たことがあった。ところが皮肉なことに、彼らが両者間に存するという“差異”を強調すればするほど、“ブラジル語”なるものの存在は否定されてゆく、とグラッドストーンは論ずる。つまり、現代ブラジルの、特にその民衆の言葉には、15～16世紀のポルトガルにおいて一般的でありながら、現今のポルトガルで消滅してしまったもろもろの言語現象が、色濃く遺っているのだ（語彙・構文・発音の諸相で）。そこから次のような結論を、グラッドストーン教授は——重厚な文献的証拠に拠りつつ——導き出す。いわく、「ブラジルのポルトガル語は、ヨーロッパのポルトガル語にも増して〈ポルトガル語〉である」と。

「カミーニャの書翰」は、ジャイメ・コルテザン²、カロリーナ・ミカエリス・デ・ヴァスコンセ

² Jaime Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, Lisboa, Portugal, [1967] (Obras Completas de Jaime

一ロス³, レオナルド・アローヨ⁴ら, 優れた歴史家・文献学者の手により, 解読と解釈, さらに現代語訳に及ぶ豊かな研究の蓄積が存在する。比較的新しい校訂テキストとして, ジョアキン・ロメーロ・マガリャンイスら⁵によるものを挙げておく(ペドロ・アルヴァレス・カブラル船隊に関わるトーレ・ド・トンボ所蔵文書 14 点——むろん「書翰」を含む——が翻刻され検討される)。和訳のテキストに用いたのは, 上記 3 大家のうち最も信を置きうる, と私が考えるコルテザンの原文翻刻(leiura diplomática)および現代ポルトガル語訳(adaptação para a linguagem moderna)である。彼らが独自に行なうそれぞれの原文解読の間には微妙な不一致が僅かに認められ, 少々脚注を施してその問題に言及する。なかんずくカロリーナ・ミカエリスが行なう解釈には, 女史の宗教的・倫理的立場が反映していると思われるケースもあり, 特に興味深く思われた。

「カミーニャの書翰」は全 14 フォリオからなり, それぞれに recto(表)と verso(裏)がある。「書翰」本文は 14 フォリオ表で終了し, 14 フォリオ裏には, トーレ・ド・トンボの管理担当者がメモか整理のため書き込んだもの, とされる若干の文言が見える。ジャイム・コルテザンによる原文翻刻および現代ポルトガル語訳をフォリオごとに掲げ, それぞれの末尾にたとえば [F. 1] などというフンプルを記入するが, それはそこまでが [F. 1] に記載された文であることを意味する。拙訳の記載はそれぞれのフォリオごとに行なう。

和訳中, 文脈的な補足はこれを〔 〕に入れ, 本文と同じフォントサイズ 10.5 で, 最も短い注記はこれも〔 〕に入れたが, フォントサイズを 9 に落とし, それぞれ印刷した。

ジャイム・コルテザンによる原文翻刻・現代ポルトガル語訳(附, 拙訳および若干の日本語補注)

Señor

posto queo capitam moor desta vossa frota e asy os

Cortesão, XIII).

³ Carlos Malheiro Dias, “Semana de Vera Cruz (com versão em linguagem actual, com anotações da Doutora D. Carolina Michâelis de Vasconcelos)” in *História da Colonização Portuguesa do Brasil*, Edição monumental comemorativa do primeiro centenário da Independência do Brasil, Porto, Litografia Nacional, 1923.

⁴ Leonaldo Arroyo, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha: ensaio de informação à procura de constantes válidas de método*, [São Paulo], Melhoramentos / [Rio de Janeiro], INL-MEC, 1971.

⁵ *Os primeiros 14 documentos relativos à Armada de Pedro Álvares Cabral*, ed. Joaquim Romero Magalhães & Susana Münch Miranda, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999 (Coleção Outras Margens).

outros capitaães screpuam avossa alteza anoua do acha
mento desta vossa terra noua que se ora neesta naue
gaçam achou. nom leixarey tam bem de dar conta disso
minha comta avossa alteza asy como eu millhor
poder ajmda que perao bem contar e falar o saiba
pior que todos fazer. / pero tome vossa alteza minha
jnoramçia por boa vomtade. aqual bem çerto crea ã
por afremosentar nem afear aja aquy de poer ma
is caaquilo que vy e me pareceo. / da marinha
jem e simgraduras do caminho nõ darey aquy cõ
ta a vossa alteza por queo nom saberey fazer e os
pilotos deuem teer ese cuidado e por tanto Snõr
de que ey de falar começo e diguo. /
que apartida de belem como vosa alteza sabe foy seg^a
feira ix demarço. e sabado xiiij do dito mes amtre
as biij e ix oras nos achamos amtre as canareas
mais perto da gram canarea e aly amdamos todo
aquele dia em calma avista delas obra de tres ou
quatro legoas. e domingo xxij do dito mes aas
x oras pouco mais ou menos ouemos vista dasjlhas
do cabo verde. s. dajlha de sã njcolaa seg.^o dito de p^o
escolar piloto. e anoute segujmte aaseg^{da} feira lhe
amanheceo se perdeo da froa vaasco datayde com
a sua naao sem hy auer tempo forte nõ contrairo
pera poder seer. fez ocapitam suas deligençias perao
achar ahuñas e a outras partes e nom pareceo majs
Easy segujmos nosso caminho per este mar delomgo
ataa terça feira doitauas de pascoa que foram xxj
dias dabril que topamos alguũs synaaes de tera
seemdo da dita jlha seg^o os pilotos deziam obra de
bj^o lx ou lxx legoas. os quaaes herã mujta cam
tidade deruas compridas aque os mareantes

chamã botelho e asy outras aque tam bem chamã
rabo dasno. / E aaquarta feira segujnte pola ma

[Fol. 1]

Senhor:

Posto que o Capitão-mor desta vossa frota, e assim os outros capitães escrevam a Vossa Alteza a nova do achamento desta vossa terra nova, que nesta navegação agora se achou, não deixarei também de dar minha conta disso a Vossa Alteza, o melhor que eu puder, ainda que – para o bem contar e falar –, o saiba fazer pior que todos.

Tome Vossa Alteza, porém, minha ignorância por boa vontade, e creia bem por certo que, para alindar nem afear, não porei aqui mais do que aquilo que vi e me pareceu.

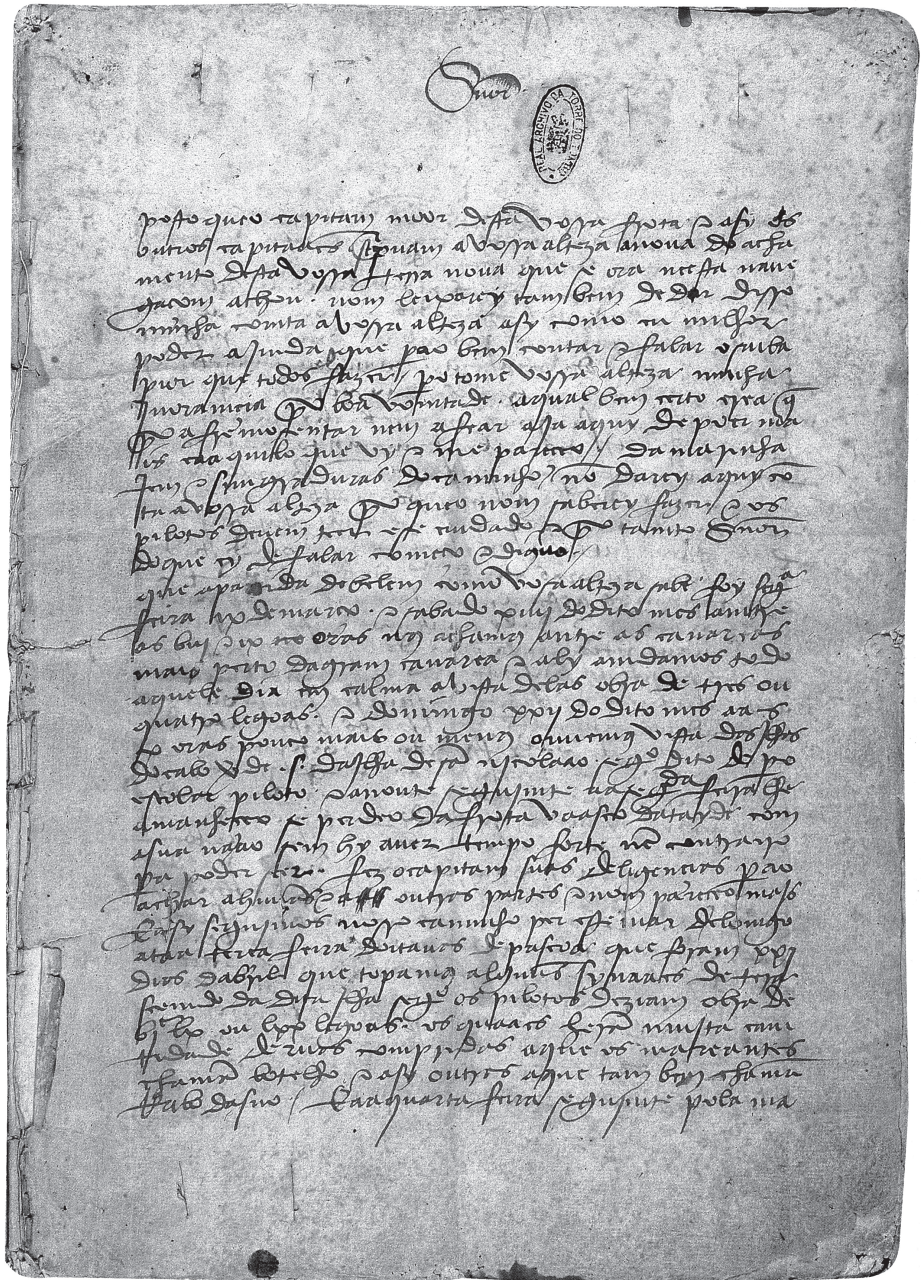
Da marinagem e singraduras do caminho não darei aqui conta a Vossa Alteza, porque o não saberei fazer, e os pilotos devem ter esse cuidado. Portanto, Senhor, do que hei-de falar começo e digo:

A partida de Belém, como Vossa Alteza sabe, foi, segunda-feira, 9 de Março. Sábado, 14 do dito mês, entre as oito e as nove horas, nos achámos entre as Canárias, mais perto da Grã-Canária, onde andámos todo aquele dia em calma, à vista delas, obra de três a quatro léguas. E domingo, 22 do dito mês, às dez horas, pouco mais ou menos, houvemos vista das Ilhas de Cabo Verde, ou melhor, da Ilha de S. Nicolau, segundo o dito Pêro Escolar, piloto.

Na noite seguinte, segunda-feira, ao amanhecer, se perdeu da frota Vasco de Ataíde com sua nau, sem haver tempo forte nem contrário para que tal acontecesse. Fez o capitão suas diligências para o achar, a uma e outra parte, mas não apareceu mais!

E assim seguimos nosso caminho, por este mar, de longo, até que, terça-feira das Oitavas de Páscoa, que foram vinte e um dias de Abril, estando da dita ilha obra de 660 ou 670 léguas, segundo os pilotos diziam, topámos alguns sinais de terra, os quais eram muita quantidade de ervas compridas, a que os mareantes chamam botelho, assim como outras a que dão o nome de rabo-de-asno. E, quarta-feira seguinte, pela ma

[Fol. 1]



ペロ・ヴァス・デ・カミーニャの「書翰」

第1葉、ポルトガル国立トーレ・ド・トンボ文書館(Arquivo Nacional da Torre do Tombo)蔵

陛下

このたび行なわれた、陛下の新しき領土との遭遇について、陛下の船隊の総司令官、およびその他もろもろの司令官たちが、陛下宛て、報告をしたためてはおりますが、私もまたできる限りつばに——もつとも、それを語り述べることにかけて、私はすべての方々に劣るのでありますが——、それに関する報告を行わずにはおれません。しかしながら、陛下よ、〔才筆とは無縁の〕私の至らなさを、どうか快くお受け入れくださいますよう。私としては、本報告をことさらに飾りたてぬよう、また汚さぬよう、実見したことと感ぜられたこと、それ以外はここに記しません。その一事の確かさに信をお置きくださいますように⁶。

⁶ この執筆態度は、ヨーロッパ・ルネッサンス精神の洗礼を受けた開明的知識人としてのカミーニャの面目躍如たるものがあるであろう。中世ヨーロッパにおいても、幾人かの著述家が、非ヨーロッパ世界に関する異文化・異文物の描写を行なうが、彼らの描く非ヨーロッパ像は、おしなべて「異なるもの・人」に対する偏見・錯誤に満ちたものであった。これに対し、大航海時代のイベリア人観察者は、みずからの五感で新奇な文物を文字どおり体感、そうして獲得した知見・情報にもとづき、対象エリアの民俗誌・地誌・歴史などを執筆するようになる。

日本近世史家ロナルド・トビは、「大航海時代」に替わる新たなタームとして、「大遭遇時代」を提唱する（同『鎖国』という外交』『全集 日本の歴史』9〕、小学館、2008年）が、なるほどそう言われてみれば、カミーニャの「書翰」などまさに「遭遇」の賜物にほかなるまい。

ポルトガル人ドミニコ会宣教師ガスパール・ダ・クルスに『中国誌』という著書がある (*Tractado em que se cõtam muito por estêso as cousas da China, cõ suas particularidades, e assi do reyno dormuz cõposto por el. R. padre fray Gaspar da Cruz da ordẽ de sam Domingos, Évora, 1569. Biblioteca Nacional de Portugal, res-386-p.* 幾つかの校訂本のうち、Raffaella D'Intino (ed.), *Enformação das Cousas da China: Textos do Século XVI*, Lisboa, Imprensa Nacional-Casa da Moeda, 1989) などが優れる。新人物往来社刊『ガスパール・ダ・クルス 中国誌——附、1569-70年エヴォラ刊原著初版本(コインブラ大学総合図書館蔵 影印)』(1996年) および講談社学術文庫版『クルス 中国誌——ポルトガル宣教師が見た大明帝国』(2002年)は、いずれも拙訳書。

クルスは16世紀半ば、嘉靖帝時代の明代シナを広東を中心に訪れ、主として華南の文物を専一に扱う点、ヨーロッパ初といふべきこの見聞記を著わすのだが、劈頭、^{ヘキトウ}「読者への注意」(Auiso aos lectores)でこう記す。「読者は私から、溢れんばかりの雄弁や、語彙を組み合わせるに際しての装飾を期待してはなりません。ただ私とその飾り気のない叙述において忠実かつ真正であることに満足していただくかねばなりません」(“Ho lector nam esperara de mi abundância de eloquência, e ornamento em cõposiçã de palavras, somête se cõtete cõ eu ser fiel e verdadeiro na singella narraçãm,”)と。

ともにポルトガル人ではあるが、身分も地位も異なるカミーニャとクルス。そのふたりが談合したわけでもないのに、これまでヨーロッパでは未知であった文物を描写する著述で、みずからの執筆態度に関し、ほぼ同趣旨と言ってよい文言を特記しているのは、まことに興味深いと思う。

シナのみならず日本、アフリカ、インド、東南アジア、さらにはアメリカ新大陸で、イベリア人観察者が観察した新奇な文物を、努めて客観的に——人種的偏見を克服したとは到底言えぬにせよ——眺めようとする姿勢。これが、たとえば、モンテーニュ『エッセー』に見えるような、異文化・異文明への柔軟かつ寛容な

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

陛下に対し、ここでは操船のありさま、および航跡に関する報告はいたしません。それを行なうことは私の能力を超えるでしょうし、その心配りは航海士たちの責務に属するからであります。それゆえ、わが君よ、これこそ私が述べねばならぬ、そのようなことから始めることにし、次のとおり申し述べます。

陛下も御存じのとおり、[わが船隊の]ベレン⁷出発は、3月9日、月曜日のことであります。同月14日、土曜日、8時から9時にかけて、私たちは、カナリア諸島中、グラン・カナリア島へ最も近いところにおりました。同諸島をおおよそ3〜4レグア⁸のかなたに望みつつ、その近くを終日静穏のうちに航しました。3月22日、日曜日、おおよそ10時頃、カボ・ヴェルデ諸島を、航海士ペロ・エスコラールの申すところに従って、より正しくは、サン・ニコラウ島を、私たちは望見しました。

次の夜、月曜日、夜が明け染める頃、ヴァスコ・デ・アタイーデが、そのナウ船ともども船隊から姿を消しました。そんなことを引き起こす因となりうる荒れた天候も、過酷な気象条件もなかったのでありますが。総司令官は、あちらこちら彼を捜索する努力を払いましたが、[アタイーデのナウ船は]もう姿を現わしませんでした。

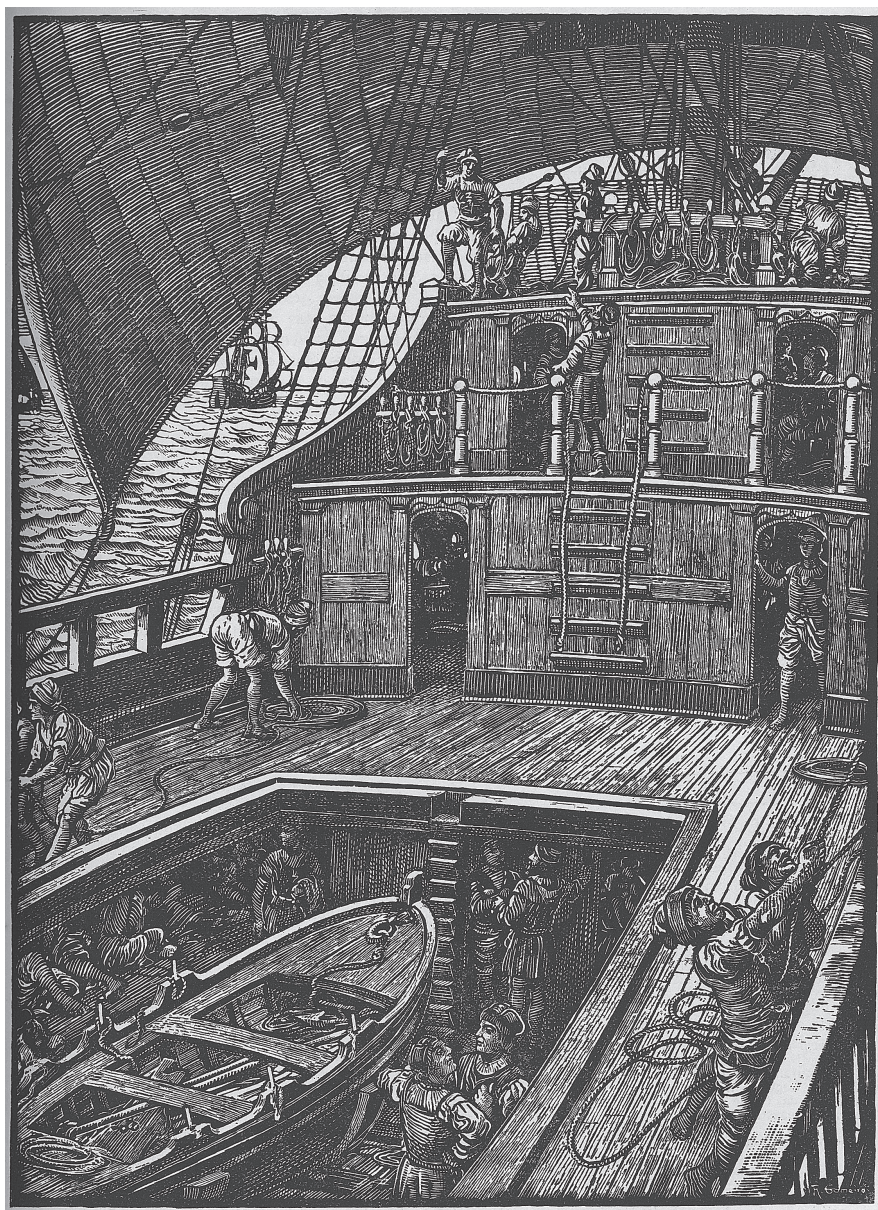
かくて私たちは、復活祭⁹直前の火曜日、すなわち4月21日まで、東から西へ、さらに航程を進めました。上述のサン・ニコラウ島から、航海士たちの言葉によると、660あるいは670レグアの位置にいたとき、私たちは陸地の兆候にぶつかりました。陸地の兆候とはすなわち、船乗りたちがポテーリオと呼ぶ大量の長い海藻、それから、ラボ・デ・アズノ[直訳して「驢馬^{ろば}の尻尾」と呼ばれる別種の海藻、であります。翌水曜日[4月22日]の朝方、私たちはフラ・ブシヨ[直訳して「胃袋破り」と呼ばれる鳥に出逢いました。

視線、あるいは文化相対主義の萌芽とでも評しうる態度をかたちづくる素地となってゆく。

⁷ リスボア西郊。今日、世界遺産ジェロニモス修道院(Mosteiro dos Jerónimos)やベレンの塔(Torre de Belém)のある地区。大航海時代、インドやブラジルへ赴くポルトガル船隊はベレン地区で、国王も臨席する盛大なセレモニーをもって見送られた。

⁸ イスパニア語・ポルトガル語圏で往昔用いられた距離の単位。時代・国によりその長さは異なるが、大体は4キロメートルから7キロメートルの間に収まるとされる。基本的には、日本の「里」の如く、徒歩で一時間に進める距離を表わし、ポルトガルでは約5キロメートル。

⁹ ジェズ・クリストの復活を記念するカトリック教会で最も重要な祝日。毎年3月21日(春分)以降の満月の後、最初の日曜日に行なわれる祭事。その満月が日曜日と重なれば、次の日曜日へ移動する。



16 世紀ポルトガルのナウ船内(その 1)

中央上から船首方向を見る。ブラジル独立 100 周年を記念する出版物の編者のひとりロケ・ガメイロ (Roque Gameiro) が厳密な考証にもとづき描いたもの。ナウは大航海時代にポルトガルが用いた大型船で、16 世紀後半、極東海域におけるポルトガルの制海権が安泰であった頃、日本へ渡来した船もこのタイプであった。腐食を防ぐタールで真っ黒に塗装しており、日本人からは「黒船」と呼ばれた。*História da Colonização Portuguesa do Brasil* より



16世紀ポルトガルのナウ船内(その2)

中央上から船尾方向を見る。同前

nhaã topamos aves aque chamã fura buchos e
neeste dia aoras de bespera ouuemos vjsta de tera s.
premeiramente dhuũ gramde monte muy alto. e
redondo e doutras serras mais baixas ao sul dele
e de tra chaã com grandes aruoredos. ao qual
monte alto ocapitam pos nome omonte pascoal
E aatera atera davera cruz. mandou lamçar op
rumo acharam xxb braças e al sol posto obra de bj
legoas de tera surgimos amcoras em xix braças
amcorajem limpa. aly jouuemos todaaquela nou
te. e aaquimta feira pola manhaã fezemos vella
e segujmos dir^{tos} aaterra eos naujos pequenos diã
te himdo per xbij xbj xb xiiij xij xij x.
e ix braças ataa mea legoa de tra omde todos
lancamos amcoras em dir^{to} daboca dhuũ rrio
e chegariamos aesta amcorajem aas x oras pouco
mais ou menos e daly ouuemos vista dhomeês ã
andauam pela praya obra de bij ou biiij seg^o os
naujos pequenos disseram por chegarem primeiro... /
aly lancamos os batees e esquifes fora evieram
logo todos los capitaães das naaos aesta naao do
capitam moor e aly falaram. e ocapitam man
dou no batel em tra njcolaa coelho peraveer aãle
rrio e tamto que ele comecou perala dhir acodirã
pela praya homeês quando dous quando tres
de maneira que quando obatel chegou aaboca
do rrio heram aly xbij ou xx homeês pardos
todos nuus sem nhuã cousa que lhes cobrisse suas
vergonhas. traziam arcos nas mãs esuas see
tas. vijnham todos rrijos perao batel e nicolaa co

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

elho lhes fez sinal que posesem os arcos. e eles
os poseram. aly nom pode deles auer fala nẽ entẽ
dimento que aproueitasse polo mar quebrar na
costa. soamente deulhes huũ barete vermelho e
huũa carapuça de linho que leuaua na cabeça
e huũ sombreiro preto. E huũ deles lhe deu huũ

[Fol. 1 v]

nhã topámos aves a que chamam fura-buxos.

Neste dia, a horas de véspera, houvemos vista de terra! Primeiramente dum grande monte, mui alto e redondo; e doutras serras mais baixas ao sul dele; e de terra chã, com grandes arvoredos: ao monte alto o capitão pôs nome – o MONTE PASCOAL e à terra TERRA DA VERA CRUZ.



海上から遠望するモンテ・パスコアル（「復活祭の山」）

カブラル船隊が1500年4月22日の宵、最初に望見したブラジルの陸地こそ「たいそう高く、円錐形の、堂々たる山、そしてその南につらなるより低い山塊、さらには鬱蒼たる樹林のおい茂る平らかな土地」であった。Max Justo Guedes, “O descobrimento do Brasil” in *Oceanos*, núm. 36, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999 より

Mandou lançar o prumo. Acharam vinte e cinco braças; e, ao sol posto, obra de seis

léguas da terra, surgimos âncoras, em dezanove braças – ancoragem limpa. Ali permanecemos toda aquela noite. E à quarta-feira, pela manhã, fizemos vela e seguimos direitos à terra, indo os navios pequenos diante, por dezassete, dezasseis, quinze, catorze, treze, doze, e dez e nove braças, até meia légua da terra, onde todos lançámos âncoras em frente à boca de um rio. E chegaríamos a esta ancoragem às dez horas pouco mais ou menos.

Dali avistámos homens que andavam pela praia, obra de sete ou oito, segundo disseram os navios pequenos, por chegarem primeiro.

Então lançámos fora os batéis e esquifes; e vieram logo todos os capitães das naus a esta nau do capitão-mor, onde falaram entre si. E o capitão-mor mandou em terra no batel a Nicolau Coelho para ver aquele rio. E tanto que ele começou de ir para lá, acudiram pela praia homens, quando aos dois, quando aos três, de maneira que, ao chegar o batel à boca do rio, já ali havia dezoito ou vinte homens.

Eram pardos, todos nus, sem coisa alguma que lhes cobrisse suas vergonhas. Nas mãos traziam arcos com suas setas. Vinham todos rijamente sobre o batel; e Nicolau Coelho lhes fez sinal que pousassem os arcos. E eles os pousaram.

Ali não pôde deles haver fala, nem entendimento de proveito, por o mar quebrar na costa. Deu-lhes somente um barrete vermelho e uma carapuça de linho que levava na cabeça e um sombreiro preto. Um deles deu-lhe

[Fol.1 v]

同日、宵¹⁰の刻限、私たちは陸地を望見しました。それは、たいそう高く、円錐形の、

¹⁰ 「宵」「夕」を意味する *vespera* を、カミーニャは *bespera* と綴る(現在式綴りは *véspera*)。va, ve, vi, vo, vu を ba, be, bi, bo, bu と発音するカステイーリャ語の発音は、日本人学習者にとって、ポルトガル語の va, ve, vi, vo, vu より、明らかに容易ではあるが、v と b を意識して弁別することを叩き込まれた外国人のポルトガル語学習者から見ると、カステイーリャ語の v は、むしろ戸惑いを感じさせる。

カミーニャの時代、彼の日常語であつたはずの *dialecto interamnense* (ドウロ・ミーニョ両河間地方の方言)において、v は b のように発音されていたのかもしれない。その推測を支える傍証として、セラフィン・ダ・シルヴァ・ネトが引用する、16 世紀ポルトガルの文法家ドゥアルテ・ヌーネス・ド・レアン¹¹の次の一節を挙げる。“O que muito mais se vee nos Gallegos, & em algũs Portugueses d’entre Douro & Minho, que por vós, & vósso, dizem bos, & bosso, & por vida, dizẽ bida”[ガリシア人や、エントレ=ドウロ=イ=ミーニョ(ドウロ・ミーニョ両河間地方)の一部のポルトガル人において大いに注目されるのは、彼らが vós や vosso に替えて bós や bosso と言い、vida に替えて bida と言うことだ] (Duarte Nunes do Leão, *Orthographia da Lingua Portuguesa*,

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）堂々たる山、そしてその南につらなるより低い山塊、さらには鬱蒼たる樹林のおい茂る平らかな土地であります。総司令官は、高いほうの山をモンテ・パスコアール〔復活祭の山〕、陸地をテーラ・ダ・ヴェラ・クルス〔真実の十字架の地〕と、それぞれ命名しました。

総司令官は、測鉛をおろすよう命じました。水深は25尋と判明しました。日没の頃、私たちは陸からおおよそ6レグアの位置に投錨しました。水深19尋、暗礁の危惧なき泊地であります。私たちはそこで一夜を明かしました。木曜日〔4月23日〕の朝方、私たちは帆を上げ、もろもろの小型船を先行させつつ、陸めざして直進しました。水深は17尋から16、15、14、13、12、10、そして9尋となり、やがて陸まで半レグアというところへ達しました。そこで、私たちは全船投錨、ある河口を正面に認めました。この投錨点には、おおよそ10時頃到達しました。

そこから私たちは、浜を歩いている男たちを眺めました。いちはやく着いたもろもろの小型船からの伝えによると、その数おおよそ7〜8人でありました。

やがて私たちは、舢舨と小艇を海におろしました。さっそく、もろもろのナウ船の司令官たちが総司令官のナウ船へやってきて、話し合いが持たれました。総司令官は、例の河のようすを見るため、ニコラウ・コエーリョを舢舨に乗せ、陸へ送りました¹¹。彼がそちらへ向

Lisboa, 1576, f.4. Biblioteca Nacional de Portugal, res-277-2-v). Cf. Serafim da Silva Neto, *História da Língua Portuguesa*, 3ª edição, Rio de Janeiro, Presença / Brasília, INL-MEC, Col. Linguagem, 11, 1979, p.496. だが、v と b の不用意な取り違えは、カミーニャのテキストに関する限り、この一例を認めるにすぎない。

¹¹ 現代ポルトガル語は、*ir à cidade*（街へゆく）とか *chegar a Lisboa*（リスボアに着く）とかいうように、運動を示す動詞と、運動の結果たどり着く、その目的地との間に、前置詞 *a*（その目的地にやや長く留まるというニュアンスを込める場合は *para*）を挿入するよう教えている。しかし今日のブラジルの民衆語にあつては、上記の用例で、*ir na cidade* や、*chegar em São Paulo* のように、前置詞 *a* より、*em* を使うほうが、ずっと一般的である。ブラジルの言葉に残る、ポルトガル語のアルカイスムを論ずる際、必ずといってよいほど引き合いに出される *regência* が、これだ（脚注17参照）。案の定、「書翰」にも、この *em* が幾例も観察される。アウグスト・エピファニオ・ダ・シルヴァ・ディアスは、この *regência* を、カミーニャより時代の遡るアルカイック中期の用法を特徴づけるものと規定し、船に乗っていた人が陸に上がるとか（「書翰」からの例はおおむねこれそのものか、これに準ずるものと見られる）、旅行者が国、そのほか比較的大きな地域単位に入る、とかいう表現を行なうとき、前置詞 *em* が用いられた、と考える（Augusto Epiphanyo da Silva Dias, *Sintaxe Histórica Portuguesa*, 5ª edição, Lisboa, Livraria Clássica Editora, s/d., p.144）。この考察は、翻って言えば、*em* をもって行なう *regência* がいかなる状況にも適用できたわけではない、という間接的な言及であるとも受け取れる。実際、「書翰」には、前置詞 *a* の用いられる *regência* もまた、幾例か認められる。運動の結果たどり着く、その目的地の前に、前置詞 *a* を置く場合、*em* の場合より、一樣にその範囲がより限定的である、というか、多少とも具体性を帯びている、という印象を受ける（あたかも、現在の英語における〈arrive at +限定的な地点など〉と、〈arrive in +最終目的地としての大都市など〉の使い分けがそうであるように）。この前置詞の使い

かいはじめると、ときにふたりずつ、ときに 3 人ずつというぐあいに、男たちが浜へ駆け寄ってきます。舩が河口へ着く頃、そこにはすでに 18~20 人の男たちがいました¹²。

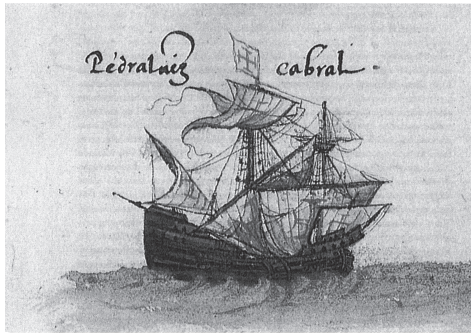
男たちの肌は褐色で、全員が裸であり、恥部を覆うものすら纏っていません。手には弓・矢を携えています。皆、勢いよく、舩のほうへ押し寄せてきました。ニコラウ・コエーリョが身ぶり手ぶりで、弓を置くよう伝えますと、彼らはそのようにしました。そこでは海の波が岸辺に砕けています。男たちの話が聴き取りづらく、意思の疎通がうまく図れなかったのはそのせいでありました。ニコラウ・コエーリョは男たちに、赤の縁なし帽、みずからのかぶっていた亜麻のカラプサ帽〔円錐形の帽子〕、それに黒いソンプレイロ〔^{つば}鍔広の帽子〕を差し出しました。男たちのひとりには彼に、

分けに際し、カミーニャには、かなり明確な弁別の意識が働いていた、と見てよいと思う。

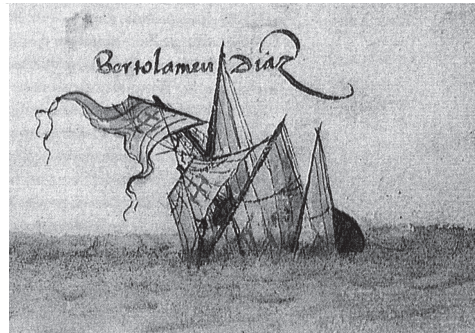
¹² ポルトガル語では、英語における be 動詞の概念を表現するため、ser と estar というふたつの異なる動詞を使い分ける。現代ポルトガル語文法の教えるところによると、ser は、①固定的な「身分」「属性」、②建物などのような不動産や都市の位置、などを表わすのに対し、estar は、③可動性というか流動性のある「心身の状態」や、④「ヒトや動物の位置」を表わすのに用いる。

ところが、カミーニャにおいては、ser が④の用例でほぼ自由に用いられている。ジョゼ・レイテ・デ・ヴァスコンセーロスには、上記③および④のように、現在では estar でのみ表現しうる概念を、古いポルトガル語では ser を用いて自由に表わし得た、と説くため、次の例文を引く。“Sou contente”〔喜んでそのように〕(Jorge Ferreira de Vasconcelos, *Comedia Ulysippo*, Lisboa, 1618, f.185. Biblioteca Nacional de Portugal, res-2873-p; res-581-p). “E a dous dias ouue Nunalvarez recado como os castellaños eram ja em Arrayolos”〔それから 2 日後、ヌーノ・アルヴァレスはカスティール軍がすでにアライオロスに駐屯し居る旨の伝令を受けた〕(*Chronica do Condestabre de Portugal Nuno Alvarez Pereira*, ed. Mendes dos Remédios, Subsídios para o estudo da história da literatura portuguesa, XIV, Coimbra, 1911, cap. 34, p.86. Biblioteca Nacional de Portugal, hg-21137-p). Cf. José Leite de Vasconcelos, *Lições de Filologia Portuguesa*, 4ª edição, Col. Brasileira de Filologia Portuguesa, Rio de Janeiro, Livros de Portugal, 1966. 今日、“Lisboa é na Estremadura”(リスボアはエストレマドゥーラ地方にある)のように、たとえば都市の位置を示すためには、動詞 ser を用いる(現在のカスティール語において、同じケースで estar 動詞を使うことは、ポルトガル語学習者の眼から見ると、都市や建造物など動くものではないのになぜ estar なのかと、かなり奇異な印象を受ける)。

私は現在、通常の文法書の教えるところに従って、建物のような不動産や都市など、一応不動と考えられるものの位置を表わすためには ser を用いる、と講ずることになっているが、みずからのポルトガル語文では、個人的な好みに従い、別の動詞、たとえば ficar や encontrar-se を用いることが多い。ヴァスコンセーロスは、「建物などのような不動産や都市の位置」を表わすための ser を、「ヒトや動物の位置」を表わすのにアルカイック期に自由に用いた ser の用法の「なごり」(lembrança)である、と説く。



ペドロ・アルヴァレス・カブラル指揮下の旗艦
ガマ以降、インドへ派遣された船々の司令官の名とその安否が、このような絵入り文書で判る。『リズアルテ・デ・アブレウの書』(Livro de Lisuarte de Abreu, Pierpont Morgan Library, New York 蔵)より(部分)



バルトロメウ・ディアス指揮下の船
1488年2月アフリカ大陸南端(実際の最南端はアグーリャス岬)に上陸, そこを「嵐の岬」と命名, インド航路実現の可能性を示した人物がディアスである。「嵐の岬」は「喜望峰」と改名。ディアスは、カブラルのもと一隻の司令官を任される。が皮肉にも、おそらくは喜望峰付近で難船, 命を落とす。同前

huñ sombreiro de penas daues compridas cõ huña
copezinha pequena de penas vermelhas epardas coma
de papagayo e outro lhe deu huñ rramal grande
de comtinhas brancas meudas que querem parecer
daljaueira as quaaes peças creio queo capitam
manda avossa alteza e com jsto se volueo aas naos
por seer tarde e nom poder deles auer mais fala por
aazo do mar. /

anoute segujmte ventou tamto sueste cõ chuuaçeiros
que fez caçar as naos e especialmente acapita
na. Eaa sesta pola manhaã as bijj oras pouco ma
is ou menos por conselho dos pilotos mandou oca
pitam leuamtar ancoras e fazer vela e fomos de
longo dacosta com os batees e esquifes amarados

perpopa comtra onorte peraveer se achauamos al
guña abrigada e boo pouso omde jouuesemos pera
tomar agoa e lenha, nom por nos ja mjnguar mas
por nos acertarmos aquy e quando fizemos vela
seriam ja na praya asentados jumto cõ orrio, obrra
de lx ou lxx homeês que se juntaram aly poucos
epoucos / fomos de lomgo e mandou ocapitam aos
nauios pequenos que fosem mais chegados aattra
e que se achasen pouco seguro peraas naaos que
amaynassem. Eseendo nos pela costa obra de x
legoas domde nos leuamtamos acharam os ditos
nauios peçnos huñ arrecife com huñ porto dentro
muito boo e muito seguro com huña muy larga
entrada e meteramse dentro e amaynaram.

E as naaos arribaram sobreles. e hũu pouco amte
sol posto amaynarom obra dhuña legoa do arrecife
e ancoraramse em xj braças. / Eseendo aº lopez
nosso piloto em huñ daqueles naujos pequenos per
mandado do capitam por seer homẽ vyuo e dee
stro pera jssso meteose loguo no esquife asomdar
oporto demtro e tomou em huña almaadia dous
daqueles homeês da trra mançebos e de boos cor
por e huñ deles trazia huñ arco e bj ou bij seetas

[Fol. 2]

*um sombreiro de penas de ave, compridas, com uma copazinha pequena de penas vermelhas
e pardos como de papagaio; e outro deu-lhe um ramal grande de continhas brancas, miúdas,
que querem parecer de aljaveira, as quais peças creio que o Capitão manda a Vossa Alteza, e
com isto se voltou às naus por ser tarde e não poder haver deles mais fala, por causa do mar.*

Na noite seguinte ventou tanto sueste com chuvaceiros que fez caçar as naus, e

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

especialmente a capitaina. E sexta pela manhã, às oito horas, pouco mais ou menos, por conselho dos pilotos, mandou o Capitão levantar âncoras e fazer vela; e fomos ao longo da costa, com os batéis e esquifes amarrados à popa na direcção do Norte, para ver se achávamos alguma abrigada e bom pouso, onde nos demorássemos, para tomar água e lenha. Não que nos minguisse, mas por aqui nos acertarmos.

Quando fizemos vela, estariam já na praia assentados perto do rio obra de sessenta ou setenta homens que se haviam juntado ali poucos e poucos.

Fomos de longo, e mandou o Capitão aos navios pequenos que seguissem mais chegados à terra e, se achassem pouso seguro para as naus, que amainassem.

E, velejando nós pela costa, acharam os ditos navios pequenos, obra de dez léguas do sítio donde tínhamos levantado ferro, um Recife com um porto dentro, muito bom e muito seguro, com uma mui larga entrada. E meteram-se dentro e amainaram. As naus arribaram sobre eles; e um pouco antes do sol-posto amainaram também, obra de uma légua do Recife, e ancoraram em onze braças.

E estando Afonso Lopes, nosso piloto, em um daqueles navios pequenos, por mandado do Capitão, por ser homem vivo e destro para isso, meteu-se logo no esquife a sondar o porto dentro; e tomou dois daqueles homens da terra, mancebos e de bons corpos, que estavam numa almadia. Um deles trazia um arco e seis ou sete setas;

[Fol. 2]

鳥の羽製の被り物を与えました。羽は長く、被り物のてっぺんには小さな飾りがついています。飾りは、鸚鵡おうむからとったかのような赤や褐色の羽製であります。別の男は彼に、種真珠に似た、白く、細かい珠を数多く糸に貫いたものを与えました。これらの品々は、総司令官より陛下へ送られると信じます。

以上をもって、ニコラウ・コエーリョはナウ船のもとへ戻りました。すでに遅くなっていたうえ、波浪に妨げられ、もう彼らとの対話が成立しなかったからであります。

夜半、俄か雨を伴う南東風が強く吹きました。これはもろもろのナウ船、わけでも旗艦さえ押し流すほどのものでした。

金曜日〔4月24日〕の朝、おおよそ8時頃、航海士たちの助言により、総司令官は、錨を上げるよう、そして帆を張るように命じました。私たちは、船尾に舢舨と小艇を繋ぎ、岸沿い

に、北の方向へ進みました。そのねらいは、薪水を得るため、とどまりうる避難地なり良好な泊地に見出しうるかどうか、を見極めることにありました。ただし薪水に不足が出たわけではありません。そこらでたまたまありつければよい、と思いました。

私たちが帆走を始めたとき、河近くの浜に腰をおろしていた男たちは、おおよそ 60～70 人に達していたであります。三々五々そこへ集まってきていたのであります。

私たちはゆっくり、まっすぐに航しました。やがて総司令官は、もろもろの小型船に対し、もっと陸寄りに進むよう、そして、ナウ船にも安全な泊地が見つかれば帆をおろすよう、命じました。

さらに岸沿いに帆走を続けると、上記もろもろの小型船は、私たちが錨をあげた地点から、おおよそ 10 レグアのところで、ひとつの岩礁を見出しました。岩礁の内側には良好かつ安全な泊地がひとつあり、ゆったりとした入り江に守られています。もろもろの小型船がその中に入り込み、帆をおろしました。ナウ船も小型船のあとに続き、日没の少し前、岩礁からおおよそ一レグア入ったところで、これまた帆をおろしました。そして水深 11 尋[の海底]に投錨しました。

かの小型船の一艘に、わが航海士^トアフォンソ・ロペスがいました。彼は、総司令官の命を受け、ただちに小艇に乗り込みました。ねらいはさらに内側の泊地を測量することでした。こういう仕事になると、元気の出る、練達の士であることを買われての抜擢です。彼は、土地の男どものうち、筏に乗っていた、若々しく、堂々たる^{たく}体軀のふたりを捕まえました。そのひとりには、ひと張りの弓と、6～7 本の矢を携えていました。

e na praya amdauam muitos cõ seus arcos e seetas
e nom lhe aproueitaram. / troueos logo ja de noue
ao capitam omde foram rrecebidos com muito pra
zer e festa. /
afeiçam deles he seerem pardos maneira dauerme
lhados de boõs rrostros e boos narizes bem feitos. / am
dam nuus sem nenhuña cobertura. nem estimam n
huña coussa cobrir nem mostrar suas vergonhas. e
estam açerqua disso com tanta jnocemçia como
teem em mostrar orrostro. / traziam ambos os beiços

de baixo furados e metidos por eles senhos osos
doso brancos de compridam dhuũa maõ travessa
e de grossura dhuũ fuso dalgodam e agudo na pôta
coma furador. metẽ nos pela parte de dentro do bei
ço e que lhe fica antre obeiço eos demtes he feito
coma rroque denxadrez. e em tal maneira o trazem
aly emcaxado que lhes nom da paixã nem lhes tor
ua afaa nem comer nem beber. / os cabelos seus
sam corredios e andauã trosqujados de trosquya
alta mais que de sobre pemtem deboa gramdura
e rrapados ataa per cjma das orelhas. e huũ deles
trazia per baixo da solapa de fonte afonte pera detras
huũa maneira de cabeleira de penas daue ama
rela que seria decompridam dhuũ couto. muy
basta e muy çarada que lhe cobria otoutuço eas ore
lhas. aqual amdaua pegada nos cabelos pena e
pena com huũa comfeijam branda como cera e
nõ no era. demaneira que amdaua acabeleira
muy rredonda e muy basta e muy igual que nõ
fazia mjngoa mais lauajem peraa leuantar. / oca
pitam quando eles vieram estaua asentado em
huũa cadeira e huũa alcatifa aos pees por estrado
e bem vestido cõ huũ colar douro muy grande ao
pescoço. e sancho de toar e simam de miranda enj
colaa coelho e aires corea e nos outros que aquy
na naao cõ ele himos asentados no chaão

[Fol. 2 v]

e na praia andavam muitos com seus arcos e setas; mas de nada lhes serviram. Trouxe-os logo, já de noite, ao Capitão, em cuja nau foram recebidos com muito prazer e festa.

A feição deles é serem pardos, maneira de avermelhados, de bons rostos e bons narizes, bem feitos. Andam nus, sem cobertura alguma. Não fazem o menor caso de encobrir ou de mostrar suas vergonhas; e nisso têm tanta inocência como em mostrar o rosto. Ambos traziam os beijos de baixo furados e metidos neles seus ossos brancos e verdadeiros, de comprimento duma mão travessa, da grossura dum fuso de algodão, agudos na ponta como furador. Metem-nos pela parte de dentro do beijo; e a parte que lhes fica entre o beijo e os dentes é feita como roque de xadrez, ali encaixado de tal sorte que não os molesta, nem os estorva no falar, no comer ou no beber. Os cabelos seus são corredios. E andavam tosquiados, de tosquia alta, mais que de sobre-pente, de boa grandura e rapados até por cima das orelhas. E um deles trazia por baixo da solapa, de fonte a fonte para detrás, uma espécie de cabeleira de penas de ave amarelas, que seria do comprimento de um coto, mui basta e mui cerrada, que lhe cobria o toutiço e as orelhas. E andava pegada aos cabelos, pena e pena, com uma confeição branda como cera (mas não o era), de maneira que a cabeleira ficava mui redonda e mui basta, e mui igual, e não fazia minguia mais lavagem pera a levantar.

O Capitão, quando eles vieram, estava sentado em uma cadeira, bem vestido, com um colar de ouro mui grande ao pescoço, e aos pés uma alcatifa por estrado. Sancho de Tovar, Simão de Miranda, Nicolau Coelho, Aires Correia, e nós outros que aqui na nau com ele vamos, sentados no chão,

[Fol. 2 v]

浜では大勢の男たちが、自分たちの弓・矢を持って、歩き廻っていました。しかし、彼らは少しもそれらを使おうとはしません¹³。夜を待ちかねて、アフオンソ・ロペスは、捕まえ

¹³ このくだりに見える *aproueitaram* (現代式綴り *aproveitar* の完了過去・三人称・複数) が現在と同様、他動詞だとすると、その直接目的語は *seus arcos e seetas* であることは明らかだから、これを代名詞に置き換えると、直接目的格の *os* となるはずで、間接目的格の *lhe* はおかしいのではないかと思われる。が、古語ではこれでよかった。

グラッドストーンは、直接目的格として用いられる代名詞 *lhe* を、今日のブラジルの民衆語に残るアルカイスムのひとつに挙げる(直接の教示による)。たとえば、“*Não lhe via há muito tempo*”[永いあいだ君に(彼に)会わなかった]というふうにもうひとつ注意すべき点がある。上掲の *seus arcos e seetas* は複数であるから、*lhe* は *lhes* とあるべきところだが、これについても明確な解答がある。エピファニオ・ダ・シルヴァ・ディアスによると、アルカイック期および古典期において、*lhe* は複数を兼ねた (Epiphanyo da Silva Dias, *Sintaxe*

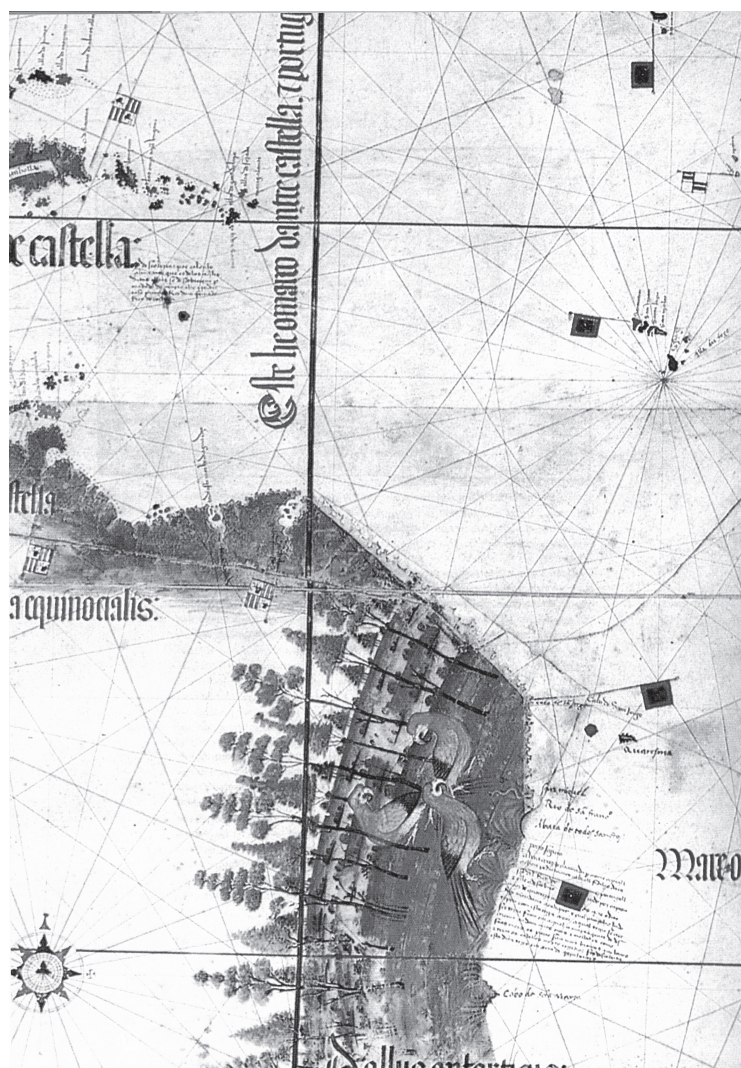
ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）
たふたりを総司令官のもとへ連れてゆきました。総司令官のナウ船内で、ふたりは、大いなる喜びとお祭り騒ぎをもって迎えられました。

ふたりの外貌は次のようであります。肌はやや赤みをおびた褐色で、顔立ちも鼻も美しく、いずれも整った形であります。一糸纏わぬ裸体であり、その恥部を覆うも見せるもまるで何とも思っていない。顔を見せるのと同じくらいにあっけらかんとしています。ふたりは下唇に穴をあけ、そこにそれぞれ、白い、本物の骨を通してあります。その長さは^{たなこころ}掌の幅ほど、太さは綿紡の^{つむ}錘ほどであり、その先っぽは^{あな}孔あけ器のように鋭利であります。骨は唇の内側に通され、唇と歯とに挟まれた部分は削られて、まるでチェスの塔のようであります。が、これにはうまいぐあいに覆いが施してあり、飲食の際、またおしゃべりをするとき、痛みや妨げを感じずにはありません。

ふたりの頭髮は滑らかであります。彼らはこれを大きく、幅広く刈り込み、両耳の上あたりまで刈り上げています。うちひとり、^{がんか}眼窩の下あたりと、両こめかみから後ろまでを取り巻く、黄色い鳥の羽で作った一種の^{かつら}鬘をつけていました。その長さは1コート〔約66センチメートル〕くらいでしょう。鬘はたいそうずっしりとし、稠密な作りであるので、うなじと両耳を隠すには十分であります。鬘は、羽の一枚一枚まで、蠟のようで蠟ではない、柔らかな物質によってびたりと頭髮に固着していました。ですから鬘は、ふっくらと丸みを帯び、ずっしりとして、作りにむらがありません。これを取りはずそうとするなら、水洗いをするしか仕様がなさそうでした。

ふたりがやってきたとき、総司令官は椅子に腰かけていました。総司令官は、盛装し、首の周りに金糸をあしらった大きな襟をつけ、足もとには、壇のかわりの絨毯〔を敷かせました〕。サンチョ〔サンショ〕・デ・トヴァール、シマン・デ・ミランダ、ニコラウ・コエーリョ、アイレス・コレアのほか、本ナウ船で総司令官に随従する我ら一同、敷きつめた絨毯に直接腰をおろしました。

Histórica Portuguesa, p.70)。ジョゼ・ジョアキン・ヌーネスによると、それは今日の民衆の言葉においてそうであるという(José Joaquim Nunes, *Compêndio de Gramática Histórica Portuguesa (Fonética e Morfologia)*, 8ª edição, Lisboa, Livraria Clássica Editora, s/d., p.239)。16世紀ポルトガルの国民的叙事詩『ウズ・ルジーアダス』にあつては、今日の *lhe* と *lhes* が、例外なく *lhe* ひとつで表わされていることについては、cf. Antônio Geraldo da Cunha, *Índice analítico do vocabulário de Os Lusíadas*, 2ª edição, Rio de Janeiro, Presença / Brasília, INL-MEC, 1980, p. XXVI。もとより当時、*lhes* という複数の目的格が存在しなかったわけではなく、カミーニャは、かなりはっきりと両者を弁別している。



1502年頃のブラジル図

いわゆる「カンティーン図」(部分)。アルベルト・カンティーンなるイタリア人が、1502年ポルトガルで非合法的に入手、みずからの雇用主であるフェッテラーラ公爵へ送ったと推測されるもの。モデナ、エステンセ図書館(Biblioteca Estense, Modena)蔵。ブラジルを描いた最古の絵図のひとつ。ポルトガル王室の秘密政策が破られた一例を示すうえでも象徴的。太い縦線がトルデシーリャス条約(1494年6月7日)によるイスパニア=ポルトガルの勢力分界線(その東側がポルトガル圏)。縦線の脇に *Este he o marco dantre castella e portugal* (これがカステラ[カスティール]とポルトガルとの間の分界線である)と見える。Carmen Radulet, *Terra Brasil 1500: A viagem de Pedro Álvares Cabral – testemunhos e comentários*, Lisboa, Chaves Ferreira Publicações, s/d. より

per esa alcatifa. / acemderam tochas e emtraram e nõ
fezeram nhuia mençam de cortesia nem de falar
ao capitam nem anjmguem. pero huũ deles pos olho no
colar do capitam e começou daçenar cõ amaão pera
aterra e depois perao colar como que nos dezia que
avia em tera ouro e tam bem vio huũ castical de
prata e asy meesmo acenaua peraa tera e entã perao
castical como que avia tan bem prata. / mostrarã
lhes huũ papagayo pardo que aquy ocapitam traz. /
tomarãno logo na mão e acenaram peraa tra
como que os avia hy. / mostrarãlhes huia cam.¹⁰
nõ fezeram dele mençam. mostrarãlhes huia g.^a
casy aviam medo dela e nõ lhe queriam poer a
mão edepois a tomaram coma espamtados. / de
ranlhes aly de comer pam e pescado cozido. confej
tos fartees mel e figos pasados. nõ quiseram comer
daquilo casy nada e alguia coussa se aprouuam
lamçauãna logo fora, troueranlhes vinho perhũa
taça. Poseranlhe asy aboca tâ malaues e nõ gostarã
dele nada nem oquiseram mais / troueramlhes
agoa perhuia albarada tomaram dela senhos
bocados e nõ beberam. soom^{1c} lauarã as bocas elam
çaram fora. Vio huũ deles huias contas de rrosairo
brancas. açenou que lhas desem e folgou muito com
elas e lancouas ao pescoço e depois tirouas e enb
rulhouas no braço e acenaua peraa tra e entã peraa
contas perao colar do capitam como que dariam
ouro por aquilo. / Isto tomauamonos asy polo de
sejarmos / mas se ele queria dizer que leuaria

as contas e mais ocolar. jsto nom querjamonos
emtender porquelho nõ aviamos de dar edespo
is tornou as contas aquem lhas deu e entã estira
ranse asy decostas naalcataifa adormir sem teer
nenhuũa maneira de cobrirem suas vergonhas as quaees
nõ herã fanadas e as cabeleiras delas bem rrapa
das e feitas. / ocapitã lhes mandou poer aas cabeças
senhos coxijs e odacabeleira procuraua assaz polla
nõ quebrar e lançarãlhes huũ manto e cjma e eles cõ
sentiram e jouueram e dormjram. / . /

[Fol. 3]

pela alcatifa. Acenderam-se tochas. Entraram. Mas não fizeram sinal de cortesia, nem de falar ao Capitão nem a ninguém. Porém um deles pôs olho no colar do Capitão, e começou de acenar com a mão para a terra e depois para o colar, como que nos dizendo que ali havia ouro. Também olhou para um castiçal de prata e assim mesmo acenava para a terra e novamente para o castiçal como se lá também houvesse prata.

Mostraram-lhes um papagaio pardo que o Capitão traz consigo; tomaram-no logo na mão e acenaram para a terra, como quem diz que os havia ali. Mostraram-lhes um carneiro: não fizeram caso. Mostraram-lhes uma galinha; quase tiveram medo dela: não lhe queriam pôr a mão; e depois a tomaram como que espantados.

Deram-lhe ali de comer; pão e peixe cozido, confeitos, fartéis, mel e figos passados. Não quiseram comer quase nada daquilo; e, se alguma coisa provaram, logo a lançaram fora. Trouxeram-lhes vinho numa taça; mal lhe puseram a boca, não gostaram nada, nem quiseram mais. Trouxeram-lhes a água em uma albarrada. Não beberam. Mal a tomaram na boca, que lavaram, e logo a lançaram fora.

Viu um deles umas contas de rosário, brancas; acenou que lhes dessem, folgou muito com elas, e lançou-as ao pescoço. Depois tirou-as e enrolou-as no braço e acenava para a terra e de novo para as contas e para o colar do Capitão, como dizendo que dariam ouro por aquilo.

Isto tomávamos nós assim por assim o desejarmos. Mas se ele queria dizer que levaria as

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

contas e mais o colar, isto não o queríamos nós entender, porque não havíamos de dar. E depois tornou as contas a quem lhas dera.

Então estiraram-se de costas na alcatifa, a dormir, sem buscarem maneira de encobrir suas vergonhas, as quais não eram fanadas; e as cabeleiras delas estavam bem rapadas e feitas. O Capitão lhes mandou pôr baixo das cabeças seus coxins; e o da cabeleira esforçava-se por a não quebrar. E lançaram-lhes um manto por cima; e eles consentiram, quedaram-se e dormiram.

[Fol. 3]

松明に火が灯され、彼らが入ってきました。ところが、礼法めいたことは何ひとつせず、総司令官に対しても他のなんびとにも、話しかけるそぶりを見せません。しかしながら、ひとりが総司令官の襟えりに眼をつけ、陸のほうを指さし、ひきつづき襟を指さしはじめました。まるで、あっちに金きんがあるぞ、と言っているかのように。彼はまた、銀製の蠟燭ろうそく立てにも目をやり、先刻と同様、まず陸を、続いて蠟燭立てを指さしました。まるで、あっちに銀もあるぞ、と言っているかのように。

私たちはふたりに、総司令官が持参している褐色の鸚鵡を見せました。彼らはさっそく手に取り、陸を指さしました。これなら、あっちにいくらでもいる、と言わんばかりに。羊を見せると、これには見向きもしませんでした。鶏を見せると、これには半ば恐れをなし¹⁴、手を触れようとしませんでした。もっともその後、ひどくおのき気味に、手に取っ

¹⁴ 現在、一時的であれ継続的であれ、身体・精神の状態を表現するため普通に用いられるのは〈ter + 抽象名詞〉であり、〈haver + 抽象名詞〉を用いることはほとんどない。たとえば、“Tenho fome”（腹が減った）とか“Ela tem medo da escuridão da noite”（彼女は夜の闇を怖がる）というように、おおむね ter 動詞を用いる。ところがサイド・アリーによると、少なくとも16世紀までは、上記2種の動詞に、ある種の使い分けがあり、①「継続的・持続的状態」なら〈ter + 抽象名詞〉で、②「一時的状態」なら〈haver + 抽象名詞〉で、それぞれ表現することが普通であった（M. Said Ali, *Dificuldades da Língua Portuguesa: estudos e observações*, 4ª edição, Rio de Janeiro, Livraria Acadêmica, 1950, p.189. 彼はそのことを『ウズ・ルジーアダス』から引証しようとしている）。

では、1500年に執筆された「書翰」において、サイド・アリーの説くような弁別が行なわれているのかどうか。まず、より用例の多い①〈ter + 抽象名詞〉から。例 1. “andam nuus sem nenhuua cubertura, nem estimam nhuua coussa cobrir nem mostrar suas vergonhas. e estam acerca disso com tanta inocencia como teem em mostrar orostro”（大意。「先住民たちが恥部を見せることに対する無邪気たるや顔を見せるに際して示すそれと同じくらいだ」）。例 2. “..... suas vergonhas tam altas e tâ çaradinhas e tam limpas das cabeleiras que de as nos mujto bem olharmos nõ tijnhamos nhuua vergonha”（大意。「先住民の少女たちの恥

てはいました。

私たちは食べ物を与えてみました。パン、煮魚、砂糖菓子、アーモンドパイ、蜂蜜、干し無花果、といったものであります。しかし、ほとんど何にも口をつけようとしません。もし何か試みに口に入れても、たちまち吐き出してしまいます。杯に葡萄酒が一杯運ばれてきました。彼らはちよいと口をつけますが、たちまち嫌な顔をし、もう欲しがりませんでした。一個の甕に水が運ばれてきました。でも彼らは、飲みませんでした。一口ずつ口に含み、口を漱げば、あとは吐き出しました。

ひとりがロザリオの白い珠に目をやり、寄こせ、という身ぶりを示しました。受け取った珠を心ゆくまで弄ぶと、これを首に掛けました。しばらくして、これはずし、今度は腕に巻きつけました。そして陸のほうを指さし、今一度、珠と総司令官の襟とを指さしました。これをくれたら、お返しに金をやろう、と言っているかのようにありました。そのように取ったのは、我らがこの地に金があって欲しい、と望んでいたからにはかなりません。男はロザリオの珠と、さらに襟を持ってゆきたい、と言いたかっただけなのかもしれません。でも、我らはそうとりたくはありませんでした。それらを与えるつもりもありませんでした。しばらくして、彼はこの珠を、もとの渡し主へ戻しました。

そうこうするうちに、ふたりは、ひと眠りしようと、絨毯に仰向けになりました。みずからの恥部を隠そうともしません。陰茎は割礼が施されておらず、陰毛はうまく剃られ、手入れてありました。総司令官は、ふたりの頭の下に、ひとつずつ座布団をあてがってやるよう、命じました。鬘の男は、苦勞してこれを壊すまいとしていました。ふたりの上からマントをかけてやると、彼らはこれでよしい、という顔つきを見せ、静かに横たわり、眠り込みました。

Ao sabado pola manhaã mandou ocapitã fazer vella

部や、綺麗に剃られた恥毛はいくら見つめても我らは全然恥ずかしさを覚えなかった」。例 3. “.....disse ocapitaque nos posesemos todos em gíolhos e abejasemos pera eles veerem ho acatamêto que lhe tijnhamos”(大意。「十字架に対して我らの懐く尊崇の念を先住民たちがありありと見てとれるように、総司令官は、跪きこれに接吻するよう我らに申しつけた」。これに対し、②〈haver+抽象名詞〉の用いられているのは、本注の箇所における“mostraralhes huia galinha casy aviam medo dela.....”である。ポルトガル人が先住民に鶏を見せたところ、彼らはこれにほとんど恐れをなし、当初手に取ろうとしなかった、というぐだりであるから、サイド・アリーの考察には一理あるようにも思われる。しかし、〈ter+抽象名詞〉の例がすべて「継続的・持続的状態」を表わしているかと言えば、必ずしもそう断言できるとは言いきれぬ印象がある。上記、例 2 は「継続的・持続的」な感情を表わしているように、私には思われない。

e fomos demandar aemtrada aqual era muy lar
gua e alta de bj bij braças e entraram totalas
naaos dentro e ancoraramse em b bj braças / a
qual ancorajem dentro he tam grande e tã fre
mossa e tam segura que podem jazer dentro neela
mais de ij^e navjos e naaos. e tamto que as naaos
foram pousadas e ancoradas vieram os capitaães
todos aesta naao do capitam moor edaquy mandou
ocapitã a njcolao coelho ebertolameu dijz que fo
sem em terra eleuasem aqueles dous homees eos lei
xasem ir com seu arco e seetas. aos quaaes mādou
dar senhas camisas nouas e senhas carapuças ver
melhas e dous rrosairos de contas brancas doso que
eles leuauam nos braços e senhos cascauees e senhas
canpainhas. e mandou cõ eles pera ficar la huĩ
manço bo degradado criado de dom joham teelo aq̃
chamã a^o rribeiro pera amdar la com eles e saber
de seu vjuer e maneira e amy mandou que fosse
cõ nicolao coelho. / fomos asy de frecha djr^{tos} aa
praya / aly acodiram logo obra de ij^e homeēs todos
nuus ecõ eles. os quaaes asy como sairã nom
pararam mais nem esperaua huĩ por outro se nõ
aquem mais coreria epasarã huĩ rrio que perhy
core dagoa doce de mujta agoa que lhes daua pe
la braga e outros mujtos cõeles e foram asy corẽdo
aalem do rrio antre huĩas moutas depalmas
onde estauam outros e aly pararom e naquillo
foy o degradado com huĩ homẽ que logo ao sair
do batel ho agasalhou e leuouo ataa la e logo ho
tomaram a nos e com ele vieram os outros que

nos leuamos os quaaes vijnham ja nuus e sem
carapuças. Eentam se começaram dechegar mujtos

[Fol. 3 v]

Ao sábado pela manhã mandou o Capitão fazer vela, e fomos demandar a entrada, a qual era mui larga e alta de seis a sete braças. Entraram todas as naus dentro; e ancoraram em cinco ou seis braças – ancoragem dentro tão grande, tão formosa e tão segura que podem abrigar-se nela mais de duzentos navios e naus. E tanto que as naus quedaram ancoradas, todos os capitães vieram a esta nau do Capitão-mor. E daqui mandou o Capitão a Nicolau Coelho e Bartolomeu Dias que fossem em terra e levassem aqueles dois homens e os deixassem ir com seu arco e setas, e isto depois que fez dar a cada um sua camisa nova, sua carapuça vermelha e um rosário de contas brancas de osso, que eles levavam nos braços, seus cascavéis e suas campainhas. E mandou com eles, para lá ficar, um mancebo degredado, criado de D. João Telo, a que chamam Afonso Ribeiro, para lá andar com eles e saber de seu viver e maneiras. E a mim mandou que fosse com Nicolau Coelho.

Fomos assim de frecha à praia. Ali acudiram logo obra de duzentos homens, todos nus, e com arcos e setas nas mãos. Aqueles que nós levávamos acenaram-lhes que se afastassem e poisassem os arcos; e eles os poisaram, mas não se afastaram muito. E mal poisaram os arcos, logo saíram os que nós levávamos, e o mancebo degredado com eles. E saídos não pararam mais; nem esperava um pelo outro, mas antes corriam a quem mais corria. E passaram um rio que por ali corre, de água doce, de muita água que lhes dava pela braga; e outros muitos com eles. E foram assim correndo, além do rio, entre umas moitas de palmas onde estavam outros. Ali pararam. Entretanto foi-se o degredado com um homem que, logo ao sair do batel, o agasalhou e levou até lá. Mas logo tornaram a nós; e com ele vieram os outros que nós levámos, os quais vinham já nus e sem carapuças.

Então se começaram de chegar muitos.

[Fol. 3]

土曜日[4月25日]の朝、総司令官の命により、私たちは帆を揚げ、入り江をめざしました。入り江はすこぶる広々としており、水深も6から7尋ありました。全ナウ船がそこへ入

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

り、水深5ないし6尋[の海底]に投錨しました。泊地の内側は、いたって広く、いとも美しく、まことに穏やかであり、その中になら、ナヴィオ船とナウ船あわせて 200 隻以上の避難が可能であります。投錨してナウ船が停止すると、さっそく全司令官が総司令官の本ナウ船(旗艦)へやってきました。ここから、ニコラウ・コエーリョとバルトメロウ・ディアスに対し、総司令官は、上陸せよ、そしてふたりの男を送り届け、彼らの弓・矢はこれを携えさせたいえ戻らしめよと、命じました。これにさきだち、総司令官は、手持ちの新しい肌着、赤いカラプサ帽、彼ら[ニコラウ・コエーリョとバルトメロウ・ディアスカ]が腕につけていた骨製の、白い珠のロザリオ、さらに手持ちの鈴と鐘とを、ふたりの男へそれぞれ与えさせました。以上の面々と一緒に、総司令官は、そちらに残るよう言い含めて、流刑囚の若者ひとりをつかわしました。この若者はドン・ジョアン・テーロの召使いであり、名前をアフォンソ・リベイロといいます。彼には、彼ら[先住民]と行動を共にして、彼らの暮らしやしきたりについて知る[という役目が与えられました]。私に対して総司令官は、ニコラウ・コエーリョと一緒にゆくよう命じました。

私たちは、真一文字に浜へ向かいました。さっそくそこにおよそ 200 人の男たちが駆け寄ってきました。全員、裸体でした。手に手に弓・矢を携えています。私たちが連れて帰りつつあるふたりが仲間に向かい、遠ざかるよう、そして弓を置くよう、身ぶり手ぶりで伝えました。彼らは弓を置きましたが、あまり遠ざかるうとはしませんでした。弓を置くやただちに、私たちの連れてくるふたりが[私たちのもとを]離れました。流刑囚の若者もふたりに従いました。離れると、もう止まりませんでした。ひとりが他を待つ、ということもありませんでした。それどころか、よりさきを走っている者に我も追^{すが}い縋ろう、というありさまでした。彼らはそこらを流れるある川を涉りました。その川は淡水で、水量は豊かであり、水は彼らの膝まで来ていました。他の多くも彼らの後を追いました。彼らはこうして走ってゆき、川のあちら側、他の仲間がいる椰子の林に入り込みました。そしてそこで止まりました。その間、流刑囚の若者は、ひとりの男と一緒にでした。解を飛び出してから、流刑囚の若者を気遣い、そこまで彼を連れていったのは、この男でした。しかしすぐに我らのもとへ戻ってきました。男と一緒にやってきたのは、私たちが送り帰したあのふたりでした。ふたりはすでに全裸へ戻っており、[総司令官からもらった]カラプサ帽も持っていませんでした。

そうこうしているうちに、たくさんの男たちが近寄ってきました。

E emtrauam pela beira do mar pera os batees ataa que mais nom podiam e traziam cabaacos dagoa e tomauã alguũs barijs que nos leuauamos e em chianos dagoa e trazianos aos batees. nõ que eles de todo chegasem abordo do batel. mas junto cõ ele lançauãno damaão e nos tomauamos epe diam que lhes desem alguũa coussa. / leuaua nj colaa coelho cascaees e manjlhas e huũs daua huũ cascauel e aoutros huũa manjlha. deman^{ra} que com aquela emcarna casy nos queriam dar amaão. Dauãnos daqueles arcs e seetas por son breiros e carapuças de ljnho e por qualçr coussa que lhes homẽ queriã dar. / daly se partirã os outros dous mançebos que nom os vimos mais. / amdauam aly mujtos deles ou casy amaior parte. que todos traziam aqueles bicos doso nos beiços e alguũs que amdauam sem eles traziam os beiços furados e nos buracos traziam huũs espelhos de pao que pareciam espelhos de boracha e alguũs deles traziam tres daqueles bicos. s. Huũ na metade eos dous nos cabos. e amdauam hy outros quartejados de cores. s. deles ameeetade dasua propria cor e ameeetade de timtura negra maneira dazulada e outros quartejados descaques. / aly amdauam antreles tres ou quatro moças bem moças e bem jentijs com cabelos mujto pretos conpridos pelas espadoas e suas vergonhas tam altas e tã çaradinhas e tam limpas das cabeleiras que de as nos mujto bem olharmos nõ tijnhamos nhuũa vergonha. / aly por emtam nom ouue mais fala nõ

entendimento cõ eles por aberberja deles seer ta
manha que se nom emtendia nem ouuja njngẽ. /
açenamoslhe que se fosse e asy o fizeram e pasa
ranse aalem do rrio e sairã tres ou quarto homeẽs
nosos dos batees e emcherã nõ sey quantos barrijs
dagoa que nos leuauamos e tornamonos aas naaos. /

[Fol. 4]

Entravam pela beira do mar para os batéis, até que mais não podiam; traziam cabaços de água, e tomavam alguns barris que nós levávamos: enchiam-nos de água e traziam-nos aos batéis. Não que eles de todos chegassem à borda do batel. Mas junto a ele, lançavam os barris que nós tomávamos; e pediam que lhes dessem alguma coisa. Levava Nicolau Coelho cascavéis e manilhas. E a uns dava um cascavel, a outros uma manilha, de maneira que com aquele engodo quase nos queriam dar a mão. Davam-nos daqueles arcos e setas por sombreiros e carapuças de linho ou por qualquer coisa que homem lhes queria dar.

Dali se partiram os outros dois mancebos, que os não vimos mais.

Muitos deles ou quase a maior parte dos que andavam ali traziam aqueles bicos de osso nos beiços. E alguns, que andavam sem eles, tinham os beiços furados e nos buracos uns espelhos de pau, que pareciam espelhos de borracha; outros traziam três daqueles bicos, a saber, um no meio e os dois nos cabos. Aí andavam outros, quartejados de cores, a saber, metade deles da sua própria cor, e metade de tintura preta, a modos de azulada; e outros quartejados de escaques. Ali andavam entre eles três ou quatro moças, bem moças e bem gentis, com cabelos muito pretos e compridos pelas espáduas, e suas vergonhas tão altas, tão cerradinhas e tão limpas das cabeleiras que, de as muito bem olharmos, não tínhamos nenhuma vergonha.

Ali por então não houve mais fala nem entendimento com eles, por a berberia deles ser tamanha que se não entendia nem ouvia ninguém.

Acenámos-lhe que se fossem; assim o fizeram e passaram-se além do rio. Saíram três ou quatro homens nossos dos batéis, e encheram não sei quantos barris de água que nós levávamos e tornámo-nos às naus.

彼らは海辺からもろもろの斛に乗り込んできました。やがてもうこれ以上は入れないというありさまに至りました。彼らは水入りの瓢箪^{ひょうたん}を携えていました。そして私たちの運んできた樽を幾つか取り上げ、それらを水で一杯に満たし、それらを斛まで持ってきてくれたのであります。彼らのすべてが斛の際まで押し寄せてきたわけではなく、斛のかたわらから、[水で満たした]樽を放り投げてくれるのを、私たちが受け取りました。彼らはそのうえで何かくれるようねだりました。ニコラウ・コエーリョが鈴と腕輪を携えていたので、ある者には鈴を、他のある者には腕輪を、それぞれひとつずつ与えました。彼らがこうして助けの手を差し延べてくれるのは、そうした〈餌^{えさ}〉の力あってこそでした。彼らも私たちにあの弓・矢を差し出しましたが、ただしそれは、亜麻製のソンプレイロ帽やカラプサ帽との、あるいは、何でもよいからもらって欲しいものとの交換でありました。

その場からふたりの別の若者が立ち去り、もう彼らの姿を見ることはありませんでした。そこらを歩き廻っている彼らの多く、というか、ほぼ大多数は、唇に、骨製のあの〈嘴^{くちばし}〉を嵌めています。〈嘴〉を嵌めていない連中は唇に穴をあけ、その穴に、革袋の口を閉める閉じ金のような外観を有する、木製の棒を挿しています。中には、あの〈嘴〉を3つ嵌めているものもあります。すなわち真ん中にひとつ、両端にひとつずつ——あわせてふたつ——というぐあいに。ある連中ときたら、肉体を幾つかの色に塗り分けていました。すなわち、身体の半分をみずからの体色のまま残し、残りの半分に、青味のある黒の染料を塗っているのであります。チェス盤の碁盤目のように肉体を塗り分けている者もいました。男たちに混じって、3~4人の娘がいました¹⁵。彼女らは、すこぶる若々しく魅力的であります。頭髪は非常に長く、それが肩に垂れています。娘たちの恥部は、高く盛り上がり、可愛く閉まっており、陰毛がまったくありません。ですから、まじまじと見つめても、私たちは全然恥ずかしさを覚えませんでした¹⁶。

¹⁵ moça という名詞も、donzela とか mulher nova の意味では、今日のポルトガルにおいて用いられない。この意味における moça がブラジルでなお保存されているのとは対照的であり、ブラジルに残るポルトガル語の古層、コルテザンの表現を用いれば pureza primitiva (原初の純粋性) を、ブラジルの言葉こそがよく保持している、その一例と指摘される。ちなみにポルトガルにあつては同じ意味の語彙としては rapariga が使われるであろう。

¹⁶ 原文“de as nos mujto bem olharmos nõ tijnhamos nhuia vergonha”. ドイツ出身の高名なポルトガル文献学者カロリーナ・ミカエリス・デ・ヴァスコンセーロスは、この一節に関し、興味深い校訂と解釈を行な

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

やがて、彼らとの間には、対話も意思の疎通もなくなりました。それは彼らのわいわいがやがやぶりが凄まじいばかりに、何を言っているのやら、理解もできず聴き取りも不能となったからであります。

私たちは彼らに対して、身振り手振りで、あっちへゆくよう命じました。彼らはそれに応じ、川のあちら側に涉りました。舢舨から我らの仲間の男たちが3〜4人飛び出しました。幾つあったか知りませんが、男たちは、私たちの携えていた樽に水を一杯に詰めました。そうして我らは、もろもろのナウ船に戻りました。

e em nos asy vijndo acenarãnos que tornasemos. /
tornamos e eles mandarom odegradado e nom
quiseram que ficasse la cõ eles. / oqual leuaua huã
bacia pequena e duas ou tres carapuças verme
lhas pera dar la ao S^{or} seo hy ouuese. / nõ curarã
de lhes tomar nada e asy omandaram com tudo
e entam bertolameu dijz ofez out^a vez tomar
que lhes dese aquilo. e ele tornou e deu aquilo
ẽ vista de nos aaquele queo da prim^a agasalhou
e entam veosse e trouuemolo. / este queo agasalhou
era ja de dias e amdaua todo por louçaynha
cheo depenas pegadas pelo corpo que parecia a
seetado coma sam sebastiam. outros trazia cara

った。現代語訳で“não tínhamos nenhuma vergonha”における tínhamos であるが、オリジナルを見ると、確かに *tijnhamos* (*ter* の不完了過去・一人称・複数)と書いてある。すなわち、「我ら」——ポルトガル人——が主語。ところがカロリーナ・ミカエリスは、敢えて原文を改変し、この動詞は *tinham* (*ter* の不完了過去・三人称・複数)へ“訂正”すべきだとする。つまり、「彼女たち」——先住民の娘——が主語に立つべきだと(Malheiro Dias, “Semana de Vera Cruz” in *op. cit.*, p.91, nota 22)。すると、ポルトガル人が先住民の娘の恥部をまじまじと見つめているのに、彼女らは全然羞恥心を示さなかったという、一見より合理的な(?)解釈が成立するのだが、よく考えてみると、これはやはりおかしい。恥部を露出すること=恥ずべき罪深い行為という、いわばカトリック的な倫理感覚を前提とする限り、カロリーナ・ミカエリスの解釈が説得性を帯びるわけだが、1500年当時のトゥピニキンの娘に、そのような観念は皆無なのであるから、カミーニャが動詞の人称を誤っている、とするカロリーナ・ミカエリスの解釈は誤り、と言わざるを得ない。ここはカミーニャの原文どおり、「我ら」を主語とすることで充分納得のゆく解釈が成立する。

puças depenas amarelas e outros de vermelhas e outros de
verdes. e huia daquelas moças era toda timta
defumdo acjma daquela timtura aqual çerto
era tã bem feita e tam rredonda e sua vergonha
que ela nõ tijnha tam graciosa que amujtas
molheres de nossa trra vendolhe taaes feições fe
zera vergonha por num teerem asua comeela. / nhuũ
deles nõ era fanado mas todos asy coma nos
e com jsto nos tornamos e eles foramse //
aatarde sayo ocapitã moor ã seu batel cõ todos
nos outros e com os outros capitães das naaos em
seus batees afolgar pela baya acaram dapraya
mas njmguem sayo em tera polo capitã nom
querer sem embargo de njmguem neela estar. /
soamente sayo ele com todos em huũ jlheeo
grande que na baya esta que de baixamar fica
muy vazio pero he detodas partes cercado dagoa
que nõ pode njmguem hir aele sem barco ou
anado. / aly folgou ele e todos nos outros bem hũa
ora e m^a e pescaram hy amdando marinheiros
cõ huũ chimchorro e mataram pescado meudo
nõ mujto. e entã voluemonos aas naaos ja bẽ noute /

[Fol. 4 v]

Mas quando assim vínhamos, acenaram-nos que tornássemos. Tornámos e eles mandaram o degredado e não quiseram que ficasse lá com eles. Este levava uma bacia pequena e duas ou três carapuças vermelhas para lá as dar ao senhor, se o lá houvesse. Não cuidaram de lhe tirar coisa alguma, antes o mandaram com tudo. Mas então Bartolomeu Dias o fez outra vez tornar, ordenando que lhes desse aquilo. E ele tornou e o deu, à vista de nós, àquele que da primeira vez agasalhara. Logo voltou e nós trouxemo-lo.

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

Esse que o agasalhou era já de idade, e andava por louçainha todo cheio de penas, pegadas pelo corpo, que parecia asseado como S. Sebastião. Outros traziam carapuças de penas amarelas; outros, de vermelhas; e outros de verdes. E uma daquelas moças era toda tingida, de baixo a cima daquela tintura; e certo era tão bem feita e tão redonda, e sua vergonha (que ela não tinha) tão graciosa, que a muitas mulheres da nossa terra, vendo-lhe tais feições, fizera vergonha, por não terem a sua como ela. Nenhum deles era fanado, mas, todos assim como nós. E com isto nos tornámos e eles foram-se.

À tarde saiu o Capitão-mor em seu batel com todos nós outros e com os outros capitães das naus em seus batéis a folgar pela baía, em frente da praia. Mas ninguém saiu em terra, porque o Capitão-mor o não quis, sem embargo de ninguém nela estar. Somente saiu – ele com todos nós – em um ilhéu grande, que na baía está e que na baixa-mar fica mui vazio. Porém é por toda a parte cercado de água, de sorte que ninguém lá pode ir a não ser de barco ou a nado. Ali folgou ele e todos nós outros, bem uma hora e meia. E alguns marinheiros, ali andavam com um chinchorro, pescaram peixe miúdo, não muito. Então volvemo-nos às naus, já bem de noite.

[Fol. 4 v]

こうして戻ってくる私たちに対し、[ナウ船上から]身振り手振りで、引き返せ、との指示がありました。戻ろうとする私たちに対し、彼らは流刑囚を送り返してきました。自分たちのもとに流刑囚が残ることを、彼らは望まなかったのであります。流刑囚は、小さな鉢をひとつ、それに赤いカラプサ帽をふたつか3つ携えていました。もしあちらに首領がいるなら、それに差し出すためのものであります。彼らはしかし、流刑囚からいかなるものも取り上げようとはしません。それどころか、一切もろとも、流刑囚を送り返してきました。それでもバルトロメウ・ディアスは、流刑囚に対し、もう一度戻るよう命じました。そして、受け取ってもらえなかったものを何としても渡してくるよう言いつけました。流刑囚は引き返し、我らに見えるよう、一度は受け取ってもらえなかったものを手渡しました。手渡したその相手は、初めて出逢ったとき流刑囚を気遣ってくれたあの男でした。そそくさと戻ってきた流刑囚を、私たちは連れ帰りました。

流刑囚の世話を焼いてくれた男はすでに年配でありましたが、お洒落しやれのつもりか、全身を羽で覆っていました。羽は肉体にびっしりと固着しており、サン・セバスティアン〔聖

セバステアヌス)のように矢で刺し通されているかのように見えました。羽製のカラプサ帽をかぶっている連中もいました。黄色の羽を纏っている者もいれば、赤い羽の者も、緑色の羽の者もいました。さきほど触れた娘たちのひとり、下から上からまで、全身にあの染料を塗っていました。彼女の体形は、均整がとれ、ぼつちやりとして、その恥部など——彼女は恥部だとはちっとも思っていません——上品そのものであります。わが国の多くの婦人がその外観をひと目見れば、胸中、羞恥の念が沸き起こるであります。彼女らのそれはこちらの娘のそれとは違うからであります。男たちは誰ひとり割礼(男性の場合、陰茎の包皮を儀礼的に切除または切開すること)を施されておらず、皆、我らと同様でありました。

午後、総司令官は〔旗艦を〕出、舢舨に乗り込みました。我ら一同も、もろもろのナウ船の司令官たちも、総司令官に従って、それぞれ舢舨に乗り込みました。浜沿いに湾を巡って楽しもうというのであります。ただし誰も陸には上がりませんでした。総司令官が望まなかったからであります。陸には誰もいなかったのではありませんが。総司令官は、我ら一同とともに、ある大きな岩礁へおり立つにとどめました。その岩礁は湾内にあり、干潮時には大きく潮が引きます。が、四方を海水が取り巻いているので、舟によるか、泳ぐかせぬ限り、そこへは行けません。たつぷり一時間半、総司令官はそこでくつろぎ、我ら一同もそれに従いました。数名の水夫たちが、投網とあみをもってあちこち歩き廻り、小魚を捕りましたが、大した量ではありませんでした。やがて晩になり、私たちはそれぞれのナウ船へ戻りました。

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）



1519年頃のブラジル図

Atlas Miller の名で知られるポルトガル製地図の優品(部分)。ペドロ・レイネールとロポ・オーメンの合作。先住民の労働のようすや、カミーニャのテキストにも現われる彼らの美しい装身具が描かれる。フランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France)蔵。石斧を振り下ろそうとする男の右側に、小さな逆さ文字で、porto seguro および monte pasquall の地名が読める。*Terra Brasil 1500* より

ao domjngo de pascoela pola manhaã detremj
nou ocapitam dhir ouuir misa e preeçãam na
quele jlheo. e mandou atodolos capitaães que se
corejesem nos batees e fosse com ele e asy foy feito. /
mandou naquele jlheeo armar huã esperauel
e dentro neel aleuantar altar muy bem core
gido e aly com todos nos outros fez dizer misa
aqual dise o padre frey amrique em voz entoa

da e oficiada cõ aquela meesma voz pelos outros
padres e sacerdotes que aly todos heram. / aqual
misa seg^o meu parecer foy ouujda per todos cõ
mujto prazer e deuaçom. aly era com ocapitam
abandeira de xpos com que sayo debelem a
qual esteue sempre alta aaparte do auamjelho. /
acabada amisa desuestiosse o padre eposese em
huña cadeira alta e nos todos lamcados per esa
area e preegou huña solene e proueitossa preega
çom da estorea do auanjelho. e em fim dela tra
utou de nossa vijnda e do achamento desta trra cõ
formandose cõ o sinal da cruz so cuja obediência
vĩjmos aqual veo mujto apreposito efez mujta
deuaçom.

em quanto esteuemos aamisa e aapregacom
seriã na praya out^a tanta gente pouco mais
ou menos como os domtem cõ seus arcos e seetas
os quaaes amdauam folgando e olhandonos
e asentaramse. e despois dacabada amisa aseẽ
tados nos aapregaçom aleuantaranse mujtos
deles e tanjeram corno ou vozina e comecaram
asaltar e dançar huñ pedaço, e alguis deles
se metiam em almaadias duas ou tres que hy
tijnham as quaaes nõ sam feitas como as que
eu ja vy. soom^{te} sam tres traues atadas juntas
e aly se metiam iijj ou b ou eses que queriam
nõ se afastando casy nada dattra se nõ quanto
podiam tomar pee. / acabada apregaçõ moueo

[Fol. 5]

ブラジルの“洗礼証明書” パロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

Ao domingo de Pascoela pela manhã, determinou o Capitão de ir ouvir missa e pregação naquele ilhéu. Mandou a todos os capitães que se aprestassem nos batéis e fossem com ele. E assim foi feito. Mandou naquele ilhéu armar um esperavel, e dentro dele um altar mui bem corregido. E ali com todos nós outros fez dizer missa, a qual foi dita pelo padre frei Henrique, em voz entoada, e oficiada com aquela mesma voz pelos outros padres e sacerdotes, que todos eram ali. A qual missa, segundo meu parecer, foi ouvida por todos com muito prazer e devoção.

Ali era com o Capitão a bandeira de Cristo, com que saiu de Belém, a qual esteve sempre levantada, da parte do Evangelho.

Acabada a missa, desvestiu-se o padre e subiu a uma cadeira alta; e nós todos lançados por essa areia. E pregou uma solene e proveitosa pregação da história do Evangelho, ao fim da qual tratou da nossa vinda e do achamento desta terra, conformando-se com o sinal da Cruz, sob cuja obediência viemos, o que foi muito a propósito e fez muita devoção.

Enquanto estivemos à missa e à pregação, seria na praia outra tanta gente, pouco mais ou menos como a de ontem, com seus arcos e setas, a qual andava folgando. E olhando-nos, sentaram-se. E, depois de acabada a missa, assentados nós à pregação, levantaram-se muitos deles, tangeram corno ou buzina. E começaram a saltar e a dançar um pedaço. E alguns deles se metiam em almadias – duas ou três que aí tinham – as quais não são feitas como as que eu já vi; somente são três traves, atadas entre si. E ali se metiam quatro ou cinco, ou esses que queriam não se afastando quase nada da terra, senão enquanto podiam tomar pé.

Acabada a pregação, voltou

[Fol. 5]

復活祭の日曜日[4月26日]の朝、総司令官は、かの岩礁へ、ミサと説教の聴聞に赴くことを決めました¹⁷。そして全司令官に対し、身支度を整えて、舢に乗り、みずからに同行

¹⁷ ポルトガル語を含めたヨーロッパ諸語における厄介な問題のひとつとして *regência* を挙げることができる。これをどう和訳するのか知らないが、英語で *be interested* とくれば その後に *in* が要求され、*take care* とあれば *of* が必要となる。こういう前置詞の操作を *regência* と呼ぶのである（英語ではコロケーションか）。ここで古いポルトガル語に見られて、現在はおよそ姿を消した特異な *regência* にふれる。それは *desejar de ter*（持つことを望む）とか *prometer de vir*（来ることを約束する）とか *determinar de partir*（出発を決心する）とかいうように、助動詞の働きをする他動詞（ここでは *desejar*, *prometer*, *determinar*）と対格不定詞（ここでは *ter*,

するよう、命じました。そのとおりの事は運ばれました。総司令官は、かの岩礁に天幕を設営し、その中に充分整った祭壇を設けるよう、命じました。我ら一同を従え、総司令官は、そこでミサを挙げさせました。ミサは、エンリケ[フレイ・エンリケ・デ・コインブラ]師により、朗々たる響きの^{こわね}の音をもって、行なわれました。同席する司祭たちも聖職者たちも、同じような声調をもって、ミサを司りました。ミサは、私の印象によれば、大いなる悦びと敬神の念をもって聴聞されました。

総司令官のそばには、クリスト[騎士団]の旗がありました。これは、ベレンを出てよりこの方、総司令官と常に一緒であり、福音書のかたわらに掲げてありました。

ミサが済むと、司祭[パードレ・フレイ・エンリケ・デ・コインブラ]は祭服を脱ぎ、高い椅子に上りました。私たちは皆、あたりの砂地に居流れました。司祭は、福音の由来について、厳粛かつ有益な説教を行ないましたが、その終わりに、我らが当地への渡来と、これとの遭遇に言及しました。司祭は、この出来事こそ、我らが服従し奉る十字のしるしがもたらした給うた偉業たるべし、と説きましたが、まことに、これは時宜に叶ったものであり、大いなる敬神の念を私どもに懐かせました。

我々がミサと説教とに臨んでいる間、浜には、きのうとほぼ同数の連中がいましたでしょうか。弓・矢を手にして、しきりに戯れたり、我らに視線をやったりしていましたが¹⁸、

vir, partir)との間に、前置詞の de を挿入するという用法である。現在においてより正格的な形は *desejar ter, prometer vir, determinar partir* であって、前置詞は不要。問題の *regência* は、主として古いポルトガル語にその例を認めることができるようだ。グラッドストンの挙げる实例をふたつ示す (Gladstone Chaves de Melo, *Gramática Fundamental da Língua Portuguesa*, 3ª edição, Rio de Janeiro, Ao Livro Técnico, 1978, p.218)。“*Quem se lembra só da justiça de Deus teme de pecar*”[デウスの裁きをかたときも忘れぬ者は……ただ罪を犯すことを懼れる] (Padre António Vieira, 1608-97, *Sermões*, IV)。“*E dize a meu cunhado que me está dando cuidado a demora de meu marido em Lisboa; que me prometeu de vir antes de véspera e não veio*”[お義兄さんに言ってちょうだい。主人がリスボアにぐずぐずしてるのを私、心配してるって。主人ときたら、暗くなる前に戻って約束したのに、まだなのよ] (Almeida Garrett, 1799-1854, *Frei Luís de Sousa*)。このような *regência* は *ter desejo de ter, fazer promessa de vir, tomar determinação de partir* というような、名詞形を交えた構文に義務的に使われていた *de* がそのまま残ったもの、とバレットは考える (Mário Barreto, *Novíssimos Estudos da Língua Portuguesa*, 3ª edição fac-similar, reproduzida da 2ª edição de 1924, Rio de Janeiro, Presença – Fundação Casa de Rui Barbosa / Brasília, INL-MEC, Col. Linguagem, 1980, pp.203-204)。この変則的用法は、ブラジルの民衆語、特に田舎風の雰囲気の中で頻繁に行なわれるそうであるが (Chaves de Melo, *op. cit.*, p.218, nota 1)、ここにもブラジルの言葉に残されるより濃厚なアルカイスムの香りを嗅ぐことができるであろう。

¹⁸ *andar* が他の動詞を従え、① (<*andar*+現在分詞もしくはジェルンジオ)もしくは② (<*andar*+前置詞 *a*+不定法) (いずれも「懸命に…している」「夢中で…している」「しきりと…している」などと和訳すればよいと思われる)のいずれであるか、を見ることも、現在進行形としての③ (<*estar*+現在分詞もしくはジェルンジ

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）
やがて腰をおろしました。ミサが済み、説教を聴くため、私たちが腰をおろすと、彼らの多くは立ち上がりました。そして角笛や警笛を吹き鳴らしました。やがて跳びはねたり踊ったりしはじめ、しばらくそれが続きました。彼らの数人は、あたりに置いてあった 2〜3艘の筏に乗り込みました。それは、かつて私が見たことのあるような造りではなく、ただ 3

オ)もしくは④(estar+前置詞 a+不定法)のいずれであるか、と並び、カミーニャが、現在ポルトガルの語法というより、むしろ現在ブラジルの語法により近いそれを用いていることを例証するための一材料となりうる。

実際のところ、カミーニャは①および②を併用しているのだが、使用頻度としては前者のほうが高い。ブラジルの優れた言語学者セラフィン・ダ・シルヴァ・ネトはこれらふたつの用法のうち、古い時代により一般的であったのは①であった、と説く。しかも現在、この用法をより濃厚に保存しているのは、ポルトガルではなくブラジルのほうである(Serafim da Silva Neto, *Introdução ao Estudo da Língua Portuguesa no Brasil*, 4ª edição, Rio de Janeiro, Presença, Col. Linguagem 1, 1977, p.178)。ここで問題としている(andar+現在分詞もしくはジェルンジオ)もしくは「andar+前置詞 a+不定法」であるが、白水社、3訂版『現代ポルトガル語辞典』には、現在進行形とほぼ同じ意味を有する表現、と説明してある。ただし、上述のとおり、その動作なり行為がずっと継続し、かつ一定の能動性というか強さをもって行なわれていることを表現するために用いる、と見るのがよい。これを通常の活用形と比べてみる。“Ele anda a trabalhar (anda trabalhando) muito estes últimos meses”(ここ数ヶ月というもの彼はまったくの働きづめだ)。“Geralmente ele trabalha cinco dias por semana”(通常彼は週に5日働く)。

ポルトガル語において、進行形を作る方法は、③(estar+現在分詞もしくはジェルンジオ)(ブラジル式)もしくは④(estar+前置詞 a+不定法)(ポルトガル式)である。日本で発売されているポルトガル語教科書は「ブラジルの」を強調するものがほとんどであるので、おのずと進行形に関しては、前者しか説かれない。が、本学生徒が参加を許されているペイラ・インテリオール大学の「外国語もしくは第二言語としてのポルトガル語集中講座」で教わるのは、もっぱら④のほうだ。

現在、ロマンス諸語の進行形において、ポルトガルのポルトガル語におけるように(estar+前置詞 a+不定法)を用いるのは、断言は憚るが、ほぼ唯一無二、と言ってよいのではかならうか。たとえばバルセローナを中心に用いられるカタルーニャ語でも、やはり(estar+現在分詞)で進行形を表わす(田澤耕『ニューエクスプレス カタルーニャ語(CD付)』白水社、2010年)。

2011年8月、4人の本学生徒を引率してコヴィリャンへ赴いたとき、たまたま参観した進行形に関する授業で、イスパニアからやってきた学生が、母語のカスティーリャ語でそうするように③を用いようとすると、担当者のリタ先生はただちに④へ訂正なされたことを、ありありと思い出す(③もブラジルのポルトガル語としてまったく間違いではない)。

注目すべきは、③つまりブラジル式のほうが、15〜16世紀の古風なポルトガル語構文であること。16世紀の著述家によってもっぱら③が用いられていることから、それは明らかだ。ルイス・デ・カモンイスの国民叙事詩『ウズ・ルジーアダス』(リスボア、1572年刊)の一節を引く。“Pera o Ceo cristalino aleuantando, / Com lagrimas os olhos piedosos, / Os olhos, porque as mãos lhe estava atando, / Hum dos duros ministros rigurosos”〔澄みきった天へ彼女は、涙を浮かべつつ、敬虔の眼差しを向ける。眼差しを向ける、とは、彼女の両手を、むごく頑ななる役人のひとりが縛めつつあったから〕(OS VISIADAS de Luis de Camoões, III, Lisboa, 1572, f.58v. Biblioteca Nacional de Portugal, cam-3-p)

本の角材をつなぎ合わせたしろものにすぎません。そこへ彼らが4~5人、あるいは、望む者すべてが乗り込みましたが、足がつかなくなるほど陸から遠ざかりはしませんでした。

説教が終わると、

ocapitã e todos peraos batees cõ nosa band^{ra}
alta e embarcamos e fomos asy todos contra a trra
perapasarmos ao longo per ondeles estauam hy
ndo bertolameu dijz em seu esquife pe mãdado
do capitam diamte cõ huũ paao dhuũ almaa
dia que lhes o mar leuara pera lho dar e nos
todos obra de tiro depedra tras dele. como eles
viram ho esquife debertolameu dijz chegarãse
logo todos aagoa metendose neela ataa onde
mais podiam. acenaranlhes que posesem os
arcos e mujtos deles os hiam logo poer e trra
e outros os ñ punham. amdaua hy huũ que
falaua mujto aos outros que se afastasem mas
ñ ja que mamy parecece que lhe tijnham
acatameto ne medo / este que os asy amdaua
afastando trazia seu arco e seetas e amdaua tj
mto de timtura vermelha pelos peitos e espadoas
e pelos quadrijs coxas e pernas ataa baixo.
eos vazios com abarriga e estamego era da
sua propia cor e a timtura era asy vermelha
que aagoa lha ñ comya nem desfazia / ante
quando saya daagoa era mais vermelha. / sayo
huũ home do esquife de bertolameu dijz. e
andaua antreles sem eles emtenderem nada
neele quanta pera lhe fazerem mal. se ñ quã

to lhe dauam cabaços dagoa e acenauã aos
do esquife que saísem em terra. cõ jsto se volueo
bertolameu dijz ao capitam e viemonos aas
naaos acomer tanjendo tronbetas e gaitas
sem lhes dar mais apresam e eles tomaramse
aasentar na praya Easy por entam ficarã. /
neeste jlheo omde fomos ouujr misa epreegaã
espraya muito aagoa e descobre mujta area
e mujto cascalhaao. forã alguũs em nos hy estã
do buscar marisco e nõ no acharom. e acharã
alguũs camarões gorosos e curtos. / amtre

[Fol. 5 v]

o Capitão, com todos nós, para os batéis, com nossa bandeira alta. Embarcámos e fomos todos em direcção à terra para passarmos ao longo por onde eles estavam, indo, na dianteira, por ordem do Capitão, Bartolomeu Dias em seu esquife, com um pau de uma almadia que lhes o mar levara, para lho dar; e nós todos, obra de tiro de pedra, atrás dele.

Como viram o esquife de Bartolomeu Dias, chegaram-se logo todos à água, metendo-se nela até onde mais podiam. Acenaram-lhes que pousassem os arcos; e muitos deles os iam logo pôr em terra; e outros não.

Andava aí um que falava muito aos outros que se afastassem, mas não que a mim me parecesse que lhe tinham acatamento ou medo. Este que os assim andava afastando trazia seu arco e setas, e andava tinto de tintura vermelha pelos peitos, espáduas, quadris, coxas e pernas até baixo, mas os vazios com a barriga e estômago eram de sua própria cor. E a tintura era assim vermelha que a água comia nem desfazia, antes, quando saía da água, parecia mais vermelha.

Saiu um homem do esquife de Bartolomeu Dias e andava entre eles, sem implicarem nada com ele para fazer-lhe mal. Antes lhe davam cabaços de água, e acenavam aos do esquife que saíssem em terra. Com isto seolveu Bartolomeu Dias ao Capitão; e viemo-nos às naus, a comer, tangendo gaitas e trombetas, sem lhes dar mais opressão. E eles tornaram-se

a assentar na praia e assim por então ficaram.

Neste ilhéu, onde fomos ouvir missa e pregação, a água espraia muito, deixando muita areia e muito cascalho a descoberto. Enquanto aí estávamos, foram alguns buscar marisco e apenas acharam alguns camarões grossos e curtos, entre

[Fol. 5 v]

総司令官は、我らが御旗を高く掲げつつ、私たち一同と一緒に舢に戻りました。我らは舢に乗り込み、彼ら〔先住民〕のいるところへ移るべく、皆揃って陸をめざしました。総司令官の命により、小艇に乗ったバルトロメウ・ディアスが先頭に立ちました。ある筏からはずれ、海上を漂ってきた木のきれはしが一本ありましたが、彼はこれを手渡してやるため携えていました。私たちは皆、彼の後方、石を投げて届くくらいの位置にいました。

彼らはバルトロメウ・ディアスの小艇を見るや、皆、水辺に駆け寄り、自由に動けるぎりぎりまで、水の中へ入ってきました。弓を置くよう、身振りで伝えると、多くはすぐ陸へ置きにゆきましたが、従わぬ者もいました。

彼らへ向かって、遠ざかるよう、しきりに声をかけている男がひとりいましたが、皆がこの男に敬意なり畏怖を懐いているようには見えませんでした。仲間を遠ざけようと躍起になっている男は、弓・矢を携え、胸、肩、股、尻と、脚からその下を赤く染め、腹、みずおちといういわば〈空白〉だけが、彼本来の肌色でありました。染料はきわめて赤味が強く、水に流れず消えもしません。それどころか、水から上がったときの赤味はなおさら強烈に見えました。

ひとりの男が、バルトロメウ・ディアスの小艇を出ました。しばらく彼らの間を歩き来していましたが、男に危害を加えようとする気配は、彼らには少しもありません。それどころか、男には水入りの瓢箪ひょうたんをやり、小艇に残る連中に対しては、身振り手振りで、陸へ上がるよう、盛んに求めていました。

以上をもって、バルトロメウ・ディアスは、総司令官のもとへ引き返しました。私たちも、食事をとりに、それぞれのナウ船へ戻りました。彼らにこれ以上の圧迫感を与えぬよう、笛ふえや喇叭らっぱを吹き鳴らしながら。彼らはふたたび浜に腰をおろし、しばしじっとしていました。

子どもがミサと説教の聴聞に赴いたこの岩礁ではありますが、潮の引きが大きく、そのためおびただしい砂や砂礫が露わになります。私たちがそこにいる間、幾人かが甲殻類

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）
を探しにゆきました。太く短い^{えび}蝦が数匹見つかったのですが、

os quaaes. vijnha huũ mujto grande camarã
e muito grosso que em nhuũ tempo ovy tama
nho. tam bem acharom cascas de bergoões e da
meijeas mas nõ toparã cõ nhuũa peça jnt^{ra}
e tamto que comemos vieram logo todolos capi
taes aesta naao per mandado do capitã moor
com os quaes se ele apartou e eu na companhia
e preguntou asy atodos se nos parecia seer bem
mandar anoua do achamento desta trra avosa
alteza pelo nanjo dos mantim^{tos} peraa mjllhor
mãdar descobrir e saber dela mais do que agora
nos podiamos saber por hirmos denosa viagem
e antre mujtas falas que no caso se fezeram
foy per todos ou amayor parte dito que seria
mujto bem. e njsto comcrudiram. / e tamto
q̃ aconcrusam foy tomada. preguntou
mais se seria boo tomar aquy per força huũ par
destes homees. peraos mandar avosa alteza. e
leixar aquy por eles outros dous destes degra
dados. / aesto acordaram que nõ era necesa
reo tomar per força homees. por que jeeral
costume era dos que asy leuaron per força
peralgũa parte dizerem que ha hy todo oque
lhe preguntam. / e que mjllhor e mujto myllhor
enformaçon da trra dariam dous homees
destes degradados que aquy leixassem. doque
eles dariam seos leuasem por seer jente que
njmguem emtende nem eles tam cedo aprẽ

deriam afalar perao saberẽ tam bem dizer que
mujto mjllhor ho estoutros nom digam quando
ca vosa alteza mandar. e que por tamto nom
curasem aquy deper força tomar njmguem
nem fazer escandolo peraos detodo mais amã
sar e apaceficar. / se nom soom^{te} leixar aquy os
dous degradados quando daquy partisemos. / easy
por mjllhor parecer atodos ficou detremjnado ./

[Fol. 6]

os quais vinha um tão grande e tão grosso, como em nenhum tempo vi tamanho. Também acharam cascas de berbigões e amêijoas, mas não toparam com nenhuma peça inteira.

E tanto que comemos, vieram logo todos os capitães a esta nau, por ordem do Capitão-mor, com os quais ele se apartou, e eu na companhia. E perguntou a todos se nos parecia bem mandar a nova do achamento desta terra a Vossa Alteza pelo navio dos mantimentos, para melhor a mandar descobrir e saber dela mais do que nós agora podíamos saber, por irmos de nossa viagem.

E entre muitas falas que no caso se fizeram, foi por todos ou a maior parte dito que seria muito bem. E nisto concluíram. E tanto que a conclusão foi tomada, perguntou mais se lhes parecia bem tomar aqui por força um par destes homens para os mandar a Vossa Alteza, deixando aqui por eles outros dois destes degradados.

Sobre isto acordaram que não era necessário tomar por força homens, porque era geral costume dos que assim levavam por força para alguma parte dizerem que há ali de tudo quanto lhes perguntam; e que melhor e muito melhor informação da terra dariam dois homens destes degradados que aqui deixassem, do que eles dariam se os levassem, por ser gente que ninguém entende. Nem eles tão cedo aprenderiam a falar para o saberem tão bem dizer que muito melhor estoutros o não digam, quando Vossa Alteza cá mandar. E que portanto não cuidassem de aqui tomar ninguém por força nem de fazer escândalo, para de todo mais os amansar e apacificar, senão somente deixar aqui os dois degradados, quando daqui partíssemos.

E assim, por melhor a todos parecer, ficou determinado.

[Fol. 6]

その中にすごく大きく太いのが一匹いました。今まで見たこともない大きさでした。ベルビガン〔トリガイ〕やアメジジョア〔ムラサキガイ〕の殻もそれぞれ見つけましたが、ひとつとして欠けていない殻には出会いませんでした。

食事を済ませると、総司令官の命により、全司令官がただちに本ナウ船へやってきました。彼らとともに総司令官は別室へ退き、私もそれに同席しました。総司令官は、私も一同にこう尋ねました。我らは〔今、インディアへの〕航海の途上にある。それゆえ、国王陛下が〔後日〕よりよく当地を探索させよう、そして我らが今知りうる以上に、当地に関する知識を得られるよう、補給船によって、当地との遭遇に関する一報を陛下へお送りすること、諸君にはこれがよいと思われるか、と。

この件をめぐる多くの意見が出ましたが、全員、もしくは大多数によって述べられた意見は、これをよろしかろう、とするものでありました。一同、そのように決定しました。この決定が行なわれるや、総司令官はさらにこう尋ねました。国王陛下のもとへ送るため、ここで当地の男をふたりばかり力づくで捕えること、その代わりとして、当方の流刑囚をふたりこへ残すこと。諸君はこれをよしとされるか、と。

これについては、一同、次のような同意に至りました。無理やり捕える必要はありません。なぜなら〔お前の土地にこんなものがあるかと〕訊ねられれば、何でもかんでもあります、と言う。これこそ、無理やり他郷へ連れてゆかれる者の習いでありますから。それよりも〔重要なのは〕、我らがこへ残そうとする当方の流刑囚ふたりであります。このふたりこそ、仮の話〔本国へ〕連れていったとして、彼ら〔先住民〕がもたらすであろうより、もっと優れた、否、遥かに優れた、この地についての情報をもたらしてくれましょう。〔ポルトガルへ連れていったところで〕彼ら〔先住民〕の言うことがわかる者などひとりもいません。また、陛下がこちらへ誰かほかの者をお遣わしになるとき、その者がもうこれ以上うまくは話せぬという内容をしっかりと語る、それだけの力を、彼ら〔先住民〕が一朝一夕に体得することも、なかなか叶わぬだろうと思われれます。ですから、彼らをより手なずけ、おとなしくさせるため、無理やりこれを捕えたり、躓^{つまづ}きの種を蒔いたり、そういうことはゆめゆめ考へてはなりません。そうではなくて、我らが当地をあとにする際、こへふたりの流刑囚を残すこと、それだけを考慮すればよろしい、と。

以上が、全員により良策と考えられましたので、そう決定されました。

acabado jsto. dise ocapitam que fossemos nos ba
tees em trra e veersia bem o rrio quejando era
e tam bem pera folgarmos. / fomos todos nos
batees em tera armados e abandeira cõ nosco. /
eles amdauam aly na praya aaboca do rrio
omde nos hiamos e ante que chegamos. / do
emsino que dantes tijnham poseram todos
os arcos e acenavam que saisesmos e tanto
que os batees poserã as proas em trra pasarãse
logo todos aalem do rrio oqual nõ he mais an
cho que huũ jogo demanqual e tanto que
desenbarcamos. alguũs dos nosos pasarom
logo o rrio e foram antrelles. / e alguũs agua
rdauam e outros se afastauam. pero era acousa
demaneira que todos amdauam mesturados. /
eles dauam deses arcos com suas seetas por
sombreiros e carapuças de linho e por quall
quer cousa que lhes dauam. / pasaram aalem
tamtos dos nosos e amdauam asy mestura
dos cõ eles. que eles se esquiuaauam e afasta
uanse e hianse deles peracjma onde outros
estauam e entã ocapitam fezese tomar ao
colo de dous homees e pasou o rrio e fez tornar
todos. / ajente que aly era nõ serja mais
caaquela que soya. / e tanto queo capitã
fez tomar todos vieram alguũs deles aele
nõ polo conhecere por S.^{or} ca me parece que

nõ entendem ne tomauã disso c.^{lo} mas
por que ajente nossa pasava ja peraaquem do
rrio. / aly falauã e traziam mujtos arcs e
contjnhas daquelas ja ditas e rresgatauã
por qualquer cousa. em tal maneira que tro
uueram daly peraaas naaos mujtos arcs e see
tas e comtas e entam tornouse ocapitam
aaquem do rrio e logo acodirà mujtos aabeira dele

[Fol. 6 v]

Acabado isto, disse o Capitão que fôssemos nos batéis em terra e ver-se-ia bem como era o rio, e também para forgarmos.

Fomos todos nos batéis em terra, armados e a bandeira connosco. Eles andavam ali na praia, à boca do rio, para onde nós íamos; e, antes que chegássemos, pelo ensino que dantes tinham, puseram todos os arcs, e acenavam que saíssemos. Mas, tanto que os batéis puseram as proas em terra, passaram-se logo todos além do rio, o qual não é mais largo que um jogo de mancal. E mal desembarcámos, alguns dos nossos passaram logo o rio, e meteram-se entre eles. Alguns aguardavam; outros afastavam-se. Era, porém, a coisa de maneira que todos andavam misturados. Eles ofereciam desses arcs com suas setas por sombreiros e carapuças de linho ou por qualquer coisa que lhes davam.

Passaram além tantos dos nossos, e andavam assim misturados com eles, que eles se esquivavam e afastavam-se. E deles alguns iam-se para cima onde outros estavam.

Então o Capitão fez que dois homens o tomassem ao colo, passou o rio, e fez tornar a todos.

A gente que ali estava não seria mais que a costumada. E tanto que o Capitão fez tornar a todos, vieram a ele alguns daqueles, não porque o conhecessem por Senhor, pois me parece que não entendem, nem tomavam disso conhecimento, mas porque a gente nossa passava já para aquém do rio.

Ali falavam e traziam muitos arcs e continhas daquelas já ditas, e resgatavam-nas por qualquer coisa, em tal maneira que os nossos trouxeram dali para as naus muitos arcs e

setas e contas.

Então tornou-se o Capitão aquém do rio, e logo acudiram muitos à beira dele.

[Fol. 6 v]

これが済むと、総司令官は、舢舨に乗り上陸するよう、私たちに申しつけました。そうすれば、例の河[ムタリ河]がどのようなものであるか、よく確かめられましょう。加えて、楽しみくつろぎたいという願いもありました。

私たちは、武装を固め、かの御旗を持って、全員、舢舨から陸へ上がりました。あちらの浜を眺めると、私たちの向かいつつある河口のほうへ向かって、彼ら[先住民]がぞろぞろと歩いてきました。彼らは、私たちが着く前に、かつて私たちから受けた教えに従い、弓をすべて置きました。彼らは、身振りでもって、私たちが[舢舨を]出るように、ときりに伝えてきます。やがて舢舨が、その舳先を陸に上げるや、彼らは河の向こう岸へ移動してきました。河幅は、マンカール競技[中世ヨーロッパで行なわれた打球競技]の一打の飛距離もありません。舢舨を下りるや、わが仲間の一部は河を涉り、彼らの中へ混じってゆきました。彼らの中には、じっと待っている者がいる一方、遠ざかってしまう者もいました。しかし、ついにはすべての者が混然として一体となりました。ソンプレイロや亜麻製のカラブサ帽、それに我らの与えたありあわせの品に対するお返しとして、彼らは、弓にその矢を添えて、我らへ差し出しました。

わが仲間の多くは、河向こうへ涉り、進んで彼らと混じってゆこうとするのですが、彼らは一様に、逃げ出したり遠ざかったりするのであります。仲間のいる上流へ去ってしまう者もいました。

やがて総司令官は、ふたりの男に抱えてもらい、河を涉り、[去ってしまった]全員を戻らせました。

あたりにいたのは、いつもの人々だけだったのであります。総司令官が皆を呼びこやったところ、たちまち数人が彼のもとへ戻ってきました。ただし、総司令官を[我らの]首領と認めたからではありません。彼らはそうしたことを理解せず、[総司令官が我らの領袖であるという]認識も彼らにはありませんでした。それは単に、わが仲間が河のこちら側へ移りつつあったからにすぎません。

何やら話しながら、彼らは、たくさんの弓と、すでにふれたあの珠を持ってきました。そしてそれらを、我ら持ち合わせの品と盛んに交換しましたので、とうとう私たちもそちら

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）
から多数の弓・矢と、それに珠をもろもろのナウ船へ運び入れる仕儀と相成りました。
やがて総司令官が河のこちら岸へ戻るや、数多くの連中が川辺へ駆け寄ってきました。

aly verjees galantes pimtados depreto everme
lho e quartejados asy pelos corpos como pelas
pernas. que çerto pareciam asy bem. / tanbem
andauam antreles iiii ou b molheres moças
asy nuas que nom pareciam mal. antre as
quaaes amdaua huña com huña coxa
do giolho ataa oquadril e anadega toda tjnta
daquela tintura preta eoal. todo dasua propria
cor. out.^a trazia anbolos giolhos cõ as cur
uas asy tuntas e tam bem os colos dos pees.
e suas vergonhas tam nuas e com tanta jno
çemçia descubertas que nõ avia hy nenhuña
vergonha. / tam bem andaua hy out.^a molher
moça com huñ menjno ou menjna no colo
atado com huñ pano nõ sey deque aos peitos.
que lhe nõ parecia se nõ as perminhas. / mas
as pernas damay eo al no trazia nenhuñ
pano. / e depois moueo ocapitam peracjma
ao longo rrio que anda senpre acaram da
praya e aly esperou huñ velho que trazia
na mão hña paa dalmadia. / falou estãdo
ocapitã com ele perante nos todos sem onũca
njnguem emtender nem ele anos quanta
cousas que lhome preguntaua douro que nos
desejauamos saber seo avia na trra. / trazia
este velho obeição tam furado que lhe caberja

pelo furado huï gram dedo polegar e tra
zia metido no furado huïa pedra verde rroim
que çarava per fora aquele buraco e ocapitã
lha fez tirar e ele nõ sey que diaabo falaua
e hia cõ ela peraaboca do capitam peralha meter. /
esteuemos sobriso huï pouco rrjmdo e entam
enfadouse ocapitã e leixouo. e huï dos nosos
deulhe pola pedra huï sonbreiro uelho nõ por
ela valer alguã coussa. mas por mostra. e
despois aouue ocapitam. creio pera cõ as outras cou

[Fol. 7]

Ali verieis galantes, pintados de preto e vermelho, e quartejados, assim nos corpos, como nas pernas, que, certo, pareciam bem assim.

Também andavam, entre eles, quatro ou cinco mulheres moças, nuas como eles, que não pareciam mal. Entre elas andava uma com uma coxa, do joelho até ao quadril, e a nádega, toda tinta daquela tintura preta; e o resto, tudo da sua própria cor. Outra trazia ambos os joelhos, com as curvas assim tintas, e também os colos dos pés; e suas vergonhas tão nuas e com tanta inocência descoberta, que nisso não havia vergonha alguma.

Também andava aí outra mulher moça, com um menino ou menina ao colo, atado com um pano (não sei de quê) aos peitos, de modo que apenas as perninhas lhe apareciam. Mas as pernas da mãe e o resto não trazia pano algum.

Depois andou o Capitão para cima ao longo do rio, que corre sempre chegado à praia. Ali esperou um velho, que trazia na mão uma pá de almadia. Falava, enquanto o Capitão esteve com ele, perante nós todos, sem nunca ninguém o entender, nem ele a nós quantas cousas lhe demandávamos acerca doouro, que nós desejávamos saber se na terra havia.

Trazia este velho o beijo tão furado, que lhe caberia pelo furo um grande dedo polegar, e metida nele uma pedra verde, ruim, que cerrava por fora esse buraco. O Capitão lha fez tirar. E ele não sei que diabo falava e ia com ela direito ao Capitão, para lha meter na boca. Estivemos sobre isso rindo um pouco; e então enfadou-se o Capitão e deixou-o. E um dos

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

nossos deu-lhe pela pedra um sombreiro velho, não por ela valer alguma coisa, mas por amostra. Depois houve-a o Capitão, segundo creio, para, com as outras coi-

[Fol. 7]

さて、御覧になれましょうか¹⁹、肉体ばかりか両脚も、赤や黒の彩色で、かつ4つに染め分けた男どもの伊達ぶりを。確かにその外観はすばらしく見えました。

彼らの中には、4～5人の若々しい婦人が混じっています。男たちと同様裸体で、見目悪くはありませんでした。彼女らの中に、股——膝から尻にかけて——と、尻一面とを黒く染め、その他のみ本来の肌色というのが、ひとりいました。別のひとは、両膝のほか、ひかがみ[膝の後ろ、いわゆるオサラの反対側にある窪み]やくるぶしも同じように黒く染めていました。その恥部はまったくのむき出しであります。その露出ぶりがなんとも無邪気で、恥じらいなど彼女にはこれっぽっちもありません。

そこにはまた、男の子か女の子かを腕に抱いた若い婦人がいます。その子は一枚の布地——その素材が何であるかは存じません——によって彼女の腕にくるまれていましたから、ただそのちっちゃな足が覗いているだけでありました。ところが母のほうは、両脚も他の箇所も、一糸纏わずでありました。

その後、総司令官は、川沿いに上流へ歩きました。川はいつまでも浜に寄り添うように流れています。そこに、筏の櫂を手にした老人がひとり待ち構えていました。総司令官が相対している間、老人は、私たち一同の前でおしゃべりを続けました。老人のおしゃべりは誰にもわかりませんし、私たちの言うことも彼には理解されません。私たちが金について訊ねたあらゆることについてそうでした。私たちは、この土地に金があるかどうか、それを知れたかったのであります。

¹⁹ 原文 “aly verjees galantes” は、カロリーナ・ミカエリスによると、スペクタクルな情景などを描写し、それを読者の眼前に髣髴とせしめたいとき、その一文の冒頭に置く表現で、中世ポルトガルの諸年代記によく現われる (cf. Malheiro Dias, “Semana de Vera Cruz” in *op.cit.*, p.93, nota 36)。



ブラジル先住民(その 1)



ブラジル先住民(その 2)

アメリゴ・ヴェスプッチ『ムンドゥス・ノヴス(新世界)』(Amerigo Vespucci, *Mundus Novus*, Augsburg, 1505)のためヨハン・フロシヤウアーの描いた木版画(それぞれ部分)。この絵のキャプションには「彼らは裸であるが、男も女も、頭、首、腕、恥部、足を、羽毛で少しばかり覆っている」とあり、実際そのように描いてある。*Terra Brasil 1500* より

この老人は唇に大きな親指が入るであろうほどの穴をあけ、そこに、汚らしい^{きたな}緑色の石を一個嵌め込んでいました。あけた穴は、緑色の石によって外側から覆い隠されています。総司令官はそれをはずさせました。ところが老人ときたら、何を血迷ったのか、緑色の石を嵌めたまま、総司令官に近寄り、これを総司令官の口に嵌めようとしたのであります。私たちはこのやりとりを見て少し笑いました²⁰。がやがて、総司令官も嫌気がさし、

²⁰ “esteuemos sobriso huï pouco rjmdo” のように、コルテザンは、最後の現在分詞を “rjmdo” と読む(現代式綴りでは rindo. rir [笑う]の現在分詞)。ところがかつて、この rjmdo は rjnando(現代式綴りでは reinando. reinar の現在分詞)と読まれたことがある。この reinar は本来「支配する」(英語 reign)の意味である

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）
 老人を去らせました。わが仲間のひとは、緑色の石のお返しとして、古いソンプレイロをひとつ老人にやりました。緑色の石をもらっておいたのは、それに何らかの価値があるからというより、とりあえずの見本として。緑色の石は、後日、総司令官が手にしました。他の品々とあわせ、



ブラジル先住民(その3)

同前



ブラジル先住民の装身具

ドイツ人旅行家ハンス・シュターデンが 1557 年に刊行した著書に見える木版画。カミーニャは、彼らの「大多数は、唇に、骨製のあの〈嘴〉を嵌めています。〈嘴〉を嵌めていない連中は唇に穴をあけ、その穴に、革袋の口を開める閉じ金のような外観を有する、木製の棒を挿しています」と記す。Hans Staden, *Nus, Ferozes e Antropófagos: Verdadeira história de um país de selvagens nus, ferozes e canibais, situado no Novo Mundo chamado América*, ed. Manuel Paquete, [Lisboa], Feitoria dos Livros, s/d. より。原著タイトル *Wahraftige Historia und beschreibung einer Landschaft der Wilden Nacketen, Grimmigen Menschenfresser Leuthen in der Newenwelt America gelegen*, Marburg, 1557

が、現代ブラジルの民衆表現として、divertir-se(楽しむ)や brincar(ふざける)の意味で用いることがあり、現代ブラジルに残るポルトガル古語の一例と説明される。カロリーナ・ミカエリスは、この動詞について注記を施し“É o texto mais antigo em que encontrei o verbo *regnare*, empregado no sentido popular de *folgar*, *gozar*, *brincar*”(これは、ラテン語の動詞 *regnare* が *folgar*[寛ぐ], *gozar*[楽しむ], *brincar*[ふざける]の意味をもって民衆レベルで用いられる、そのような例が見える、私の遭遇した限り、最古のテキストである)と記す(Malheiro Dias, “Semana de Vera Cruz” in *op.cit.*, p.94, nota 39)。文脈からすると、どちらの動詞を用いても不自然な解釈に陥ることはないようだが、コルテザンの解説に従い和訳する。

sas amandar avosa alteza. / andamos per hy
veendo a rribeira aqual he de mujta agoa e
mujto boa. / ao longo dela ha mujtas palmas
nõ muito altas em que ha mujto boos palmj
tos. colhemos e comemos deles mujtos. / entã
tornouse ocapitã perabaixo peraaboca do rrio on
de desenbarcamos e aalem do rrio amdauã
mujtos deles dançando e folgando huũs
ante outros sem se tomarem pelas mãos e
faziãno bem. / pasouse entam aalem do rrio
diego dijz alx^e que foi de sacauem que he home
gracioso edeprazer elevou comsigo huũ ga
yteiro noso cõ sua gaita e meteose cõ eles
adançar tomandoos pelas mãos e eles folga
uam e rriam e amdauam cõ ele muy bem
ao soõ dagaita. depois de dançarem fezlhe
aly amdando no chaão mujtas voltas lige
iras e salto rreal deque se eles espantauam
e rriam e folgauã mujto. e com quanto os
cõ aquilo muito segurou e afaagou. toma
uam logo huũa esqujueza coma monteses e
foranse pera cjma. Eentã ocapitã pasou orrio
cõ todos nos outros e fomos pela praya delongo
himdo os batees asy acaram de tera e fomos
ataa huũa lagoa grande dagoa doçe que
esta jumto com apraya por que toda aquela
rrib^a do mar he apaulada percjma e saay
aagoa permujtos lugares e depois depasarmos
orrio foram huũs bij ou bijj deles amdar
antre os marinheiros que se rrecolhiã aos ba

tees e leuaram daly huñ tubaram que
bertolameu diij matou e leuualho e lanço
uo na praya. / abasta que ataaquy como quer
que se eles em alguña parte amansasem
logo dhuã mão peraout^a se esqujuauam

[Fol. 7 v]

sas, a mandar a Vossa Alteza.

Andámos por aí vendo a ribeira, a qual é de muita água e muito boa. Ao longo dela há muitas palmas, não mui altas, em que há muito bons palmitos. Colhemos e comemos deles muitos.

Então tornou-se o Capitão para baixo para a boca do rio, onde havíamos desembarcado.

Além do rio, andavam muitos deles dançando e folgando, uns diante dos outros, sem se tomarem pelas mãos. E faziam-no bem. Passou-se então além do rio Diogo Dias, almoxarife que foi de Sacavém, que é homem gracioso e de prazer; e levou consigo um gaiteiro nosso com sua gaita. E meteu-se com eles a dançar, tomando-os pelas mãos; e eles folgavam e riam, e andavam com ele muito bem ao som da gaita. Depois de dançarem, fez-lhes ali, andando no chão, muitas voltas ligeiras e salto real, de que eles se espantavam e riam e folgavam muito. E conquanto com aquilo muito os segurou e afagou, tomavam logo uma esquiveza como de animais monteses, e foram-se para cima.

E então o Capitão passou o rio com todos nós outros, e fomos pela praia de longo, indo os batéis, assim, rente da terra. Fomos até uma lagoa grande de água doce, que está junto com a praia, porque toda aquela ribeira do mar é apaulada por cima e sai a água por muitos lugares.

E depois de passarmos o rio, foram uns sete ou oito deles andar entre os marinheiros que se recolhiam aos batéis. E levaram dali um tubarão, que Bartolomeu Dias matou, lhes levou e lançou na praia.

Bastará dizer-vos que até aqui, como quer que eles um pouco se amansassem, logo duma mão para a outra se esquivavam,

これまた陛下へお送りするためと存じます。

私たちは例の小川を眺めながら、あたりを歩きました。川は水量豊かで、実に綺麗な水を湛えています。川沿いには椰子の木がたくさんあります。あまり高い木ではありません。そこには実にすばらしい新芽パルメットがなっており、私たちはその多くを集めて食べました。

やがて総司令官は、下流をめざし、私たちが舟をおりた河口へ引き返しました。

川の向こうでは、彼ら[先住民]の多くが、前後入り乱れ、お互いの手も取り合わず、夢中になって踊り、戯れています。実に楽しそうにしていました。やがて、河の向こうへディオゴ・ディアスが涉ってゆきました。彼は、サカヴェン²¹出身の収税官であり、愉快で楽しいことの好きな男であります。おりよく、みずからの笛を携えた我らの笛吹き師を連れていました。彼[ディオゴ・ディアス]は彼らの踊りの中に入り込み、その手を取りました。連中は戯れ、笑い、笛の音に合わせ、ディアスと仲よくやっています。彼らの踊りが済むと、ディアスは、地面を所狭しと動き廻り、連中のため、幾度も軽やかな宙返りをしたり、真に迫る跳び蹴りをしたりしてみせました。一同、それに感嘆し、笑い、大いに楽しみました。そういうことでもって、懸命に連中の心を掴み、機嫌取りをしたのでありますが、彼らはたちまち野生の獣さながらの御し難さを示すのであります。とうとう上流のほうへ去ってしまいました。

やがて総司令官は、私たち一同とともに河を涉り、浜沿いを歩きました。それにつれて、幾艘かの舟が陸寄りに進みました。やがて浜に近接した大きな淡水の湖に出ました。浜に近接したというのは、このあたりで小川は一面沼の如き様相を呈し、いたるところで水が[海へ]注いでいるからであります。

川を涉り終えてみると、彼ら[先住民]の7~8人が、舟へ戻ろうとしている水夫たちの間を行き来しています。彼ら[先住民]は一頭の鮫さめをそこから運び去りました。これはバルトロメウ・ディアスが殺し、彼らのもとへ運んできて、浜に投げ出しておいたものであります。

陛下にはこう申し上げるだけで充分でありましょう。彼らはこれまでのところ、少々はずねることができます。ただいくらそうできたとしても、何かあれば、あっという間に彼ら

²¹ リスボア近郊の地名。現在、リスボア(ポルテラ)空港のほぼ東北側に位置する。

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）
は逃げ去ってしまいます。

coma pardaaes deceuadoiro e homẽ nom lhes
ousa de falar mijo por se mais nom esquiuaem
e todo se pasa como eles querem polos bem a
mansar. / ao velho cõ que o capitam falou
deu huia carapuça vermelha e com toda a fala
que cõ ele pasou e com a carapuça que lhe
deu. tanto que se espedio que comecou de
pasar o rio. foise logo rrecatando, e nõ qujs
mais tomar do rio peraauem. / os outros dous
queo capitã teue nas naaos aque deu oque
ja dito he. numca aqui mais pareceram. de
que tiro seer jente bestial e depouco saber e
por ysso sam asy esqujvos. / eles porem cõ tudo
andam mujto bem curados e mujto limpos
e naquilo me parece ajmda mais que sam
coma aves ou alimareas monteses que
lhes faz ho aar mjilhor pena e mjilhor cabelo
que aas mansas. / porque os corpos seus sam
tam limpos e tam gordos e tam fremosos
que nõ pode mais seer. e jsto me faz presumir
que nõ teem casas ne moradas em que se co
lham eo aar aque se criam os faz taes. / ne
nos ajnda ataagora nom vimos nenhuãas casas
nem maneira delas. / mandou ocapitã aaquele
degradado aº Ribeiro que se fosse outª vez com
eles. oqual se foy e andou la huã boã pedaço
e aatarde tornouse queo fezerã vjir e nõ
oquiseram la consentir e derãlhe arcos e seetas

e nõ lhe tomarã nhũa cousa do seu. / ante dise
ele que lhe tomara huu deles huñas continhas
amarelas que ele leuaua e fogia cõ elas e ele
se queixou eos outros foram logo apos ele elhas
tomaram e tomaranlhas adar e emtam mã
darãno ṽjr. / dise ele que nõ vira la antre
eles se nõ huñas choupanjnhas de rrama verde
e de feeitos mujto grandes coma damtre doiro e
mjnho e asy nos tornamos aas naaos ja casy noute adormjr

[Fol. 8]

como pardais, do cevadoiro. Homem não lhes ousa falar de rijo para não se esquivarem mais; e tudo se passa como eles querem, para os bem amansar.

O Capião ao velho, com quem falou, deu uma carapuça vermelha. E com toda a fala que entre ambos se passou e com a carapuça que lhe deu, tanto que se apartou e começou de passar o rio, foi-se logo recatando e não quis mais tornar de lá para aquém.

Os outros dois, que o Capitão teve nas naus, a que deu o que já disse, nunca mais aqui apareceram – do que tiro ser gente bestial, de pouco saber e por isso tão esquiva. Porém e com tudo isto andam muito bem curados e muito limpos. E naquilo me parece ainda mais que são como aves ou alimárias monteses, às quais faz o ar melhor pena e melhor cabelo que às mansas, porque os corpos seus são tão limpos, tão gordos e formosos, que não pode mais ser.

Isto me fez presumir que não têm casas nem moradas a que se acolham, e o ar, a que se criam, os faz tais. Nem nós ainda até agora vimos casa alguma ou maneira delas.

Mandou o Capitão aquele degredado Afonso Ribeira, que se fosse outra vez com eles. Ele foi e andou lá um bom pedaço, mas à tarde tornou-se que o fizeram eles vir e não o quiseram lá consentir. E deram-lhe arcsos e setas; e não lhe tomaram nenhuma cousa do seu. Antes – disse ele – que um lhe tomara umas continhas amarelas, que levava, e fugia com elas, e ele se queixou e os outros foram logo após, e lhas tomaram e tornaram-lhas a dar; e então mandaram-no vir. Disse que não vira lá entre eles senão umas choupaninhas de rama verde e de fetos muito grandes, como de Entre Douro e Minho.

E assim nos tornámos às naus, já quase noite, a dormir.

[Fol. 8]

それはさながら餌仕掛けを避ける雀のようでありました。もう逃げな、と敢えて頭ごなしに言う者はいません²²。よくよく懐柔するため、すべては連中の欲するとおり、というなりゆき任せであります。

総司令官は、さきほど対話した老人へ赤いカラブサ帽をひとつやりました。両者の間に交わされた会話、総司令官からもらったカラブサ帽などこ吹く風、老人は遠ざかり、川を涉りはじめるや、警戒を示しつつ、たちまち立ち去ってしまい、もう戻ってようとはしませんでした。

総司令官がナウ船に迎え、上述したものを与えたあのふたりの男は、もう姿を見せませんでした。そこから私は推測するのですが、彼らは獣的で、知能に乏しく、ゆえに人見知りのひどく強い人々なのではないでしょうか。しかし、それにもかかわらず、彼らは

²² カミーニャのテキストには、漠然として「人」を指し、主語に立つ、非人称代名詞の *homem* を 3 例見出すことができる。この非人称代名詞は、アルカイック期に用いられ、現代ポルトガル語では失われた用法である。エピファニオ・ディアスによると、これは、現代フランス語における非人称代名詞 *on* と、ある程度一致する、という。「ある程度」というのは、16 世紀においても、ポルトガル語の *homem* のほうは、フランス語の *on* に比べ、その使い方がやや限定的だったらしいから (cf. Epiphany da Silva Dias, *Sintaxe Histórica Portuguesa*, p.22)。

16 世紀ポルトガル語における *homem* の用法を改めて確認するため、『ウズ・ルジーアダス』の次の一節を引く。“Mas o alto Deos, que pera longe guarda, / O castigo daquelle que o mereçe, / Ou pera que se emende aas vezes tarda, / Ou por segredos que homem não conhece” [しかし、至高なるデオス(神)は罪に相応なる者の処罰を/永らく控えるか、時には遅らせる。/あるいはその悔い改めを俟つがゆえ、/あるいは人の知り得ぬ秘密により] (*OS LUSIADAS de Luis de Camoës*, III, Lisboa, 1572, f.49v. Biblioteca Nacional de Portugal, cam-3-p)

「書翰」からの 3 例を含む上記の例証によってわかるとおり、ポルトガル語では、まったく漠然とした——特定性が極めて低い、と言い換えてもよい——主語としてしか、非人称の *homem* は用いることができなかつた。それに対し、フランス語はどうかであったか。たとえば、部屋の外から誰かがドアをノックしている。エピファニオ・ディアスによると、それを表現するに、フランス語では、16 世紀も現在も、非人称の *on* を主語に立て、“*On frappe á la porta*” ということができたし、今もそうである、という(ポルトガル語で、おそらくは昔も今も、姿は見えぬが、ドアを開けることによってそれが誰だか容易に判明する、という状況のもと、その「誰か」がドアをノックしている、ということを表わすのに、“*Homem está a bater na porta*” とは言わないと思う)。

以上から、次のような言説を導き出しうるのではないか。すなわちポルトガル語では、この例文に見るような、*alguém* (somebody もしくは anybody) と置き換えるような非人称の *homem* が、現在はもちろん過去においても存在しなかつた、と。

よく養生しており、まことに清潔であります。そこで私には次のような思いがいつそう募ります。鳥や野生の獣というのは、外気に馴染むほうが、人に飼われるより、美しい羽や、りっぱな体毛に恵まれるもの。けれど彼らもそのたぐいなのではないだろうか、と。申しますのは、彼らの肉体は、もうこれ以上はあり得ぬほど清潔で、肥えようもりっぱであり、美麗だからであります。

このことは、私にこう推測させます。彼らは、雨露を凌ぐべき家や居所を持たぬのではないか、また、彼らが成育するに際し身を曝してきた大気、それこそが彼ら〔の肉体〕をこうもすばらしくさせるのではないかと。今まで私たちは、一軒の家も、それらしきものも見ていません。

総司令官は、かの流刑囚アフォンソ・リベイロへ申しつけました。もう一度、彼ら〔先住民〕のところへ行って来るように、と。彼は出かけました。しばしそこを巡り歩きましたが、午後になると戻ってきました。彼は、帰るよう命ぜられ、ここに居られては困る、と言い渡されたのであります。彼らはリベイロへ弓・矢を与えましたが、彼の持ち物は何ひとつ取り上げませんでした。それどころか、と、リベイロはこう言いました。ある男が、俺の持っていた、黄色い小さな珠をひったくって逃げ出した。何をすると叫ぶと、他の連中があとを追いかけて、男から珠を取り上げ、返しに来てくれた。そのうえで、お前、帰れ、と命ぜられた、と。さらにリベイロは言いました。連中の間では、緑の枝葉と、すこぶる大きなシダで葺かれた粗末な小屋を何軒か見ただけだった。ちょうどエントレ＝ドウロ＝イ＝ミーニョ²³にあるようなやつだった、と。

かくて、夜が近づいたので、私たちは眠るため、ナウ船へ戻りました。

aaseg^{da} feira depois de comer saimos todos e tra
atomar agoa. / aly vieram em tam mujtos. mas
nõ tamtos comaas outras uezes e traziã ja
muito poucos arcs e esteuerã asy huñ pouco
afastados denos. e despois poucos epoucos mestu
raranse cõ nosco. e abracauãnos e folgauam
e alguũs deles se esqujuauam logo. / aly da

²³ ドウロ河(Rio Douro)とミーニョ河(Rio Minho)とに挟まれた地方。ポルトガル西北部。

uam alguĩs arcos por folhas depapel e por al
gũa carapucinha velha e por qual ãr cousa
Eem tal maneira se pasou acousa que bem
xx ou xxx pessoas das nosas se forã cõ elles
onde outros mujtos deles estauam com moças
e molheres e trouueram dela muitos arcos
e baretes depenas daues deles verdes e deles
amarelos de que creo queo capitam hade
mãdar amostra a vossa alteza. e seg^o deziã
eses que la forã folgauam com eles. / ne
este dia os uimos de mais perto e mais aanosa
vontade por andarmos todos easy mesturados
Ealy deles andauam daquelas tinturas
quartejados outros de meetades outros detanta
feičam coma e panos darnar e todos com os
beijos furados e mujtos cõ os osos neeles e deles
sem osos. / traziã alguĩs deles huĩs ourjços
verdes daruores que na cor querjam pa
recer de castinheiros se nõ quanto herã mais
e mais pequenos e aqueles herã cheos dhuĩs
grãos vermelhos pequenos, que esmagandoos
antre os dedos fazia tintura muito vermelha
daque eles andauam tintos e quanto se ma
is molhavã tanto mais vermelhos ficauam. /
todos andam rrapados ataacjma das orelhas.
e asy as sobrançelhas e pestanas. / trazem todos
as testas de fonte afomte tintas datintura
preta que parece huĩa fita preta ancha de

[Fol. 8 v]

À segunda-feira, depois de comer, saímos todos em terra a tomar água. Ali vieram então muitos, mas não tantos como as outras vezes. Já muito poucos traziam arcos. Estiveram assim um pouco afastados de nós; e depois pouco a pouco misturaram-se connosco. Abraçavam-nos e folgavam. E alguns deles se esquivavam logo. Ali davam alguns arcos por folhas de papel e por alguma carapuzinha velha ou por qualquer coisa. Em tal maneira isto se passou que bem vinte e trinta pessoas das nossas se foram com eles, onde outros muitos estavam com moças e mulheres. E trouxeram de lá muitos arcos e barretes de penas de aves, deles verdes e deles amarelos, dos quais, segundo creio, o Capitão há-de mandar amostra a Vossa Alteza.

E, segundo diziam esses que lá foram, folgavam com eles. Neste dia os vimos mais de perto e mais à nossa vontade, por andarmos quase todos misturados. Ali, alguns andavam daquelas tinturas quartejados; outros de metades; outros de tanta feição, como em panos de armar, e todos com os beijos furados, e muitos com os ossos neles, e outros sem ossos.

Alguns traziam, uns ouriços verdes, de árvores, que, na cor, queriam parecer de castanheiros. Embora mais pequenos. E eram cheios duns grãos vermelhos pequenos, que, esmagados entre os dedos, faziam tintura muito vermelha, de que eles andavam tintos. E quando mais se molhavam, tanto mais vermelhos ficavam.

Todos andam rapados até cima das orelhas; e assim as sobrancelhas e pestanas.

Trazem todos as testas, de fonte a fonte, tintas da tintura preta, que parece uma fita preta, da largura de

[Fol. 8 v]

月曜日[4月27日], 食事の後, 私たち一同は, 水汲みのため陸に上がりました。やがてそこへ, たくさんの者がやってきました。しかし以前ほどの数ではありません。もはや, 弓を携えているのは, ほんの僅かでありました。ただし, 私たちから少し遠ざかっていることは, 以前と変わりません。その後, 少しずつ, 私たちの中に交じってきました。私たちが抱擁し, 愉快そうにしている者がいる一方, こそこそ逃げてしまう連中もいます。数枚の紙切れ, 使い古しのカラプサ帽, そのほか何かの品に対するお返しとして, 彼らは弓を幾本かくれました。こうしたやりとりはうまく運び, わが仲間のうち優に 20~30 人が彼らと交歓しました。そこには多人数の一团が別にあり, 彼らは少女や婦人連れでありました。

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）
そして、弓や、鳥の羽製の被り物を多数持ってきました。被り物は、緑色のものあり、黄色のものあり²⁴、それらから選りすぐった見本を、総司令官は、陛下へお送りするに相違ないと信じます。

そちらへ赴いた者たちは、皆、彼ら〔先住民〕と楽しくやってきた、と申しました。この日、より近くから連中を見ましたが、我ら皆、進んで交歓を重ねた甲斐あって、彼らはいっそう我らの意のままになっていると察せられました。そこには、かの〔多彩な〕染料でもって、肉体を4つに染め分けている者、半分だけ染めている者、つづれ織りにおけるが如く、ずいぶん凝った文様に染めている者、いろいろいました。皆、唇に穴をあけ、そこに骨を嵌^はめている者が多数でしたが、そうはしていない者もいました。

数人の者が、より小さくはあるけれど、色に関しては、栗の木のように見える樹木から、緑色の毬^{いば}を採って持ってきました。毬には、赤く小さな粒が幾つか詰まっており、それらを指と指の間で潰すと、彼らの塗っている、赤味のすこぶる強いあの染料となるのであります。これで染めている男どもは、水に濡れれば濡れるほど、赤味がいっそう増すばかりでした。

彼らは皆、頭髪を両耳の上まで剃り上げ、眉毛^{まゆげ}や睫毛^{まつげ}すら剃ってしまっています。

誰もが、こめかみからこめかみに至る額に、黒い染料を塗っており、そのようすはまるで一筋の黒いリボンさながらであり、その幅は2デド〔デドは人さし指の幅〕であります。

dous dedos. Eo capitã mandou aaqueles degra
dado a° rribeiro e aoutros dous degradados que
fosem amdar la antreles e asy ad° dijz po
seer home ledó com que eles folgauam. e
aos degradados mandou que ficassem la
esta noute. Foramse la todos e andaram
antreles e seg° eles deziã foram bem huã
legoa e meia ahuã pouoraçom de casas em
que averja ix ou x as quaaes deziã

²⁴ 「あるものは……、あるものは……」と表現するとき、今なら “alguns (algumas) ..., alguns (algumas)...” といふところ、古いポルトガル語では、deles (delas)..., deles (delas)...といふ言い回しを用いた。これも古いポルトガル語に見られた partitivo の一種である(次脚注参照)。

q̃ erã tam comridas cada huã comeesta naao capitana. e herã de madeira e das jlhargas de tauoas e cubertas de palha de rrazoada al tura e todas em huã soo casa sem nhuũ rrepar timento tijnham de dentro mujtos esteos e de steo aesteo huã rrede atada pelos cabos e cada esteo altas em que dormjam e debaixo pera se aqueantarem faziam seus fogos e tijnha cada casa duas portas pequenas huã e huũ cabo e out^a no outro. e deziã que em cada casa colhiam xxx ou R pessoas e que asy os achauam e que lhes dauam de comer da quela vianda que eles tijnham. s. mujto jnhame eoutras sementes que na trra ha q̃ eles comem. e como foy tarde fezerãnos logo todos tornar e nom quiseram que la ficasse nhuũ e ajnda seg^o eles deziã queriãse ṽjrcõ eles. / rresgataram la por cascauees e por out^{as} cousinhas depouco ualor q̃ leuauã pa pagayos vermelhos mujto grandes e fremosos. edous verdes pequenjnos e carapuças de penas verdes e huũ pano de penas de mujtas cores maneira de teçido asaz fremoso seg^o vosa alteza todas estas cousas vera por que oca pitã volas ha de mandar seg^o ele dise. e com jsto vieram. e nos tornamonos aas naaos. /.

[Fol. 9]

dois dedos.

E o Capitão mandou àquele degredado Afonso Ribeiro e a outros dois degredados, que

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

fossem lá andar entre eles; e assim a Diogo Dias, por ser homem ledo, com que eles folgavam. Aos degredados mandou que ficassem lá esta noute.

Foram-se lá todos, e andaram entre eles. E, segundo eles diziam, foram bem uma légua e meia a uma povoação, em que haveria nove ou dez casas, as quais eram tão compridas, cada uma, como esta nau capitaina. Eram de madeira, e das ilhargas de tábuas, e cobertas de palha, de razoada altura; todas duma só peça, sem nenhum repartimento, tinham dentro muitos esteios; e, de esteio a esteio, uma rede atada pelos cabos, alta, em que dormiam. Debaixo, para se aquecerem, faziam seus fogos. E tinha cada casa duas portas pequenas, uma num cabo, e outra no outro.

Diziam que em cada casa se recolhiam trinta ou quarenta pessoas, e que assim os achavam; e que lhes davam de comer daquela vianda, que eles tinham, a saber, muito inhame e outras sementes, que na terra há e eles comem. Mas, quando se fez tarde, fizeram-nos logo tornar a todos e não quiseram que lá ficasse nenhum. Ainda, segundo diziam, queriam vir com eles.

Resgataram lá por cascavéis e por outras coisinhas de pouco valor, que levavam, papagaios vermelhos, muito grandes e formosos, e dois verdes pequeninos e carapuças de penas verdes, e um pano de penas de muitas cores, maneira de tecido assaz formoso, segundo Vossa Alteza todas estas cousas verá, porque o Capitão vo-las há-de mandar, segundo ele disse.

E com isto vieram; e nós tornámo-nos às naus.

[Fol. 9]

総司令官は、かの流刑囚アフォンソ・リベイロと、別の流刑囚ふたりに対し、彼ら〔先住民〕の間をひと巡りしてくるよう、命じました。ディオゴ・ディアスに同じ命が下ったのは、彼が陽気な男であったためであります。この男を相手に彼ら〔先住民〕は楽しいひとときを過ごしました。流刑囚の面々に対し、総司令官は、今夜はそちらに留まるよう命じました。

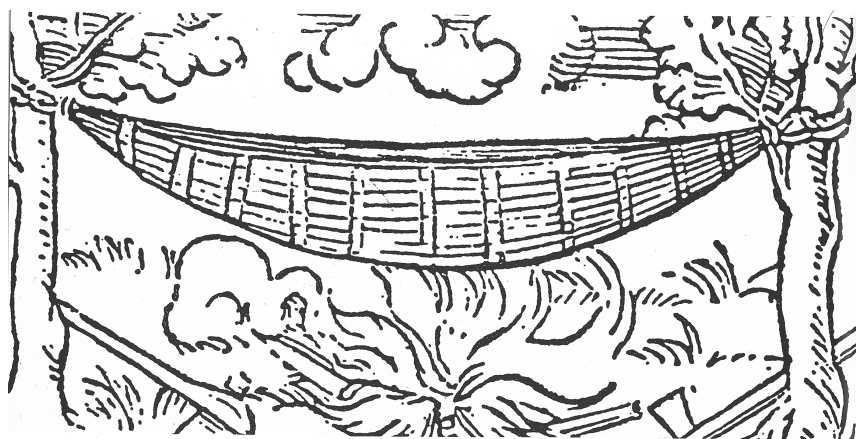
流刑囚はすべてそちらへ向かい、彼ら〔先住民〕の間を歩き廻りました。流刑囚たちはこう語っていました。俺たちは、優に一レグア半〔7~8 キロメートル〕は歩いて、ある部落に達した。そこには9軒か10軒の家があったろう。家々はすこぶる長く、それぞれがわが船隊の旗艦ほどある。いずれも木造だ。両側には板材が取りつけてある。家々は、藁で覆

われており、相当な高さだ。どの家も一室だけで成り、仕切りがない。室内にはたくさんの支柱がある。支柱と支柱との間には高々とハンモックが吊ってあり、ハンモックは縄によって〔支柱に〕縛りつけてある。彼らはここで眠るのだ。暖をとるため、下から火を熾おこしている。それぞれの家には小さな扉がふたつずつある。一方の端にひとつ、他の端にもうひとつだ、と。

流刑囚たちはこうも言っていました。彼らは、ありあわせの食べ物を一部振る舞ってくれた。つまり、この土地に産して連中の食うヤムイモイニャーメや、その他いろいろな穀粒こくりゅうだ、と。ところが遅くなると、ただちに全員が引き取るよう命じられ、誰ひとり居残られては困る、と言い渡されました。さらに流刑囚たちは、連中は俺たちと一緒にこっちへ来たがっていた、とも申しました。

流刑囚たちの携えていた鈴、その他ほとんど価値のないがらくたと引き換えに、彼らの差し出したものは次のとおりでありました。非常に大きくて美しい、赤い鸚鵡数羽、小さな、緑色の鸚鵡2羽、緑色の羽製のカラブサ帽数個、さまざまな色の羽で製した布地一枚。これはかなり美しい織物のようなものでありました。以上の品々、総司令官がきつとお送りしようと申しましたから、やがて陛下のお目にとまるであります。

以上を終えて、流刑囚たちは戻ってきました。私たちもナウ船へ引き返しました。



ハンモック

ハンス・シュターデンの著書に見える木版画。野外のハンモックのようだが、暖をとるため下から火を熾しているのは、カミーニャの記事と一致する。同前

aaterça feira depois de comer fomos e trra dar

Guarda delenha e leuar rroupa. / estauam
na praya quando chegamos obra de lx ou
lxx sem arcos e sem nada. / tanto que che
gamos vieramse logo peranos sem se esqj
uarem. / e depois acodiram mujtos que se
riam bem j^c todos sem arcos. / e mestura
ramse todos tanto com nosco que nos aju
dauam deles aacaretar lenha e meter nos
batees e lujtauam cõ os nossos e tomauam
muito prazer. / Eem quanto faziamos
alenha. faziam dous carpenteiros huã
grande cruz dhuã pao que se ontem pera
yso cortou. / mujtos deles vijnham aly estar
cõ os carpenteiros e creo queo faziã mais por
veerem afaramenta de ferro com ã afaziã
ã por veerem acruz por que eles nõ teem
cousa que de ferro seja e cortam sua mad^{ra}
e paaos com pedras feitas coma cunhas me
tidas em huã pao antre duas talas muy
bem atadas e per tal maneira que andam
fõrtes seg^o os homees que ontem suas
casas deziam por que lhas viram la. / era
ja aconuersaçam deles com nosco tanta
que casy nos toruauam ao que aviamos
defazer. / Eo capitã mandou adous degra
dados e ad^o djz que fossem la aaldea e a
outras se ouuesem delas nouas e ã ã toda
maneira nõ se viesem adormjr aas naos
ajnda que os eles mandasem e asy se forã. /
em quanto andauamos neesa mata acor

tar alenha atrauesauam alguũs papa
gayos per esas aruores deles verdes e ou
tros pardos grandes e pequenos dema

[Fol. 9 v]

À terça-feira, depois de comer, fomos em terra dar guarda de lenha e levar roupa.

Estavam na praia, quando chegámos, obra de sessenta ou setanta sem arcos e sem nada. Tanto que chegámos, vieram logo para nós, sem se esquivarem. Depois acudiram muitos, que seriam bem duzentos, todos sem arcos; e misturaram-se todos tanto connosco que alguns nos ajudavam a acarretar lenha e a meter nos batéis. E lutavam com os nosso e tomavam muito prazer.

Enquanto cortávamos a lenha, faziam dois carpinteiros uma grande Cruz, dum pau, que ontem para isso se cortou.

Muitos deles vinham ali estar com os carpinteiros. E creio que o faziam mais por verem a ferramenta de ferro com que a faziam, do que por verem a Cruz, porque eles não têm coisa que de ferro seja, e cortam sua madeira e paus com pedras feitas como cunhas, metidas em um pau entre duas talas, mui bem atadas e por tal maneira que andam fortes, segundo diziam os homens, que ontem a suas casas foram, porque lhas viram lá.

Era já a conversação deles connosco tanta que quase nos estorvavam no que havíamos de fazer.

O Capitão mandou a dois degredados e a Diogo Dias que fossem lá à aldeia (e a outras, se houvessem novas delas) e que, em toda a maneira, não viessem dormir às naus, ainda que eles os mandassem. E assim se foram.

Enquanto andávamos nessa mata a cortar lenha, atravessavam alguns papagaios por essas árvores, deles verdes e outros pardos, grandes e pequenos, de ma-

[Fol. 9 v]

火曜日(4月28日)、食事の後、私たちは〔伐った〕薪の見張り、および衣服の洗濯のため、陸へ上がりました。

私たちが辿り着いたとき、浜にいたのは60人か70人くらいでした。弓も何も持ってい

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）
ませんでした。浜に辿り着くや、彼らは我らのほうへやってきました。こそこそと立ち去ったりはしません。しばらくして、大勢が駆け寄ってきました。優に 200 人はいたであります。弓など誰も持っていません。皆、私たちといとも親しげに交わり、なかには荷車で薪を運んだり、それを舁に積んだりする作業を手伝ってくれる者もいました。彼らはわが仲間と闘技に興じ、一同大いに楽しみました。

私たちが薪を伐っている最中、ふたりの大工が、きのうそのために伐られた木材から、大きな十字架を作りました。

大工のもとへ彼らの多くが寄ってきました。ただし十字架を見るためというよりは、十字架を作るのに用いている鉄器を見るためであった、と信じます。彼らは、鉄製のものを何ひとつ持っていませんし、樹木や木材は石器で切るからであります。彼らの石器は、楔くさびのような形に削った石を、2本の添え木に挟まれた木片に嵌め込み、その添え木同士を固く縛りつけたものであります。このようなわけでその堅牢さは大変なものだ、ときのう彼ら〔先住民〕の家へ赴いた者たちは語っていました。彼らは現に見てきたのでありますから〔その言葉に間違いはないでしょう〕。

いまや彼らと我らとの接触は非常に濃密となり、私たちのやらねばならぬことも、連中のためややもすれば妨げられるほどになりました。

流刑囚ふたりとディオゴ・リベイロとに対し、総司令官はこう命じました。〔先に諸君が赴いた〕部落へゆけ。また新たに部落があれば、そこへもゆけ。たとえ彼らが命じても、決してナウ船へ眠りに戻ってはならぬ、と。かくて彼らは出かけてゆきました。

私たちが森の中で懸命に木を切っている間、鸚鵡が数羽、木々の間を飛び過ぎてゆきました。緑色のもの、褐色のもの、大きいもの、小さいもの。このようなありさまですから、

neira que me parece que avera neesta trra
mujtos pero eu nom veria mais que ataa ix
ou x. outras aves entã nom vimos som^{le}
alguãas ponbas seixas e parecerãme ma
yores em boa camtidade caas de portugal.
alguãis deziã que virã rrolas mas eu nõ
as vy mas seg^o os aruoredos sam muy

mujtos e grandes e djmfmdas maneiras
nõ doujdo que per ese sartaão ajam muj
tas aues. Eaçerqua danoute nos volue
mos peraas naaos com nosa lenha. / eu
creo S^{or} que nõ dey ajnda aquy conta avosa
alteza da feiçam de seus arcos e seetas. / os
arcos sam pretos e conpridos e as seetas cõ
pridas e os feros delas de canas apara
das seg^o vosa alteza vera pe alguũs que
creo queo capitã aela ha demujar. /
aaquarta feira nõ fomos em trra por que ocapi
tam andou todo o dia no naujo dos mantimẽtos
adespejalo e fazer leuar aas naaos jssso que ca
dahuũa podia leuar. / eles acodiram aapraya
mujtos seg^o das naaos vimos que seriam obra de iij^c
seg^o sancho detoar que la foy dise. / diego diiz
e a^o rribeiro odegradado aque ocapitã otem
mandou que em toda maneira la dormisem
volueranse ja denoute por eles nom quererem
que la dormisem e trouuerã papagayos verdes
e out^{as} aues pretas casy como pegas se nõ quãto
tijnham obico bramco eos rrabos curtos. e quãdo
se sancho de toar rrecolheo aanaao querianse vïjr
cõ ele alguũs mas ele nõ qujs se nõ dous mã

[Fol. 10]

neira que me perace haverá muitos nesta terra. Porém eu não veria mais que até nove ou dez. Outras aves então não vimos, somente algumas pombas seixas, e pareceram-me bastante maiores que as de Portugal. Alguns diziam que viram rolas; eu não as vi. Mas, segundo os arvoredos são mui muitos e grandes, e de infindas maneiras, não duvido que por esse sertão

haja muitas aves!

Cerca da noite nos volvemos para as naus com nossa lenha.

Eu, creio, Senhor, que ainda não dei conta aqui a Vossa Alteza da feição de seus arcos e setas. Os arcos são pretos e compridos, as setas também compridas e os ferros delas de canas aparadas, segundo Vossa Alteza verá por alguns que – eu creio – o Capitão a Ela há-de enviar.

À quarta-feira não fomos em terra, porque o Capitão andou todo o dia no navio dos mantimentos a despejá-lo e fazer levar às naus isso que cada uma podia levar. Eles acudiram à praia; muitos, segundo das naus vimos. No dizer de Sancho de Tovar, que lá foi, seriam obra de trezentos.

Diogo Dias e Afonso Ribeiro, o degredado, aos quais o Capitão ontem mandou que em toda maneira lá dormissem, volveram-se já de noite, por eles não quererem que lá ficassem. Trouxeram papagaios verdes e outras aves pretas, quase como pegas, a não ser que tinham o bico branco e os rabos curtos.

Quando Sancho de Tovar se recolheu à nau, quieram vir com ele alguns, mas ele não quis senão dois man-

[Fol. 10]

この地には、さぞたくさんの鸚鵡がいるのであろうと思われます。もつとも、私が見たのは、せいぜい9羽か10羽でしたでしようか。そのとき別の鳥は見かけませんでしたが、ただ鳩だけは例外です。これはポルトガルのよりはよほど大きいと思われました。キジバトを見たと言う者もいましたが、私は見ておりません。しかし木々はまことにおびただしく、かつ堂々としており、限りないほどに多種多様でありますから、内奥部を巡れば定めしたたくさんの鳥がいるのであろうことを、私は疑いません。

夜が近づいてきましたので、私たちは薪を持ってナウ船へ戻りました。

陛下よ、私はまだ、彼らの弓・矢の形状について報告をしておらぬと存じます。弓は黒く、長く、矢もまた長く、その切っ先は管状植物を尖銳に切り揃えたもの。総司令官が若干の見本をお送りするに違いないと存じますので、やがて御覽いただけましよう。

水曜日[4月29日]、私たちは陸に上がりませんでした。終日、総司令官は補給船に留まり、これの荷を抜き、もろもろのナウ船へそれぞれの積載能力が及ぶ限り移し替える、

という作業に従ったからであります。彼ら〔先住民〕は浜へ駆けてきました。ナウ船から眺めたところ、おびただしい数でした。そちらへ赴いたサンチョ・デ・トヴァールの言葉によると、その数およそ 300 人であろう、とのことでした。

ディオゴ・ディアスと、流刑囚アフォンソ・リベイロのふたりに対し、総司令官は、何としても、彼らのもとで一夜を明かしてくるよう、申しつけました。ところがふたりは、ここに居られては困ると言われたからと、夜の帳とばりが下りる頃、こちらへ引き返してきました。ふたりは、緑色の鸚鵡おうむと、それとは別の黒い鳥を持ち帰りました。黒い鳥は、嘴が白いのと、尻尾が短いのを別とすれば、ほぼカササギと変わりません。

サンチョ・デ・トヴァールがナウ船へ戻ろうとすると、男たちが数人、一緒にゆきたい、と言い出しました。しかし彼は、男ぶりがよく、押し出しの利いた若者ふたりのほかは、断りました。

cebos despostos e homees de prol. / mandouos esa
noute muy bem pemsar e curar e comeram toda
vianda que lhes deram e mandoulhes fazer cama
de lençooes seg^o ele disse e domjram e folgaram
aquela noute e asy nõ foy mais este dia que pera
screpuer seja
aaqujnta feira derad.¹⁰ dabril comemos logo casy
pola manhaã e fomos em trra por mais lenha
e agoa e em querendo ocapitam sair desta naao
chegou sancho detoar com seus dous ospedes epor
ele nõ teer ajnda comjdo poseranlhe toalhas
e veolhe vianda e comeo. / os ospedes assentarãnos
em senhas cadeiras e detodo oque lhes deram come
ram muy bem. especialmente lacam cozido frio
e arroz. nõ lhes deram v^o por sancho detoar dizer
queo nõ bebiam bem. / acabado ocomer metemo
nos todos no batel e eles cõ nosco. / deu huũ arom
ete ahuũ deles huũa armadura grande de porco

montes bem rreuolta e tamto que atomou meteo
logo no beicho e por que se lho nõ queria teer derã
lhe huũa pequena de cera vermelha e ele corejeo
lhe detras seu aderemço para se teer e meteo no bei
ço asy rreuolta pera cjma e vijnha tam comtente
com ela como se teuera huũa grande joya. / e
tamto que saymos em trra foise logo cõ ela que
nõ pareço hy mais. / andariam na praya quãdo
saymos biij ou x deles e dhi a pouco começaram
de ṽjr. e pareçeme que vijnriam este dia aapra
ya iij^c ou iij^l. / traziã alguũs deles arcos e
seetas e todolos deram por carapuças e por quall
q̃r cousa que lhes dauam. / comiam cõ nosco do q̃
lhes dauamos e bebiam alguũs deles v^o e outros
o nõ podiam beber mas pareçeme que se lho ave

[Fol. 10 v]

cebos dispostos e homens de prol. Mandou-os essa noite mui bem pensar e tratar. Comeram toda a vianda que lhes deram; e mandou fazer-lhes cama de lençois, segundo ele disse. Dormiram e folgaram aquela noite.

E assim não houve mais este dia que pera escrever seja.

À quinta-feira, derradeiro de Abril, comemos logo, quase pela manhã, e fomos em terra por mais lenha e água. E em querendo o Capitão sair desta nau, chegou Sancho de Tovar com seus dois hóspedes. E por ele ainda não ter comido, puseram-lhe toalhas. Trouxeram-lhe vianda e comeu. Aos hóspedes, sentaram cada um em sua cadeira. E de tudo o que lhes deram comeram mui bem, especialmente lacão cozido, frio, e arroz.

Não lhes deram vinho, por Sancho de Tovar dizer que o não bebiam bem.

Acabado o comer, metemo-nos todos no batel e eles connosco. Deu um grumete a um deles uma armadura grande de porco montês, bem revolta. Tanto que a tomou, meteu-a logo no beicho, e, porque se lhe não queria segurar, deram-lhe uma pouca de cera vermelha. E ele

ajeitou-lhe seu adereço detrás para ficar segura, e meteu-a no beicho, assim revolta para cima. E vinha tão contente com ela, como se tivera uma grande jóia. E tanto que saímos em terra, foi-se logo com ela, e não apareceu mais aí.

Andaram na praia, quando saímos, oito ou dez deles; e de aí a pouco começaram a vir mais. E parece-me que viriam, este dia, à praia quatrocentos ou quatrocentos e cinquenta.

Traziam alguns deles arcos e setas, que todos trocaram por carapuças ou por qualquer coisa que lhes davam. Comiam conosco do que lhes dávamos. Bebiam alguns deles vinho; outros o não podiam beber. Mas parece-me, que se lho ave-

[Fol. 10 v]

[ナウ船へ戻ると]サンチョ・デ・トヴァールは、今夜はふたりを手厚く遇し^{まか}賄ってやるように、と申しつけました。ふたりとも、与えられた食事はすべて食べました。彼みずから語ったところによると、シーツを敷いた寝台まで、ふたりのために作らせた、とのことでした。その夜、ふたりは[ナウ船で]眠り、ゆったりとくつろぎました。

本日に関して記すべきことは、これ以上、何もありません。

木曜日、4月末日、朝方、私たちはさっそく食事をとりました。そしてさらに多くの水と薪を求めて、陸に上がりました。いよいよ総司令官が本ナウ船を出ようとすると、サンチョ・デ・トヴァールがみずからの客人ふたりを連れてやってきました。食事がまだでしたので、彼に手巾があてがわれました。食事が運ばれてきて食べました。客人たちは、それぞれ椅子に腰かけさせました。私たちの供したものをすべて——特に煮ぎまし²⁵のハムと飯を——、ふたりは、おいしそうに食べました。葡萄酒はやりませんでした。サンチョ・

²⁵ 原文 “de todo o que lhes deram comeram muy bem. especialmente lacam cozido frio e arroz”. カミーニャは、たとえば他動詞——直接目的語を従える——comerの直接目的語の前に前置詞deを挟み、直接目的語を包み込む概念「全体」の、その「一部」のみに言及するという用法を用いている。このdeを partitivoと呼び、「限定詞」とでも訳せばよいであろうか。この用法は今なお、たとえばフランス語やイタリア語において、“現役”そのもの、というより義務的である。たとえば、フランス語では “Donnez-moi du pain”, イタリア語では “Datemi del pane” と言うように(尾河直哉氏によれば、現代イタリア語にあっては partitivoの使用がフランス語におけるほどには義務的ではないという)。少なくともフランス語にあっては partitivoが一般的に保存されているのである(cf. Nunes, *Compêndio de Gramática Histórica Portuguesa*, p.124)。理窟をこねれば、「パンをください」と言ったとて、世の中のパンをすべて(!)ください、という意味であるはずはない。ここで言及されているのは、「パン」という総和的な概念の、あくまでその一部にすぎない。

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）
デ・トヴァールが、あまりうまそうには飲まぬ、と申しますので。

食事が済むと、私たちは皆、舂に乗り込みました。ふたりも一緒でした。ある見習い水夫がそのひとりへ、ひどく捻れた、猪のりっぱな^{きは}牙をやりました。彼はこれを手に取ると、さっそく唇に嵌め込みました。ところがしっくり固定しないので、[これを使えばしっくりするかもしれないと、]赤い蠟を、ほんの少々与えました。すると彼は、蠟が有する粘着性を賢く用いて牙を固定させ、それを唇に刺し込み、牙の捻れを上に向けたのであります。牙をつけているときの喜びよときたら、それはもう、大変なお宝を得たかのようにありました。陸に上がると、牙をつけたまま、たちまちどこかへ立ち去り、もう二度とそこには姿を見せませんでした。

私たちの上陸時、浜を往来していたのは、およそ8人か10人でありましたろうか。しばらくすると、もっと大勢が押し寄せはじめました。この日は、400～450人くらいがやってきたか、と思われます。

弓・矢を携えてきた連中もいましたが、彼らは、そのすべてをカラプサ帽や、我らの差し出す何らかの品と引き換えてしまいました。私たちの振舞うもので、彼らは我らと食事を共にしました。葡萄酒は飲む者も、飲まぬ者もいました。しかし、慣れれば、喜んで飲むであろうと思われます。

zarem que o beberam de boa vontade. / andauã todos

日塾はかつて、一応はヌーネスに依拠して、現代ポルトガル語では、*partitivo* は原則的には消滅してはいるものの、*Dê-me disso.* (それ[の一部]をください)とか、*Traga-me daquilo.* (あれ[の一部]を持ってください)などの表現が、特殊な例としては残されている、と記述したことがある。

が、この点に関し、2013年8月、ポルトガル語集中講座に参加する一生徒を指導するため訪れたコヴィリヤンで、親友のリタ先生が、またもや蒙を啓いてくれることになった。すなわち、この *partitivo* は、古い時代のみ用法であるどころか、イベリア半島のポルトガル語において、今なお“現役”である、と——たとえばこんな状況下で。カフェでゆったりビールだの水だの飲んでるところへ、友達が急ぎの用事を携え、息せき切って走り込んでくる。ハアハア言いながら用事を伝えようとするが、喉の渇きがひどくてうまく言葉にならぬ。そんなとき、用事を受けるほうは、命令法を用い、“*Bebe da minha água*”(これでも飲めや——*beber* は他動詞であるから前置詞の *de* は原則としては不要)と言って友達に自分の飲んでいる水を飲ませてやる。この水は「私」が飲みつつある水全部では決してなく、あくまでその一部。この *de* が *partitivo* と称されるゆえんがまさにここにある。

「書翰」にはその実例が幾例か見え、文脈を吟味してみると、上記の理窟がよく貫かれていると判明する。和訳では、他動詞の直接目的語へ及ぼす行為があくまで部分的・限定的にとどまる、とわかるようなくふうを施してみた。

tam despostos e tam bem feitos e galantes cõ suas
timturas que pareciam bem. / acaretuam desa le
nha quamta podiam com muy boas uomtades e le
uãuana aos batees e amdauam ja mais mansos
e seguros antre nosdo que nos andauamos antreles. /
foy ocapitã com alguis denos huã pedaço per este
aruoredo ataa huã rribeira grande e de muita agoa
que anoso parecer era esta meesma que vem teer
aa praya em que nos tomamos agoa. / aly jouuemos
huã pedaço bebendo e folgando ao longo dela
antrese aruoredo que he tamto e tamanho e tam ba
sto e de tantas prumajeos que lhe nõ pode homẽ dar
comto. ha antrele mujtas palmas deque colhemos
mujtos e boos palmjtos. / / quando saymos dobatel
disse ocapitã que serja boo hirmos dereitos aacruz q̃
estaua emcostada ahuã aruore junto com orrio perase
poer de manhaã que he sexta feira e que nos posese
mos todos em giolhos e abejasemos pera eles veerem
ho acatameto que lhe tijnhamos. e asy o fezemos. /
Eeses x ou xij que hy estauam acenaramlhes que
fezesem asy e foram logo todos beijala. / pareçeme
jente de tal jnoçencia que se os home emtendese
e eles anos. que seriam logo xpaãos por que eles
nõ teem nem emtendem em nhuã creemça
segº pareçe. Epor tamto se os degradados que aqui
am de ficar. aprenderem bem asua fala eos em
tenderem. / nom doujdo segº asanta tençam de
vosa alteza fazeremse xpaãos e creerem na nossa
samta fẽ. aaqual praza anosso Sñor que os traga. /
por q̃ certo esta jente he boa e de boa sijnpresidade

e enpremaersea ligeiramete neeles qualq̃r cru

[Fol. 11]

zarem, o beberão de boa vontade.

Andavam todos tão dispostos, tão bem feitos e galantes com suas tinturas, que pareciam bem. Acarretavam dessa lenha, quanta podiam, com mui boa vontade, e levavam-na aos batéis.

Andavam já mais mansos e seguros entre nós, do que nós andávamos entre eles.

Foi o Capitão com alguns de nós um pedaço por este arvoredo até uma ribeira grande e de muita água que a nosso parecer, era esta mesma, que vem ter à praia, e em que nós tomámos água.

Ali ficámos um pedaço, bebendo e folgando, ao longo dela, entre esse arvoredo, que é tanto, tamanho, tão basto, e de tantas prumagens, que homem as não pode contar. Há entre ele muitas palmas, de que colhemos muitos e bons palmitos.

Quando saímos do batel, disse o Capitão que seria bom irmos direitos à Cruz, que estava encostada a uma árvore, junto com o rio, para se erguer amanhã, que é sexta-feira, e que nos puséssemos todos em joelhos e a beijássemos para eles verem o acatamento que lhe tínhamos. E assim fizemos. A esses dez ou doze que aí estavam acenaram-lhe que fizessem assim, e foram logo todos beijá-la.

Parece-me gente de tal inocência que, se homem os entendesse e eles a nós, seriam logo cristãos, porque eles, segundo parece, não têm, nem entendem em nenhuma crença.

E portanto, se os degredados, que aqui hão-de ficar aprenderem bem a sua fala e os entenderem, não duvido que eles, segundo a santa intenção de Vossa Alteza, se hão-de fazer cristãos e crer em nossa santa fé, à qual praza a Nosso Senhor que os traga, porque, certo, esta gente é boa e de boa simplicidade. E imprimir-se-á ligeiramente neles qualquer cu-

[Fol. 11]

連中は皆、気分よく、体格もすばらしく、さらに、あの染料のおかげで優美そのものであり、その見栄えのよさといったらありませんでした。彼らは実に快く、荷車にぎりぎりまで薪を積み込み、それを斛まで運んでくれました。

今や連中は、私たちの間では、まことにおとなしく、安心して振舞っています。それはもう、私たちが彼らの間にいるとき以上であります。

総司令官は、私たちの一部と一緒に、しばし樹林の中を歩きました。やがて大きな、水量豊かな川に出ました。これは浜へと続き、私たちが水を汲んだあの小川と同じであると思われました。

樹林に囲まれた小川のほとりに、私たちはしばしとどまり、葡萄酒を飲んだり遊んだりしました。あたりの樹林は、これはまた大変なもので、とてつもなく広大で鬱蒼とし、その樹木は数知れずといったところです。樹林の間には椰子がたくさんあり、そこから私たちは、多数のすばらしい若芽バルミートを採りました。

私たちが艇を出るとき、総司令官はこう言いました。今、十字架は、川のそばで、木にもたれさせてある。あす金曜日、立てることにするが、我らはそこまでまっすぐに向かうのがよろしかろう。そして十字架へ懐く我らの尊崇の念が連中にもわかるよう、皆あげてひざまず跪き、これに接吻しようではないか、と。一同、そのとおりにしました。居合わせていた10人か12人の連中へ、我らのやるとおりにせよ、と身振り手振りで伝えますと、さっそく皆、十字架へ接吻しに来ました。

私には、彼らはまことに純心無垢な人々と見受けられます。もし、私たちが彼らと意思の疎通を計りあえるなら、彼らはただちにキリスト教徒となるであろう、と申してよいのであります。なぜなら、彼らはいかなる信仰も有さず、信仰との関わりもない、とそう思われるからであります。

したがって、当地に残ろうとする流刑囚たちが、もし彼らの話し言葉をよく学び、その気持ちを汲めるようになれば、陛下の敬虔なる御企図に従い、彼らは必ずやキリスト教徒となり、わが聖なる信仰に入るであります。私はこれを信じて疑いません。主よ、願わくは、彼らをわが信仰へと導き給え。かく願うのは、この人々は、確かに善良で、好ましき純情さを具えているからであります。信仰について申せば、私たちが与えたいと願ういかなる刻印も、彼らの内に楽々とお擦せるであります。

nho que lhes quiserem dar e logo lhes nosso S^{or} deu
boos corpos e boos rostros coma boos homees. e ele
que nos per aquy troue creo que nom foy sem causa
e por tanto Vosa alteza pois tanto deseja acrecentar

na santa fe catolica, deue emtender em sua salua
çam e prazera ads que com pouco trabalho sera asy /
eles nõ lauram nem criam nem ha aquy boy nem
vaca nem cabra nem ovelha nem g^a nem out^a nhũa
alimarea que costumada seja ao viuer dos homees
ne come se nõ dese jnhame que aquy ha mujto e
desa semente e frutos que atera e as aruores de sy
lançam. e com jsto andam taaes e tam rrijos e tã
nedeos. queo nõ somosnos tamto com quanto trigo
e legumes comemos. / em quanto aly este dia am
daram senpre ao soõ dhuũ tanbory nosso dançarã
e bailharã cõ os nosos. / ã maneira que
sam muito mais nosos amj
gos que nos seus. / se lhes homẽ acenaua se queriã
vĩjr aas naaos fazianse logo prestes pera jssõ e tal
maneira que seos homẽ todos quisera comujdar. /
todos uieram. porem nõ trouemos esta noute
aas naaos se nõ iijj ou b .s. ocapitã moor dous
e simã de miranda huũ que trazia ja por paje
e airez gomez outro asy paje. / os queo capitam
trouue era huũ deles huũ dos seus ospedes que
aa primeira quando aquy chegamos lhe trouerã
oqual veõ aquy vestido na sua camisa e cõ
ele huũ seu jrmão os quaaes forã esta noute
muy bem agasalhados asy de vianda como deca
ma de colchoões e lençoos polos mais amansar. /
Eoje que he sesta feira primeiro dia de mayo pola
Manhaã saymos em trra cõ nossa bandeira
E fomos desenbarcar açjma do rrio contra osul

[Fol. 11 v]

nho, que lhes quiserem dar. E pois Nosso Senhor, que lhes deu bons corpos e bons rostos, como a bons homens, por aqui nos trouxe, creio que não foi sem causa.

Portanto Vossa Alteza, que tanto deseja acrescentar a santa fê católica, deve cuidar da sua salvação. E prazará a Deus que com pouco trabalho seja assim.

Eles não lavram, nem criam. Não há aqui boi, nem vaca, nem cabra, nem ovelha, nem galinha, nem qualquer outra alimária, que costumada seja ao viver dos homens. Nem comem senão desse inhame, que aqui há muito, e dessa semente e frutos, que a terra e as árvores de si lançam. E com isto andam tais e tão rijos e tão nédios que o não somos nós tanto, com quanto trigo e legumes comemos.

Neste dia, enquanto ali andaram, dançaram e bailaram sempre com os nossos, ao som dum tamboril dos nossos, em maneira que são muito mais nossos amigos que nós seus.

Se lhes homem acenava se queriam vir às naus, faziam-se logo prestes para isso, em tal maneira que se a gente todos quisera convidar, todos vieram. Porém não trouxemos esta noute às naus, senão quatro ou cinco, a saber: o Capitão-mor, dois; Simão de Miranda, um, que trazia já por pajem; e Aires Gomes, outro, também por pajem.

Um dos que o Capitão trouxe era um dos hóspedes, que lhe trouxeram da primeira vez, quando aqui chegámos, o qual veio hoje aqui, vestido na sua camisa, e com ele um seu irmão; e foram esta noute mui bem agasalhados, assim de vianda, como de cama, de colchão e lençóis, para os mais amansar.

E hoje, que é sexta-feira, primeiro dia de Maio, pela manhã, saímos em terra, com nossa bandeira; e fomos desembarcar acima do rio contra o Sul,

[Fol. 11 v]

わが主はまた、あたかも善良な人々に対し給うが如く、彼らへりっぱな肉体と、すばらしい容貌をお与えになりました。主が私どもを当地へ導き給うたのは、しかるべき理由があつてのことと、私はそう考えます。

ですから、聖なるカトリック信仰を増進せしめんと切望なさるなら、陛下よ、彼らの救霊について聖慮を賜わらねばなりません。デウスよ、願わくは、いとも僅かな努力でもって、これが成就するに至るよう、取り計らい給え。

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

彼らは耕作したり〔獣を〕飼養したりしません。ここには、牡牛も牝牛も、はたまた、山羊も羊も鶏も、人の暮らしに寄り添って生きるを常とする他のいかなる獣もいません。彼らはここにたくさんあるヤムイモ、それから、土や木そのものが生み出す雑穀や果実のほか何も食べません。にもかかわらず、彼らは大変な人たちで、頑強きわまりなく、肌の艶もよく、我らなど小麦や野菜を摂るにもかかわらず、とうてい彼らには及びません。

この日、連中はそこにいるあいだ、私たちの人数が叩く太鼓の音に合わせ、絶えず我らの仲間と踊ったり舞ったりしました。それはもう、私たちが彼らへ示す友愛以上に、彼らこそが私たちへそれを示している、というありさまでした。

もし彼らへ、君ら、ナウ船へ行きたいか、と身振りで訊ねたとします。彼らはたちまちその支度にとりかかったであります。その乗り気なさまは、全員を招きたいと言えば、全員が来てしまうのではないか、と思われるほどでありました。しかしその夜、ナウ船へ連れてゆくのは4～5人にとどめました。すなわち総司令官の〔選んだ〕ふたり、それからシマン・デ・ミランダの〔選んだ〕ひとり。彼はこれをもう小姓として連れていきます。それからアイレス・ゴメスの〔選んだ〕ひとり。これも小姓として〔付き添わせています〕。

〔総〕司令官が連れてきたうちのひとりこそ、あのと時の客人の相方でした。我らが当地へ着いて最初に総司令官のもとへ連れていったあの男——。きょうは〔総司令官からもらった〕下着に身を包んで現われました。付き添いは彼のきょうだいでした。今夜、ふたりは、食事ばかりでなく、マットレス、シーツを敷いた寝台まであてがわれ、すばらしいもてなしを受けました。すべて、連中をいっそう手なずけるためであります。

本日、金曜日、5月1日、朝。私たちは、わが御旗をもって陸に下り立ちました。私たちは例の河をやや遡ったあたりから、南のほうへ向けて下船しました。

onde nos pareceo que serja mjlhor chantar a cruz
pera seer millhor vista. e aly asijnou o capitã onde
fezesem acoua peraachantar. Eem quanto aficarã
fazendo. / ele com todos nos outros fomos pola
abaixo do rrio onde ela estaua. / trouemola da
ly cõ eses rreliosos e sacerdotes diante cantã
do maneira depreçisam. / herã ja hy alguũs de
les obra de lxx ou lxxx e quando nos asy virã

vĩjr / alguũs deles se forã meter debaixo dela
ajudarnos. / pasamolo rrio ao longo dapraya
e fomola poer onde avia de seer que sera do
rrio obra de dous tiros de beesta. / aly andando
nysto vijñjram bem cl ou mais. / chentada
acruz cõ as armas e deuisa de vosa alteza
que lhe prim^o pregarom armarom altar ao pee
dela. / aly dise misa opadre frey amrique aqual
doy cantada e ofeçada per eses ja ditos. / aly
esteueram cõ nosco aela obra de l ou lx deles
asentados todos em giolhos asy coma nos e quã
do veo ao avanjelho que nos erguemos todos ã pee
cõ as mãos leuantadas. eles se leuantaram
cõ nosco e alçaram as mãos. estando asy ataa
seer acabado. / e entam tornaranse aasentar co
ma nos. E quando leuantarom ads que nos
posemos em giolhos. eles se poserã todos asy co
ma nos estauamos cõ as mãos leuantadas.
e em tal maneira asesegados que certefico
avosa alteza que nos fez mujta deuaçom. /
esteuerã asy cõ nosco ataacabada acomunhã
Edepois dacomunham. comungaram eses rre
Legiosos e sacerdotes eocapitã cõ alguũs de
Nos outros. / alguũs deles por o sol seer grãde
e nos estando comungando aleuantarãsse

[Fol. 12]

onde nos pareceu que seria melhor cantar a Cruz, para melhor ser vista. Ali assinalou o Capitão o lugar, onde fizessem a cova para a cantar.

Enquanto a ficaram fazendo, ele com todos nós outros fomos pela Cruz abaixo do rio,

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

onde ela estava. Dali a trouxemos com esses religiosos e sacerdotes diante cantando, em maneira de procissão.

Eram já aí alguns deles, obra de setenta ou oitenta; e, quando nos viram assim vir, alguns se foram meter debaixo dela, para nos ajudar. Passámos o rio, ao longo da praia e fomo-la pôr onde havia de ficar, que será do rio obra de dois tiros de besta. Andando-se ali nisto, vieram bem cento e cinquenta ou mais.

Chantada a Cruz, com as armas e a divisa de Vossa Alteza, que primeiramente lhe pregaram, armaram altar ao pé dela. Ali disse missa o P.^e Fr. Henrique, a qual foi cantada e oficiada por esses já ditos. Ali estiveram connosco a ela obra de cinquenta ou sessenta deles, assentados todos de joelhos, assim como nós.

E quando veio ao Evangelho, que nos erguemos todos em pé, com as mãos levantadas, eles se levantaram connosco e alçaram as mãos, ficando assim, até ser acabado; e então tornaram-se a assentar como nós. E quando levantaram a Deus, que nos pusemos de joelhos, eles se puseram assim todos, como nós estávamos com as mãos levantadas, e em tal maneira sossegados, que, certifico a Vossa Alteza, nos fez muita devoção.

Estiveram assim connosco até acabada a comunhão, depois da qual comungaram esses religiosos e sacerdotes e o Capitão com alguns de nós outros.

Alguns deles, por o sol ser grande, quando estávamos comungando, levantaram-se,

[Fol. 12]

そここそ、最もはっきりと十字架を認めうるよう十字架を立てるには、いちだんとふさわしいところかと思われました。そこに総司令官は場所を指し示し、十字架を立てるための穴を掘らせました。

命を受けた者たちが穴を掘っているさなか、総司令官は、かねてより置いてあった十字架を求め、川向こうへ涉りました。我らはそこから十字架を運びました。さながら聖体行列の如く、修道士と司祭とが聖歌を詠唱しつつこれを先導しました。

あたりには彼ら〔先住民〕の一部がたむろしていました。その数、およそ70～80人。私たちが十字架を運んでくるのを見て、手助けしようと、その下に割り込んでくる者もいました。私たちは浜と並行する川を涉り、予定の地点へ十字架を置きにゆきました。そこは、川から弩を2度射て達するくらいのところでありましたろうか。こういうことにかかりきつ

ている間に、優に 150 人かそれ以上の人々がやってきました。

十字架が立てられると、我らはいの一番に、陛下の紋章と標章をこれに釘づけし、続いてそのたもとに祭壇をこしらえました。エンリケ師は、そこでミサを執り行ないました。そして上述の人々により、聖歌が詠唱され、聖務が執り行なわれました。彼ら〔先住民〕のうち 50 人か 60 人くらいが、私たちとともにミサに臨みました。我らと同様、皆跪いて。

ミサが福音書朗読へ進み、私どもが皆、両手を上げ、立ち上がると、彼らもともに立ち上がり、両手を上げ、福音書朗読が済むまで、その姿勢を保ちました。やがて私たちに倣い、再び腰をおろしました。聖体奉挙の儀に移り、私たちが跪くと、彼らも皆、そのようにしました。私たちが両手を上げ続けていたときと同様に。まことに彼らの肅然としたありさま、私は陛下にはっきりと申し上げますが、それは我らに大いなる敬神の念を催さめました。

聖体拝領が済むまで、彼らはそのまま私どもにつきあいました。このあと、修道士と司祭、それに総司令官が私どもの一部とともに聖体を拝領しました。

私たちが聖体を拝領しているそのさなか、太陽がざらざらと照りつけるので、彼らの一部は立ち上がりました。が

e outros esteuerã e ficarom. / huũ deles home
de l ou lb anos ficou aly cõ aqueles que fica
ram. / aquele em nos asy estando ajumtaua
aqueles que aly ficaram e ajnda chamaua
outros. / este andando asy antreles falando
lhes acenou cõ odedo perao altar e depois mostrou
odedo pera o ceo coma que lhes dizia alguũa
cousa debem e nos asy otomamos. / acabada
amisa tirou o padre a vestim^{ta} decjma e ficou
naalua e asy se sobio jumto cõ ho altar em huũa
cadeira e aly nos preegou do auanjelho e dos a
postolos cujo dia oje he trautando ěfim
dapreegaçom deste voso prosegujmêto
tã santo e vertuoso que nos causou majs de

uaçam. / eses q̃ aapreegaã senpre esteueram
estauã asy comanos olhando peraele. / eaçle
que digo chamaua alguũs vijnhã eoutros hiamse e
acabada apreegaçom. trazia njcolao coelho
mujtas cruces destanho com cruçufiços que
lhe ficarom ajnda daoutra vijnda e ouuerã
por bem que lancassem acada huũ sua ao pes
çoço. / pola qual cousa se asentou opadre frey
anrique ao pee da cruz e aly ahuũ ehuũ
lançaua sua atada em huũ fio ao pesçoço fa
zendolha primeiro beijar e aleuantar as ma
ãos. / vijnhã ajssso mujtos e lancarãnas to
das que serjam obra de Rou l. / e jsto aca
bado era ja bem huũa ora depois de meo dja
vjemos aas naos acomere onde ocapitã tro
uee cõsigo aquele meesmo que fez aos out^{os}
aquela mostrança perao altar e perao ceo e
huũ seu irmão com elle ao qual fez mujta

[Fol. 12 v]

e outros estiveram e ficaram. Um deles, homem de cinquenta ou cinquenta e cinco anos, continuou ali com aqueles que ficaram. Esse, estando nós assim, ajuntava estes, que ali ficaram, e ainda chamava outros. E andando assim entre eles falando, lhes acenou com o dedo para o altar e depois apontou o dedo para o Céu, como se lhes dissesse alguma coisa de bem; e nós assim o tomámos.

Acabada a missa, tirou o padre a vestimenta de cima e ficou em alva; e assim se subiu junto com o altar, em uma cadeira. Ali nos prègou do Evangelho e dos Apóstolos, cujo é o dia, tratando, ao fim da pregação, deste vosso prosseguimento tão santo e virtuoso, o que nos aumentou a devoção.

Esses, que estiveram sempre à pregação, quedaram-se como nós olhando para ele. E

aquilo, que digo, chamava alguns que viessem para ali. Alguns vinham e outros iam-se. E, acabada a pregação, como Nicolau Coelho trouxesse muitas cruces de estanho com crucifixos, que lhe ficaram ainda da outra vinda, houveram por bem que se lançasse uma ao pescoço de cada um. Pelo que P.^e Fr. Henrique se assentou ao pé da Cruz e ali, a um por um, lançava a sua atada em um fio ao pescoço, fazendo-lha primeiro beijar e alevantar as mãos. Vinham a isso muitos; e lançaram-nas todas, que seriam obra de quarenta ou cinquenta.

Isto acabado – era já bem uma hora depois do meio-dia – viemos a comer às naus, trazendo o Capitão consigo aquele mesmo que fez aos outros aquela mostrança para o altar e para o Céu e um seu irmão com ele. Fez-lhe muita

[Fol. 12 v]

そのままじっとしている者もいました。この中に年齢50か55くらいの男がいます。彼はじっとしている仲間にしばらく付き添っていました。がやがて、私どもを尻目に、あたりの仲間を呼び集め、さらには他の仲間へ声をかけました。男は何やらしゃべりながら、仲間のあいだを行ったり来たりしています。やがて指で祭壇をさし、その後、天へ指を向けました。何かりっぱなことを言っているかのように。私たちはそう取りました。

ミサが済むと、エンリケ師は祭服を脱ぎ、白衣姿になりました。そしてそのまま、祭壇脇の椅子に昇りました。師はそこから私たちに、福音のこと、本日がその祝日にあたる諸使徒〔聖フィリーポと聖ティアゴ〕のお話をなさいました。そして説教の終わりには、陛下の至純にして高德なるこの事業にお触れになりました。それがまた、我らの敬神の念をいやが上にも高めました。

説教に終始立ち会っていた彼ら〔先住民〕は、私たちと同様、師を見つめて身じろぎもしません。例の男が数人の仲間へ、こっちへ来い、ときりに声をかけています。それに呼応して、来る者もいれば、〔無視して〕去る者もいました。ニコラウ・コエーリョが、前回の渡航以来〔ニコラウ・コエーリョは、ヴァスコ・ダ・ガマの指揮した第一回のインド派遣船隊にも参加している〕、手もとに残っていた、^{はりつけ}磔のクリスト像のついた、^{オチ}錫の十字架をたくさん持ってきました。そこで我らは、ひとりひとりの首にこれを懸けてやったらよかろう、と考えました。エンリケ師は、十字架のかたわらに腰をおろし、紐に結んで、ひとりひとりの首に懸けてやりました。師はその際、まずこれに接吻をさせ、そしてその両手を高々と上げさせました。これを目当てに、大勢の男どもが続々やってきました。40～50 はあつたであろう錫

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

の十字架を、我らはすべて彼らに懸けてやりました。

以上を終えると、正午をもう一時間も廻っていましたので、私たちはナウ船へ食事に戻りました。その際、総司令官は、仲間に向かって祭壇や天を指さすしぐさをしていた例の男を同行させました。彼のきょうだいがこれに付き添いました。総司令官は、彼に対して大いなる礼を尽くし、

homrra e deulhe huũma camisa mourisca eao
outro huũa camisa destoutras. / e seg^o oque
amỹ e atodos pareçeo. esta jemte nõ lhes faleçe
out^a cousa peraseer toda xpaã ca entende
renos. / por que asy tomauam aquillo que nos
viam fazer coma nos meesmos. per onde pareçeo
atodos que nhuũa jdolatria nõ adoraçom teem. /
Ebem creo que se vosa alteza aquy mandar quem
mais antreles de vagar ande. que todos serem
tomados ao desejo de vosa alteza. / e pera jssso se alguem
vjer nõ leixe logo de vjir clerigo peraos bautizar
nossa fe pelos dous degradados que aquy ã
por que ja emtã teerã mais conhecimẽto de
treles ficam os quaes ambos oje tam bem co
mungaram. / antre todos estes que oje vierã
nõ veo mais que huũa molher moça aqual
esteue sempre aamissa. aaqual deram huũ
pano cõ que se cobrise e poserãlho darredor
desy. / pero ao asentar nõ fazia memorea deo
mujto estender perase cobrir. / asy S^{or} que ajnocẽ
cia desta jemte he tal que a dadam nõ seria
mays quanta em vergonha. / ora veja vosa al
teza quem em tal jnocemçea vjue. ensinam
dolhes oque perasua saluacom perteeçe. se se cõ

uerteram ou nom. / acabado isto. / fomos asy
perante eles beijar acruz e espedimonos e vj
emos comer. /
creo Sñor que com estes dous degradados que
aquy ficam. / ficam mais dous grometes
que esta noute se saíram desta naao no esquj
fê em trra fogidos. / os quaaes nã vierã majs
e creemos que ficaram aquy por ã demanhaã
prazendo ads fazemos daquy nosa partida /

[Fol. 13]

honra e deu-lhe uma camisa mourisca e ao outro uma camisa destoutras.

E, segundo que a mim e a todos pareceu, esta gente não lhes falece outra coisa para ser toda cristã, senão entender-nos, porque assim tomavam aquilo que nos viam fazer, como nós mesmos, por onde nos pareceu a todos que nenhuma idolatria, nem adoração têm. E bem creio que, se Vossa Alteza aqui mandar quem entre eles mais devagar ande, que todos serão tornados ao desejo de Vossa Alteza. E por isso, se alguém vier, não deixe logo de vir clérigo para os baptizar, porque já então terão mais conhecimento de nossa fê, pelos dois degredados, que aqui entre eles ficam, os quais hoje também comungaram ambos.

Entre todos estes que hoje vieram, não veio mais que uma mulher moça, a qual esteve sempre à missa e a quem deram um pano com que se cobrisse. Puseram-lho a redor de si. Porém, ao assentar, não fazia grande memória de o estender bem, para se cobrir. Assim, Senhor, a inocência desta gente é tal, que a de Adão não seria maior, quanto a vergonha.

Ora veja Vossa Alteza se quem em tal inocência vive se converterá ou não, ensinando-lhes o que pertence à sua salvação.

Acabado isto, fomos assim perante eles beijar a Cruz, despedimo-nos e viemos comer.

Creio, Senhor, que com estes dois degredados ficam mais dois grumetes, que esta noite se saíram desta nau no esquife, fugidos para terra. Não vieram mais. E cremos que ficarão aqui, porque de manhã, prazendo a Deus, fazemos daqui partida.

[Fol. 13]

ムスリム風の下着を与えました。もうひとりには普通の下着をやりました。

私にも一同にも等しく考えられるのでありますが、私たちの言葉をわかってくれぬことを棚上げにすれば、この人々に、挙げてキリスト教徒となるため、欠如しているものは何ひとつありません。彼らは、私どものやることを見てはそれを真似ることに余念がなかったからであります。そのあたりから、私たち一同は感じたのであります、偶像崇拜や自然崇拜とは、彼らはまったく無縁なのではないかと。私は固く信ずるのでありますが、もし陛下が、彼らに交じってよりゆったりと暮らすことのできる誰かを、ここへお遣りになるならば、彼らは挙げて陛下のお望みへ帰するでありましょう。ですから、もし誰かがこちらへやってくるのであれば、彼らに洗礼を施す修道士も、陛下よ、どうか、迷わずお送りください。その頃には、当地の人々も、ふたりの流刑囚によって、わが聖なる教えに関し、より多くの知識を得ているでありましょう。ふたりは彼らに交じってここにとどまるのでありますが、ともに、きょう、聖体拝領に与りました。

きょうやってきた連中に交じる若々しい女は、ただひとりだけでありました。彼女はじつとミサに臨んでいましたが、身体を覆いなさいと言い添えて、布地を一枚あげたあの女であります。私たちの仲間は彼女の身の廻りにこの布地を掛けてやったのですが²⁶、み

²⁶ 原文 “aaqual deram huã pano cõ que se cobrise e poserãlho darredor desy”. *poserã* (*puseram* の古形。 *põr* の完了過去・三人称・複数)の主語は「私たちの仲間」つまり「ポルトガル人たち」であるのに、最後の *sy* (*si* の古形)は再帰代名詞としてではなく三人称の目的格として使われる。英語の *yourself, himself, herself, themselves* に当たる *si* や、 *with yourself, with himself, with herself, with themselves* に当たる *consigo* は、ポルトガル語では、再帰形として用いるのが原則だ (Chaves de Melo, *Gramática Fundamental da Língua Portuguesa*, p.218)——特に書き言葉では、たとえば、“*Você sempre pensa em si*”(君はいつも自分のことしか考えない)とか、“*Pedro realmente só conta consigo mesmo para essa empresa*”(その企てのためペドロが頼りにできるのは、自分だけだ)というふうだ。私自身、ポルトガル語の文章を記すに際し、*si* と *consigo* は再帰形としてしか用いない。

ところが、この *si* および *consigo* は、特にポルトガルにおいて、再帰形としてではなく、三人称の目的格として使われることが頻繁にあり (*ibid.*)、そのことは、ポルトガルの日常会話で実感することができるだろう。実際、バイラ・インテリオール大学におけるポルトガル語夏季集中講座で、本学生にポルトガル語を教えてくださいタ先生は、私との会話で、*Tenho um livro a oferecer para si.* ([あなたに]差し上げる本が一冊あるのよ)とか、*Vou conversar consigo no café.* (いつものカフェで[あなたと]お話ししましょう)などとおっしゃる。

日本語においてはもちろんのこと、ポルトガル語にあっても、会話で相手をどう呼ぶか、失礼のないように、さりとして、場違いな、あるいは、慇懃無礼な感じを与えぬため、相手を待遇する度合いというか、相手との距離感を正しく計り、いかなる対称詞を用いるのが最も適切か、そのため人称に関する一種の(品定め)

ずから[の裸体]を覆うべく、布地を広げようとする心配りなど、彼女には大してありません。このように、陛下よ、当地の人々の無邪気さときたら、それはもう大変なものでありまして、廉恥ということに関する限り、アダン[アダム]の無邪気さも彼らのそれには及びません。

ここで陛下よ、お考えください。これほどの無邪気さに包まれて暮らす者が[クリストの教えに]改宗するかどうか、ということ。魂の救いに関わることを教えてやりさえすれば[それは必ず実現を見るであります]。

[聖体拝領を]終えると、私たちは彼らの前で十字架に接吻をしにゆき、彼らに別れを告げ、[ナウ船へ]食事に戻りました。

陛下よ、私の見るところ、見習い水夫がふたり、かの流刑囚兩名とともに[当地に]残るようであります。と申すのは、ふたりは当夜、舢舨で当ナウ船を出、陸のほうへ脱走してしまったからであります。もうふたりは戻ってきませんでした。ふたりは当地に残るのであろう

を常に心がける必要がある。

原則として、再帰形としてしか *si* や *consigo* を用いないブラジルのポルトガル語にあっても、*você* ではやや敬意が足りず、さりとて *senhor* ではよそよそしく場違いである……と、迷うような雰囲気の中では、グラッドストーンによると、三人称として相手を指して *si* とか *consigo* を用いることも、なくはないそうである (*ibid.*, p.170)。日埜はかつて、このようなケースにおける *si* や *consigo* を「さしずめ日本語の『おたく』に相当するような対称詞であろう」と書いたことがあるのだが、これにはおそらく訂正を施す必要がある。少なくともポルトガル語にあっては、三人称として話し相手を指す *si* や *consigo* には、最低限の敬意がこもっていると見てよいからだ。*si* や *consigo* は、「おたく」の如く、ぞんざい、とまでは言えなくとも、一種よそよそしさを感じさせる対称詞では、決してない。

私自身、*si* や *consigo* を、再帰形としてしか使う認識がなかったので、必要最低限の敬意がこもった対称詞としては、なかなか使う勇気が持てなかったのだが、話し相手に対し、決して礼を失することのない表現である、と納得できてからは、ポルトガルでは、という条件つきながら、ようやく安心してこれを使えるようになった。

新田次郎の絶筆となった『^{サウダーデ}孤愁』の主人公ウエンセスラウ・デ・モラエス(1854-1929)が、1905年1月31日付、神戸発信、リスボアの友人ジョゼ・ゴディーニョ・デ・カンポスへ宛てた書翰には、その冒頭に *si* が現われる。“*Eu (= Moraes) lembro-me muito de si (= Godinho de Campos)*”[君のことは今でもよく覚えているよ] (Jorge Dias “Uma carta de Wenceslau de Moraes inédita no Japão: notas e comentário” in *Gaidai Bibliotheca*, 54, 京都外国語大学附属図書館, 1981年)。親しい相手に語りかけるときの対称詞でありながら、これには、二人称の *ti* を用いるとき以上の丁寧さがこもっていると見てよい。

一般論として、ブラジルの日常的民衆語にこそ、古いポルトガル語の表現なり語法なり語彙がより多く残存している、という指摘が本稿の補注の基調を成すのであるが、カミーニャのこのくだりにおける *sy* (= *si*) が今日のポルトガルに遺存するかたちで一般的に使われ、ブラジルでむしろ特殊化しているという事実に関しては、これをどう説明すべきか訳注者には成案がない。

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

と、我らはそう判断します。デウスが嘉^{よみ}し給えば、私どもは朝のうちに当地を出航するからであります。

Esta terra S^{or} me parece que daponta ã mais cont^a
osul vimos ataa out^a pomta que cont^a onorte
vem de que nos deste porto ouuemos vista. / sera
tamanho que auera neela bem xx ou xxb
legoas per costa. / traz ao londo do mar em algũas
partes grandes bareiras delas vermelhas e delas
brancas e a terra por cima toda chaã e mujto chea
de grande aruoredos. / depomta apomta he toda
praya parma mujto chaã e mujto fremosa. /
pelo sartaão nos pareceo do mar mujto
grande por que aestender olhos ã podiamos
veer se ã tera earuoredos que nos pareçia
muy longa tera. / neela ataagora ã podemos
saber que aja ouro nem prata nem nhuũa cou
sa de metal nem de ferro. nem lho vjmos. / pero
attra em sy he de mujto boos aares asy frios e
etenperados coma os dantre doiro e mjnho por
ã neste tempo dagora asy os achauamos coma os
dela / agoas sam mujtas jmfimdas. E em tal
maneira he graciosa que querendoa aproueitar
darsea neela tudo per bem das agoas que tem. /
pero omjlhor fruto que neela se pode fazer me
pareçe que sera saluar esta jemte e esta deue
seer aprincipal semente que vosa alteza em
ela deue lamçar. / Eque hy ã ouuese ma
js ca teer aquy esta pousada pera esta naue
gaçam de calecut. / abastaria / quanto majs

desposiçã perase neela conprir e fazer oq̃ vossa
alteza tamto deseja .s. acrecentam^{to} danosa
santa fe /.

E neesta maneira S^{or} dou aquy avosa alteza

[Fol. 13 v]

Esta terra, Senhor, me parece que da ponta que mais contra o Sul vimos até outra ponta que contra o Norte vem, de que nós deste porto havemos vista, será tamanha que haverá nela bem vinte ou vinte e cinco léguas por costa. Tem , ao longo do mar, nalgumas partes, grandes barreiras, delas vermelhas, delas brancas; e a terra por cima toda chã e muito cheia de grandes arvoredos. De ponta a ponta, é tudo praia-palma, muito chã e muito formosa.

Pelo sertão nos pareceu, vista do mar, muito grande, porque, a estender olhos, não podíamos ver senão terra com arvoredos, que nos parecia muito longa.

Nela, até agora, não pudemos saber que haja ouro, nem prata, nem coisa alguma de metal ou ferro; nem lho vimos. Porém a terra em si é de muito bons ares, assim frios e temperados, como os de Entre Douro e Minho, porque neste tempo de agora os achávamos como os de lá.

Águas são muitas; infindas. E em tal maneira é graciosa que, querendo-a aproveitar, dar-se-á nela tudo, por bem das águas que tem.

Porém o melhor fruto, que dela se pode tirar me parece que será salvar esta gente. E esta deve ser a principal semente que Vossa Alteza em ela deve lançar.

E que aí não houvesse mais que ter aqui esta pousada para esta navegação de Calecute, isso bastaria. Quando mais disposição para se nela cumprir e fazer o que Vossa Alteza tanto deseja, a saber, acrescentamento da nossa santa fé.

E nesta maneira, Senhor, dou aqui a Vossa Alteza

[Fol. 13 v]

わが君よ。私たちが南のほうに見た岬から、北に向かってせり出す別の岬まで、この泊地より一望に収め得た陸地は、実に広大であるように思われます。海岸沿いに行くと、優に 20～25 レグアはありましょう。岸沿いには、ところどころ、あるいは赤く、あるいは白

ブラジルの“洗礼証明書”ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

い、大きな砂洲があります。陸地はあくまで平坦で、鬱蒼たる樹林にびっしりと覆われています。岬から岬までは、^{たなごころ}掌の如くきわめて平坦な、まことに美しい浜が続いています²⁷。

内奥部は、海から見ると、たいそう広大であるように思われました。視界の及ぶ限り、樹木の生い茂る土地よりほかは何も見ることではできなかったからであります。まったく、そんな土地が延々と続いているようにしか思えませんでした。

この地において今まで、私たちは、金・銀があるという情報には接していません。金属なり鉄なりで出来た何ものかが存するという消息すら得られず、そうしたものを見ることもありませんでした。しかしながら、この地それ自体はと申しますと、ひんやりとして穏やかな、実に好ましい気候に恵まれています。ちょうどエントレ＝ドウロ＝イ＝ミーニョのような。というのは、あたかも今時分、こちらのような気候をそちらで体験していますから。

水はたっぷりとあります。無尽とさえ申せます。この地はかくも恵み豊かでありますから、ただ善用しようと望みさえすれば、この地にある水のおかげで、何もかもが実を結ぶであります。

しかしながら、この地から引き出しうる最良の果実は、当地の人々〔先住民〕の靈魂を救済することでありましょう。私にはそう思われます。彼らこそ、陛下がこの地においてお播^まきになるべき主たる種子に相違ありません。

²⁷ 原文 “depomta apomta he toda praya parma mujto chaã e mujto firemosa”. 下線を附した parma であるが、いかなるポルトガル語辞書にも通常の語彙として parma は見えない。しかしコルテザンによると、l が r へ転ずるといふ音韻現象は、たとえばコインブラなどでよく聞かれるのだという。ヌーネスも、特にポルトガル北部の民衆言語において、l が r へ転換することは珍しくないと記す (cf. Nunes, *Compêndio de Gramática Histórica Portuguesa*, p.124)。とすれば、問題の parma は実のところ palma (掌・手のひら) から転じた方言的語彙、という結論を導き出すことができる。広げた palma から「平らかなもの」をイメージするのは、別段無理なことではあるまい。praya parma を praya palma (現代風綴りでは praia-palma) と考え、「椰子の生い茂る浜」と解釈してはどうか、という考えもあろうが、カミーニャは、「椰子」を表わす語彙(テキスト全篇に3例)を、一貫して palma と綴っており、ここだけ parma と綴ったとは考えにくい。

グラッドストーン教授の直話によると、たとえばブラジルはミナスジェライス州(みずからこの州の生まれである教授は、ミナスの教養ある人々が話すポルトガル語こそ、ブラジルで最も美しく規範的なそれであると自負なさっていた)の民衆語にあっても、上述と同様の言語現象が認めうるのだそうで、民衆へ説法するキリスト教某派の伝道師が“revolução das almas”(魂の革命)と言っているつもりが、それがときどき“revolução das armas”(武器の革命)と聞こえたよ、と愉快そうに笑っていらしたことをよく覚えている。

カロリーナ・ミカエリスは、この parma に関し一応補注を施してはいるが、結局はその解釈を断念してしまっている (Malheiro Dias, “Semana de Vera Cruz” in *op.cit.*, p.99, nota 57)。

このたびのカレクテー航海のための休息地である、当地がただそれだけの存在であるとしても、わが聖なる信仰の増進という、陛下の切なる願望を遂行し実現しようとする気分がみなぎってさえいれば、当面それで充分でありましょう。

わが君よ。以上のとおり、私は陛下に対し、

doque neesta vosa trra vy ese alguĩ pouco a
lmguey. ela me perdoe. / cao desejo que tij
nha de vos tudo dizer mo fez asy poer pelo
meudo. E pois que Sñor he çerto que asy
neeste careguo que leuo como em out^a qual
quer coussa que de vosso seruiço for uosa alteza
ha de seer de my mujto bem seruida. / aela
peço que por me fazer singlar merçee mã
de vñjr dajlha de sam thomee jorge dosoiro
meu jenrro. o que dela rreceberey em mujta
merçee. / beijo as mãos de vosa alteza. /
deste porto seguro da vosa jlha de vera cruz oje
sesta feira prim^o dia demayo de 1500 //

p^o uaaz de camjnha

[Fol. 14]

conta do que nesta terra vi. E, se algum pouco me alonguei, Ela me perdoe, pois o desejo que tinha de tudo vos dizer, mo fez pôr assim pelo miúdo.

E pois que, Senhor, é certo que, assim neste cargo que levo, como em outra qualquer coisa que de vosso serviço for, Vossa Alteza há-de ser de mim muito bem servida, a Ela peço que, por me fazer graça especial, mande vir da ilha de S. Tomé a Jorge de Osório meu genro – o que d'Ela receberei em muita mercê.

Beijo as mãos de Vossa Alteza.

Deste Porto Seguro, da vossa Ilha da Vera Cruz, hoje, sexta-feira, primeiro dia de Maio de 1500.

ブラジルの“洗礼証明書” ペロ・ヴァス・デ・カミーニャのドン・マヌエル王宛て書翰（1500年）

PÉRO VAZ DE CAMINHA

[Fol. 14]

この地で目の当たりにしたことを報告いたします。少しばかり冗長に流れたとしても、どうぞ御容赦ください。陛下へ一切を語ろうとする願いが、かように私をして微細いに入らしめたのであります。

ところでわが君よ、私の担う本務において、また、陛下の御用に関わるその他いっさいにおいて、断言を憚りませぬが、私は陛下に対する忠良なる奉仕者であります。このことにゆめ誤りはありません。そこで陛下にお願いがございます。私に格別の恩寵を施すと思し召おほめしになり、わが婿むこジョルジェ・デ・オゾーリオが〔流刑地の〕サン・トメ島より召還されるよう御下命ください。その御下命を私は、陛下からの格別なる恩義と肝に銘ずるであります。

陛下の御手みてに接吻申しあげます。陛下のヴェラ・クルス島、当ポルト・セグーロより。本日、金曜日、1500年5月1日。

Carta de Pedro vaz caminha so
bre o descobrimento da Terra nova
q̃ fez Pedro Alves. Feita na Ilha de
Vera Cruz em o 1.º de Maio de
1500*

Carta de p.º Vaaz
decaminha dodesco
brimêto datra
noua q̃ fez pº Alvarez

[Fol. 14 v]

*Fol. 14 v には、時期不詳ながら、「カミーニャの書翰」概要の書き込まれた文言が左右に見える。トーレ・ド・トンボの文書管理者が、メモとしてあるいは整理上の理由で、書き留めたものと思われる。左の文言から訳しておく、「ペドロ・アルヴェス〔アルヴェレス〕の成就した新天地の発見に関するペロ・ヴァス・〔デ・〕カミーニャの書翰。ヴェラ・クルスの島において1500年5月1日に作成」。右の文言は「〔ペドロ・〕アルヴェレスの成し遂げた新天地発見に関する〔ペロ・〕ヴァス・デ・カミーニャの書翰」と訳しうる。ブラジル到達当初、この地の茫漠たる広がりはまだ知られておらず、カミーニャの記載どおり、ポルトガル人には単に Ilha (島) とのみ認識されていたことがわかる。